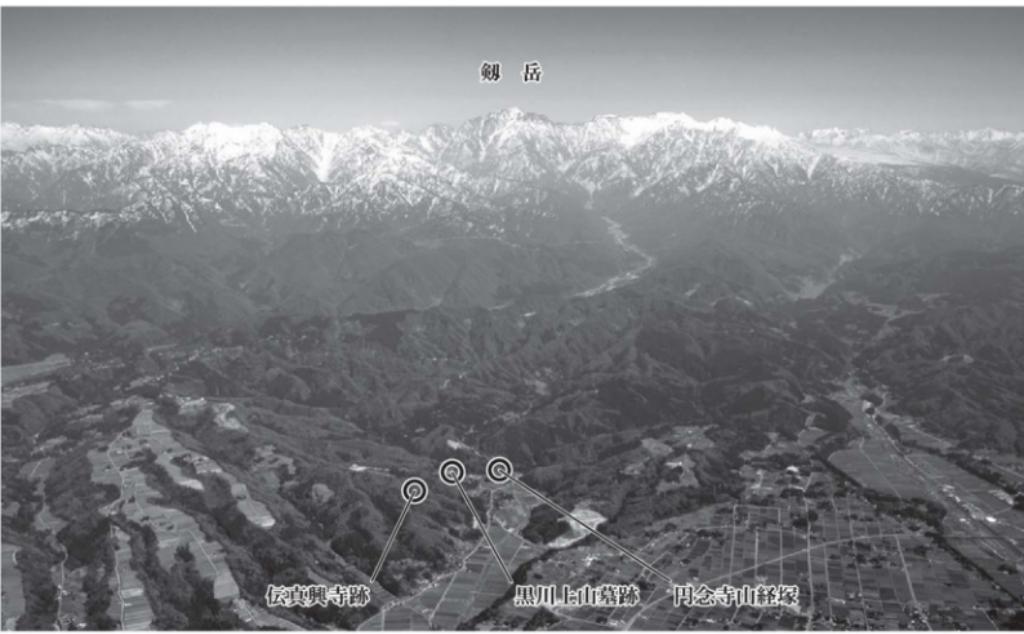


史跡上市黒川遺跡群 保存管理計画策定報告書



2009年3月
上市町教育委員会

史跡上市黒川遺跡群 保存管理計画策定報告書



2009年3月

上市町教育委員会

序

上市町は、北アルプス立山連峰の靈峰・剣岳の懷に抱かれた自然豊かな地であります。この上市町では、北陸地方で最初に発見された旧石器時代の遺跡として名高い「眼目新丸山遺跡」を嚆矢として、縄文時代には極楽寺遺跡・永代遺跡、弥生時代には江上弥生遺跡群、古墳時代には柿沢古墳群・齊神新古墳群というように、各時代を通じて富山県を代表するような遺跡を残しながら連綿として人々の営みが続けられてきました。これらの足跡を残した先人達の視線の先には、剣岳が現在と変わらぬ姿で雄々しくそびえていたでしょう。

史跡上市黒川遺跡群は、この剣岳に対する中世の信仰を物語るものとして、平成18年1月26日に国の史跡に指定されました。

史跡は、北陸地方随一の規模と内容を誇る大規模経塚群の「円念寺山経塚」、『餓鬼草子』に描かれた中世の墓地景観をそのままの姿でとどめていた「黒川上山墓跡」、山中に大規模な造成工事を施して本格的な伽藍を配置した「伝真興寺跡」の3遺跡で構成されています。これらはそれぞれが中世における経塚・墓・寺院の具体的な姿を示すだけではなく、ともに関連して中世の宗教や信仰、葬送のあり方と社会の関係などを現代に生きる私達に教えてくれています。

このような貴重な文化財を末永く後世へ伝えてゆくことは、現在に生きる私達に課せられた責務でありますが、そのためには適切な保存管理の指針が必要です。

そこで、本史跡の管理団体として指定されている上市町では、上市町教育委員会を事務局として「保存管理計画」を策定することとし、文化庁、富山県教育委員会の指導のもと、「史跡上市黒川遺跡群保存管理計画策定委員会」を設置して平成19年度・20年度の2年間にわたって検討を進めてまいりました。

ここにその成果をまとめた報告書を刊行する運びとなりましたが、本書が史跡の保存管理に際しての指針となることはもとより、地域の皆様が文化財としてその土地への意識を深めるのに役立てば幸いります。

最後になりましたが、保存管理計画の策定にご尽力いただきました委員各位、文化庁、富山県教育委員会、ならびに史跡の保護についてご理解とご協力を賜りました土地所有者の皆様をはじめとする関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成21年3月31日

上市町教育委員会
教育長 山本 靖

例　言

1. 本書は、富山県中新川郡上市町黒川地内に所在する「史跡上市黒川遺跡群 円念寺山経塚 黒川上山墓跡 伝真興寺跡」の保存管理計画策定報告書である。
2. 保存管理計画策定事業は、上市町が国庫補助金及び県補助金の交付を受けて、平成19～20年度に実施した。
3. 本事業は、「史跡上市黒川遺跡群保存管理計画策定委員会」の指導のもと、上市町教育委員会が事務局として実施した。なお、委員会の設置及び事業の実施にあたり、文化庁文化財部記念物課、富山県教育委員会生涯学習・文化財室の指導・助言を得た。
4. 保存管理計画の策定及び本書の作成にあたっては、下記の方々の指導、助言及び協力を得た。記して深く謝意を表したい。

史跡指定地土地所有者及び管理者各位、黒川地区、護摩堂地区、開谷地区

浅野良治（永平寺町教育委員会）、壱岐一哉（石井町教育委員会）、上屋真一（恵庭市教育委員会）、内田和伸（奈良文化財研究所）、大國晴雄（大田市教育委員会）、大竹弘之（枚方市教育委員会）、川田　強（南相馬市教育委員会）、小松正夫（秋田市教育委員会）、齋藤和行（足利市教育委員会）、佐々田学（長崎市教育委員会）、清水重敦（奈良文化財研究所）、下平博行（飯田市教育委員会）、須原　縁（飯塚市教育委員会）、勢藤　力（伊勢崎市教育委員会）、谷口　栄（葛飾区郷土と天文の博物館）、中谷正和（京都文化財建造物研究所）、中島和哉（養老町教育委員会）、中原　齊（鳥取県教育委員会）、西川雄大（萩市建築部文化財保護課）、林　潤也（大野城市教育委員会）、平岡正宏（津山市教育委員会）、野原大輔（砺波市教育委員会）、平澤　毅（奈良文化財研究所）、細辻嘉門（富山市教育委員会）、堀沢祐一（富山市教育委員会）、馬路晃祥（鳥取県教育委員会）、宮崎　歩（山鹿市教育委員会）、中山敏史（奈良文化財研究所）、吉田珠己（八尾市教育委員会）、渡邊芳貴（西条市教育委員会）

※個人名は50音順、敬称略

5. 本書の執筆・編集は、三浦知徳（上市町教育委員会事務局主事）が行った。ただし、第2章第3節第2項1～3については、（株）日本海コンサルタント富山支店に委託して実施した環境基本調査業務の成果報告書を編集して掲載したものである。

目 次

第1章 沿革と目的

第1節 計画策定の沿革	1
第2節 計画の目的	1
第3節 委員会の設置	1

第2章 史跡上市黒川遺跡群の概要

第1節 指定に至る経緯	5
第2節 指定説明	
第1項 指定説明	6
第2項 史跡の構成とその範囲	7
第3節 史跡の現況	
第1項 歴史的調査の結果	
1. 史跡周辺の歴史的環境	9
2. 史跡にかかる発掘調査	12
3. 史跡周辺の関連遺跡及び関連施設	42
4. 総括	50
第2項 自然的調査の結果	
1. 地形・地質調査	53
2. 植生調査	77
3. 動物調査	101
4. 気象調査	106
第3項 社会的調査の結果	
1. 土地利用の現状	107
2. 土地所有の現状	114
3. 史跡にかかる関係法令	118
4. 史跡周辺の社会的環境	120

第3章 保存管理

第1節 基本方針	122
第2節 構成要素	122
第3節 保存管理の方法	133
第4節 現状変更等の取扱方針及び取扱基準	135
第5節 史跡指定地外の周辺環境を構成する要素の保存管理	142

第4章 史跡の将来像

第1節 整備・活用	144
第2節 運営及び体制整備	151
第3節 今後の進め方	151

参考文献

第1章 沿革と目的

第1節 計画策定の沿革

かからくろかわ いせきぐん さんなんじ やまきょうづか くろかわうえやまとかあと でんしんごうじあと
国指定史跡「上市黒川遺跡群 円念寺山経塚 黒川上山墓跡 伝真興寺跡」(以下「史跡上市黒川遺跡群」とする。)は、平成18年1月26日付けて国の史跡として指定された。平成18年3月10日付けて本史跡の管理団体に指定された上市町では、史跡の適切な保存管理の指針を具体化するために保存管理計画を策定することとし、「史跡上市黒川遺跡群保存管理計画策定委員会」を設置し、国庫補助金、県補助金の交付を受けて、平成19~20年度の2ヶ年にわたり検討を行った。各年度の事業内容については下記のとおりである。

平成19年度

- ・史跡上市黒川遺跡群保存管理計画策定委員会の開催（2回）
- ・現況地形図の作成
- ・円念寺山経塚における地質調査の実施（ボーリング調査）

平成20年度

- ・史跡上市黒川遺跡群保存管理計画策定委員会の開催（3回）
- ・環境基本調査の実施（地形・地質、植物、動物）
- ・整備イメージバース図の作成
- ・保存管理計画策定報告書（本書）の刊行

第2節 計画の目的

史跡上市黒川遺跡群は、上市町のみならず全国的にも貴重な文化遺産であることから、これを適切に保存し、将来にわたって確実に継承していかなければならない。

本史跡を構成する3遺跡は、いずれも山中に立地するという条件から、開発行為による破壊・消滅の危機感は平野部に比べて低い。しかし、それぞれの遺跡は様々な現状と課題を抱えており、また近年では地権者の高齢化や世代交代などの要因により土地の管理も年々困難になってきている。さらにはこれらを取り巻く周辺環境も刻々と変化してきており、これらを一体として適切に保存していくための具体的な指針が必要となっている。

保存管理計画策定の目的は、こうした様々な現状と課題を整理した上で、史跡の本質的価値と構成要素を明確化し、それらを適切に保存管理していくための基本方針や具体的な方法を定めると同時に、将来の整備活用及びその適切な運営方法等の方向性を示すことにある。

今後は、この保存管理計画に基づき、史跡を適切に保存・活用していくための整備計画について十分な検討を行っていくものとする。

第3節 委員会の設置

史跡上市黒川遺跡群保存管理計画策定委員会は、平成19年11月13日に設置した。委員会は学識経験者8名、教育関係者2名、地元関係者2名の計12名で構成され、またオブザーバーとして行政関係者2名を委嘱している。委員名簿は2ページ、委員会設置要綱は3ページ、委員会の経過は4ページのとおりである。

史跡上市黒川遺跡群保存管理計画策定委員会 委員名簿

区分	No.	氏名	分野	所属(※)
委員 学識経験	1	黒崎 直	史跡整備	国立大学法人富山大学 人文学部教授 委員長
	2	高瀬 要一	史跡整備	元独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所文化遺産部長
	3	米原 寛	歴史	富山県〔立山博物館〕館長
	4	久保 智康	美術・歴史	独立行政法人国立文化財機構 京都国立博物館学芸部工芸室長
	5	西井 龍儀	考古	富山考古学会副会長
	6	舟崎 久雄	歴史教育	富山県立富山東高等学校教諭 ／富山考古学会幹事
	7	吉井 亮一	自然	富山県〔立山博物館〕副主幹
	8	谷本 瓦	地域振興	財団法人地域振興研究所 常任理事・主任研究員
教育関係	9	酒井 光賛(平成19年度) 澤井 隆(平成20年度)	教育	上市町立上市中学校長
	10	中村 啓志	教育	上市町立上市中央小学校長 ／上市小学校長会長
	11	伊藤 勝保	地元関係者	山加積公民館長 ／前黒川町内会長 副委員長
地元関係	12	神谷 育雄(平成19年度) 菅野 信之(平成20年度)	地権者代表 地元代表	上市町総務課長 黒川町内会長
	1	佐藤 正知	行政	文化庁文化財部記念物課 主任文化財調査官
オブザーバー	2	藤繩 太郎(平成19年度) 山本なつみ(平成20年度)	行政	富山県教育委員会 生涯学習・文化財室長
事務局	上市町教育委員会事務局 【平成19年度】 教育長 山本 靖 教育次長／教育委員会事務局長 松本喜二 主幹 高慶 孝 局長代理／生涯学習班リーダー 廣島丈志 主事 三浦知徳 【平成20年度】 教育長 山本 靖 教育次長／教育委員会事務局長 神谷育雄 主幹 高慶 孝 局長代理／生涯学習班リーダー 渡辺隆明 主事 三浦知徳			

※所属は委員会在籍時のもの

史跡上市黒川遺跡群保存管理計画策定委員会設置要綱

(設置)

第1条 史跡上市黒川遺跡群 円念寺山経塚 黒川上山墓跡 伝真興寺跡（以下「上市黒川遺跡群」とする。）の恒久的な保存管理のために必要な計画を策定するため、史跡上市黒川遺跡群保存管理計画策定委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

(任務)

第2条 委員会は、上市町が行う上市黒川遺跡群の保存管理計画の策定に関し、必要な指導助言を行うものとする。

(組織)

第3条 委員会は、委員12人以内をもって組織する。

2 委員は、学識経験者、教育関係者、地元関係者のうちから、上市町教育委員会が委嘱する。

3 委員会には、若干名のオブザーバーを置くことができる。

(任期)

第4条 委員の任期は、委嘱した日から保存管理計画の策定が終了した日までとする。

(委員長及び副委員長)

第5条 委員会に委員長及び副委員長を置き、委員長は、委員の互選により定め、副委員長は、委員長が指名する。

2 委員長は、委員会を代表し、会務を総理する。

3 副委員長は、委員長を補佐し委員長に事故ある時は、その職務を代理する。

(会議)

第6条 委員会は、委員長が招集し、委員長が議長を努める。

2 委員会は、委員の半数以上が出席しなければ会議を開くことができない。

(事務局)

第7条 委員会の事務局は、上市町教育委員会事務局に置く。

2 委員会の庶務は、事務局で処理する。

(その他)

第8条 この要綱に定めるもののほか、委員会の運営に関して必要な事項は、別に上市町教育委員会教育長が定める。

附 則

1 この要綱は、平成19年11月13日から施行する。

2 最初に開催される委員会の会議は、第6条の規定に関わらず、上市町教育委員会教育長が招集する。

史跡上市黒川遺跡群保存管理計画策定委員会の経過

日時等	出席者	内容
第1回委員会 平成19年11月13日(火) 10:00~15:00 於:上市町役場第1会議室 史跡上市黒川遺跡群	【委員】 黒崎、米原、久保、西井、 舟崎、谷本、酒井、中村、 伊藤、神谷 【オブザーバー】 佐藤、藤繩(代理)	<ul style="list-style-type: none"> ・委員会の設置及び委員の委嘱 ・史跡の概要と経過報告 ・保存管理計画の策定方針について ・史跡の現状と保存管理上の課題について ・現地視察(円念寺山経塚、黒川上山墓跡)
第2回委員会 平成20年2月27日(水) 13:00~15:00 於:上市町役場第3会議室	【委員】 黒崎、米原、西井、舟崎、 吉井、酒井、伊藤、神谷 【オブザーバー】 藤繩(代理)	<ul style="list-style-type: none"> ・現況地形図作成業務等について ・保存管理計画策定報告書の構成について ・史跡指定地外の周辺環境を構成する諸要素について ・環境基本調査の内容及び範囲について
第3回委員会 平成20年9月16日(火) 13:30~16:00 於:上市町役場第3会議室	【委員】 黒崎、高瀬、久保、西井、 舟崎、谷本、澤井、中村、 伊藤、笹野 【オブザーバー】 山本(代理)	<ul style="list-style-type: none"> ・環境基本調査等について ・保存管理基準(素案)について ・史跡の将来像について
第4回委員会 平成20年11月28日(金) 13:00~16:30 於:上市町役場第3会議室	【委員】 黒崎、高瀬、米原、久保、 西井、吉井、澤井、中村、 伊藤、笹野 【オブザーバー】 山本(代理)	<ul style="list-style-type: none"> ・自然的調査の結果について ・社会的調査の結果について ・保存管理基準について
第5回委員会 平成21年2月24日(火) 13:30~16:00 於:上市町役場第3会議室	【委員】 黒崎、米原、西井、舟崎、 澤井、伊藤、笹野 【オブザーバー】 佐藤、山本(代理)	<ul style="list-style-type: none"> ・保存管理計画策定報告書(案)について

第2章 史跡上市黒川遺跡群の概要

第1節 指定に至る経緯

- 平成6年 道路敷設工事に伴う発掘調査により、黒川上山古墓群（現「黒川上山墓跡」）の内容が判明
→全面保存の上、上市町指定史跡に指定（12月28日付け）
- 平成8年 黒川上山古墓群の保存・活用に備えた資料収集を目的とした継続的調査に着手
→黒川上山古墓群の第2次発掘調査を実施
- 平成9年 黒川塚跡東遺跡（現「黒川上山墓跡」）の発掘調査を実施
- 平成10年 伝承真興寺跡（現「伝真興寺跡」）の発掘調査を実施
周辺分布調査で日枝神社裏遺跡（現「日枝神社遺跡」）を発見
- 平成11年 伝承真興寺跡の第2次発掘調査を実施
周辺分布調査で円念寺山遺跡（現「円念寺山経塚」）を発見
- 平成12年 日枝神社裏遺跡・円念寺山遺跡の発掘調査を実施
- 平成13年 円念寺山遺跡の第2次発掘調査を実施
周辺分布調査で黒川岸天遺跡・護摩堂村巻遺跡・護摩堂曲戸遺跡を発見
遺跡群の周知・活用を図る事業「黒川フェスティバル」を開催 →以後毎年10月に継続して実施
- 平成14年 護摩堂村巻遺跡・護摩堂曲戸遺跡の発掘調査を実施
「黒川地区中世宗教遺跡群保護調査委員会」を設置 →平成16年までに4回の委員会を開催
- 平成15年 黒川岸天遺跡の発掘調査を実施
- 平成16年 黒川岸天遺跡の第2次発掘調査を実施
- 平成17年 「上市黒川遺跡群」の国史跡指定申請書を文化庁に提出（7月15日付け）→11月18日答申
開谷東遺跡の発掘調査を実施
- 平成18年 1月26日付け文部科学省告示第4号により「上市黒川遺跡群 円念寺山経塚 黒川上山墓跡 伝真興寺跡」が正式に国指定史跡となる
- 平成19年 「史跡上市黒川遺跡群保存管理計画策定委員会」を設置
計5回の委員会を開催し、平成21年3月に保存管理計画策定報告書（本書）を刊行

第2節 指定説明

第1項 指定説明

- ・指定名称：上市黒川遺跡群 円念寺山経塚 黒川上山墓跡 伝真興寺跡
- ・所在 地：富山県上市町黒川字上山、同字牛屋、同字岡谷、同字舟ノ谷地内
- ・指定面積：10,771.25m²（台帳面積、一部実測面積）
- ・指定理由：ア 基準 特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準（昭和12年文化財保護委員会告示第2号）史跡の部三による。※史跡の部三：社寺の跡又は旧境内その他の祭祀信仰に関する道路イ 説明 北陸の雲峰劍岳・立山山麓の丘陵上に近接して営まれた大規模な経塚、墓地、山寺からなる遺跡群。平安時代末から鎌倉時代に亘りに關係して成立したとみられ、近世以降とは異なった劍岳・立山を中心とする信仰の在り方を知る上で重要である。
- ・官報告示：平成18年1月26日付け文部科学省告示第4号

以下に、文化庁文化財部監修『月刊文化財』平成18年2月号（第一法規株式会社）による説明を転記する。

上市黒川遺跡群は富山平野の東部、北陸を代表する雲峰立山山麓にある中世の遺跡群である。立山から平野部に流れ出る郷川の谷に黒川集落があり、それを見下ろす比高30～100メートルの丘陵上に円念寺山経塚、黒川上山墓跡、伝真興寺跡が立地する。遺跡群からは南東に立山の一主峰劍岳（標高2,999メートル）を仰ぎ見ることができる。平成6年度に、上市町教育委員会が道路建設に伴い黒川上山墓跡の発掘調査を行ったところ、保存状態が良好な中世の墓跡であることが判明し現状保存を図った。これを契機に行った周辺の踏査と発掘調査の結果、さらに円念寺山経塚や伝真興寺跡などが確認された。

円念寺山経塚は郷川左岸の細尾根上に24基が密集して築かれている。板状の石を組んだ石椁を主体部とする。石椁内からは珠洲焼の経筒外容器や四耳壺、青白磁の合子・小壺、銅鏡や鉄刀のほか密教法具の独鉢杵や磬などの埋納品が出土している。珠洲焼はいずれも12世紀後半を中心としたものであり、連続して多くの経塚が営まれたことが知られる。珠洲焼外容器の銘文「ふち二ね」は文治2年（1186）を意味するとの説があり、年代の一端を示す可能性がある。

黒川上山墓跡は経塚の対岸約200メートル、指呼の間の丘陵尾根上に立地する。墳丘墓、集石墓など合計67基が密集して築かれている。全体の8割が火葬で、火葬骨を納めた蔵骨器の多くは珠洲焼壺・甕であり、ほかに白磁四耳壺や在地産の八尾焼壺などがある。出土遺物からみて12世紀後半に成立し14世紀の空白を挟み15世紀初めまで継続する。また、この遺跡の東部には平安時代にさかのぼる墓や建物とみられる遺構も確認されている。

黒川上山墓跡の北西約500メートルの丘陵上に伝真興寺跡が立地する。斜面を造成した平坦面に本堂、塔、山門、池などを配している。麓にあった旧本覚院の寺伝には、ここに寛弘5年（1008）に開かれた真言宗の真興寺があったと伝える。遺物の出土状況から遺構は主に中世後期のものと推定されるが、これより古い建物柱穴や、平安時代から中世前期の遺物も確認されていることから、平安時代から寺院などの遺跡があったと推定される。

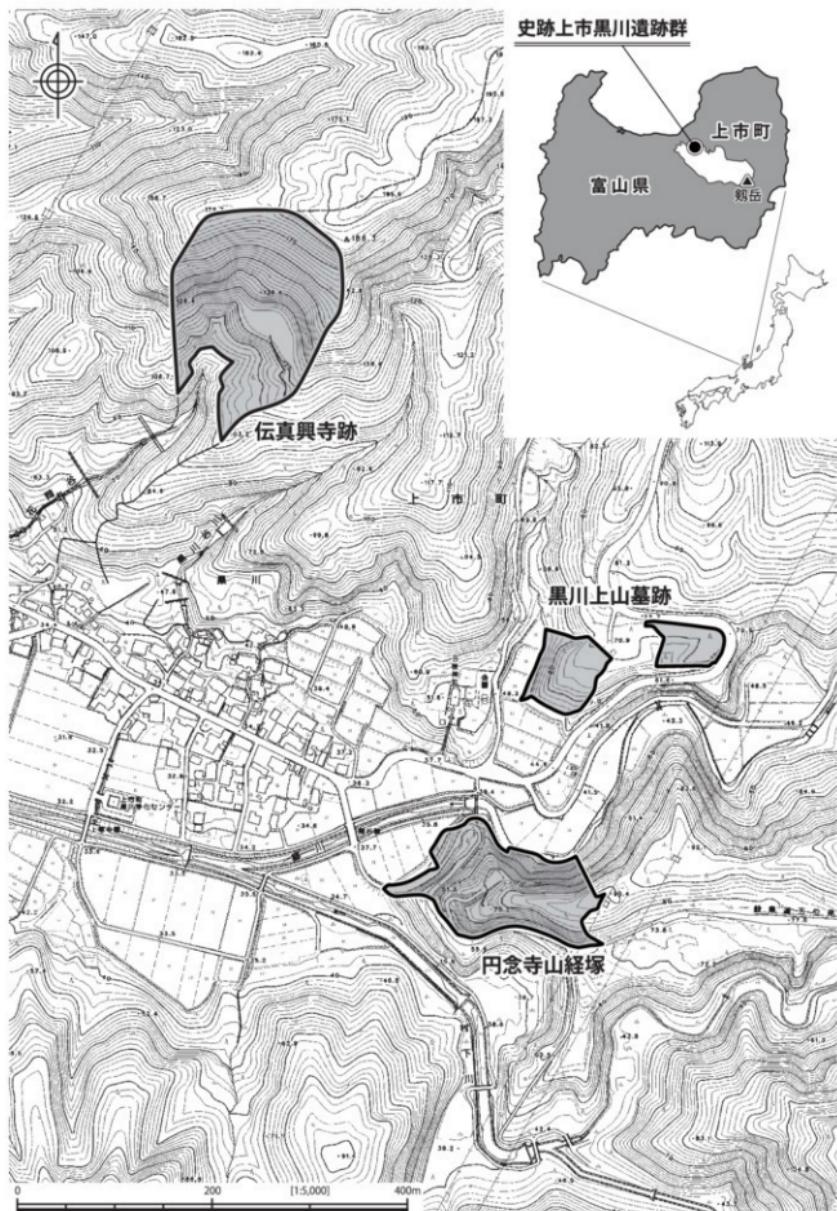
これらの遺跡のうち経塚と墓はいずれも平安時代末期、12世紀後半に川を挟んでほぼ同時期に造営が始まっており、関連して成立したものと考えられる。これらはとともに規模が大きく優れた出土遺物の内容からみて、その造営主体としては在地領主層などが想定される。この地は立山山麓にあって古代以来寺院などがあり宗教的な場であったことから、経塚と墓が設けられて、墓と寺院は中世後期まで継続してこの地域の宗教や信仰、

葬送の場となっていたことがうかがえる。北陸地方では12世紀後半前に集落が新たに広く成立することが知られており、この動向が経塚と墓の造営と関係している可能性もある。このように本遺跡群は経塚や墓などの具体的な様相を示すだけではなく、ともに関連して中世の宗教や信仰、葬送の在り方と在地社会との関係などを示すものとして重要であり、史跡に指定して保護を図ろうとするものである。

第2項 史跡の構成とその範囲（第1図）

遺跡名	種別	所在地	筆数	面積	地権者数
円念寺山経塚	経塚	富山県中新川郡上市町黒川字舟ノ谷 193番、193番甲、193番丙、193番丁、 193番5、194番1、194番2、194番丙、 194番丁、194番戊、194番己、194番庚、 194番辛、195番甲、195番乙、195番丙	16筆	3778.96m ²	31名
黒川上山墓跡	墓地	富山県中新川郡上市町黒川字上山 45番3、45番4、45番5、45番7、46番1、 46番5、47番2、47番3、47番4、1516 番のうち実測134.77m ² 、1518番のうち実 測74.30m ² 、1519番のうち実測127.65m ² 、 1520番のうち実測224.73m ² 、1523番のう ち実測146.66m ² 、1524番、1525番のうち 実測10.65m ² 、1526番のうち実測114.77m ² 、 1533番のうち実測115.87m ² 、1538番2の うち実測14.72m ² 富山県中新川郡上市町黒川字牛屋 1527番のうち実測159.75m ² 、1528番 のうち実測101.59m ² 、1529番のうち実 測30.45m ² 、1530番のうち実測276.04 m ² 、1531番のうち実測126.88m ² 、1532 番のうち実測101.72m ² 、1534番のうち実 測147.17m ² 、1535番のうち実測163.82 m ² 、1536番のうち実測223.89m ² 、1537番、 1538番1のうち実測105.52m ² 、1539番の うち実測201.34m ²	31筆	5576.29m ²	51名
伝真興寺跡	寺院	富山県中新川郡上市町黒川字花岡谷 3番1、4番3	2筆	1416.00m ²	2名
合計			49筆	10,771.25m ²	84名 (66名)

*面積は台帳面積（一部実測値含む）



第1図 史跡上市黒川遺跡群指定範囲図

第3節 史跡の現況

第1項 歴史的調査の結果

1. 史跡周辺の歴史的環境（第1表、第2図）

史跡上市黒川遺跡群は、富山県中新川郡上市町黒川地内に所在する。巨視的に見ると富山県南東部を区切って東北東～西南西に延びる飛騨山脈の北西麓を縁どる丘陵もしくは河岸段丘上に分布し、より詳細にみると、上市川の支流である郷川が山間地を抜けて平野部へと流れ出る扇頂部付近の山中に3遺跡が立地している（第2図1～3）。

この郷川扇状地の扇頂部付近の平野・段丘・丘陵上には、現在把握されている遺跡数こそ少ないものの様々な人間活動の痕跡が残されており、連錦と続く歴史の流れを知ることができる。

旧石器時代の遺跡として明確に認知されている遺跡は現在のところ存在しないが、縄文時代中期の集落跡として著名な不水掛遺跡（48）においては過去に旧石器の可能性の高い剥片が出土しており、この遺跡の立地する高位段丘面上では周辺に旧石器時代遺跡の存在が予想される。

縄文時代に入ると、広野新（本江）遺跡（中期～晚期、14）・砂林開北遺跡（中期、16）・砂林開遺跡（中期、18）・不水掛遺跡（中期、48）など段丘上の各所で集落が営まれるようになる。なお、黒川上山墓跡（2）の発掘調査では縄文時代中期初頭の遺物が多く出土しており、中世墓群築造以前における土地利用の一端を示している。

弥生時代では終末期の大規模集落が砂林開北遺跡（16）で営まれ、農道敷設に伴う発掘調査では狭小な調査区ながらも7棟の竪穴住居と96基の土壙が検出されている。1辺7m前後の大型住居の存在や祭祀に関わる赤彩土器の大量出土など、地域の中核となる集落であったことが窺われる。

古墳時代では、上市町と滑川市にまたがって広野新（本江）遺跡（前期、14）に大規模な集落が営まれ、一部は富山県指定史跡として保存・整備されている。また地理的に若干離れた水系も異なるが、同一の段丘面上において終末期の群集墳である齊神新古墳群（30）が築かれている。

奈良時代の明確な遺跡は現在のところ確認されておらず不明な点が多いが、平安時代になると山中における宗教的活動が活発となったようで、本史跡の黒川上山墓跡（2）・伝真興寺跡（3）のほか、近隣の日枝神社遺跡（4）や開谷東遺跡（5）などで遺構・遺物が確認され始める。その後、平安時代末期における円念寺山経塚（1）の造営や黒川上山墓跡の墓群成立などに顕著に見られる大規模な変革期を経て、「霧場」としての姿が整えられたものと想定される。また、郷川の谷筋に沿った山中には各所で社寺跡と思しき平坦面や塚跡が確認されており、それらを包括する単位としての遺跡「黒川地区信仰関連遺跡」（9）が設定されている。本史跡もその範囲に含まれ、重要な構成要素として位置付けられている。

なお、これらの宗教的活動に関わる伝承として、近年まで黒川にあった真言宗本覚院の寺伝がある。それによれば、本院は寛弘5年（1008）に真言宗東密子島流の開祖・真興上人によって開かれた「花崗山真興寺」が富山に移転したため、その後を継ぐものとして享保7年（1722）に開かれたものであり、「真興寺」は寛和2年（896）に真興上人が弘法大師止錫の護摩堂村弘法堂を参拝した帰りに麓の黒川に立ち寄り、この地を八正道を宣布するにふさわしい地であるとして庵を結んだのが始まりとされている。また、これにより最盛期にはここを中心には円念寺・淨土寺・正等寺・開谷には源内坊・奥野坊・作内坊・好田坊などができる、信仰の中心になったとのことである。

中世の前半期においてはこうした宗教的活動の痕跡が濃密に認められるが、室町時代以降になると本史跡とその周辺における人間活動の痕跡は影を潜める。これと相前後して目立つようになるのが、「土肥氏」をはじめとする武家勢力の台頭である。域内の各所に築かれた護摩堂（蓑輪）城跡（10）・黒川砦跡（11）・小森館跡（47）・鈴山砦跡（34）などの城館遺跡が、当時の地域支配の一端を示している。

なお、郷川流域一帯は中世には堀江荘（保）と呼ばれる荘園であった。元久2年（1205）9月16日付けの太政

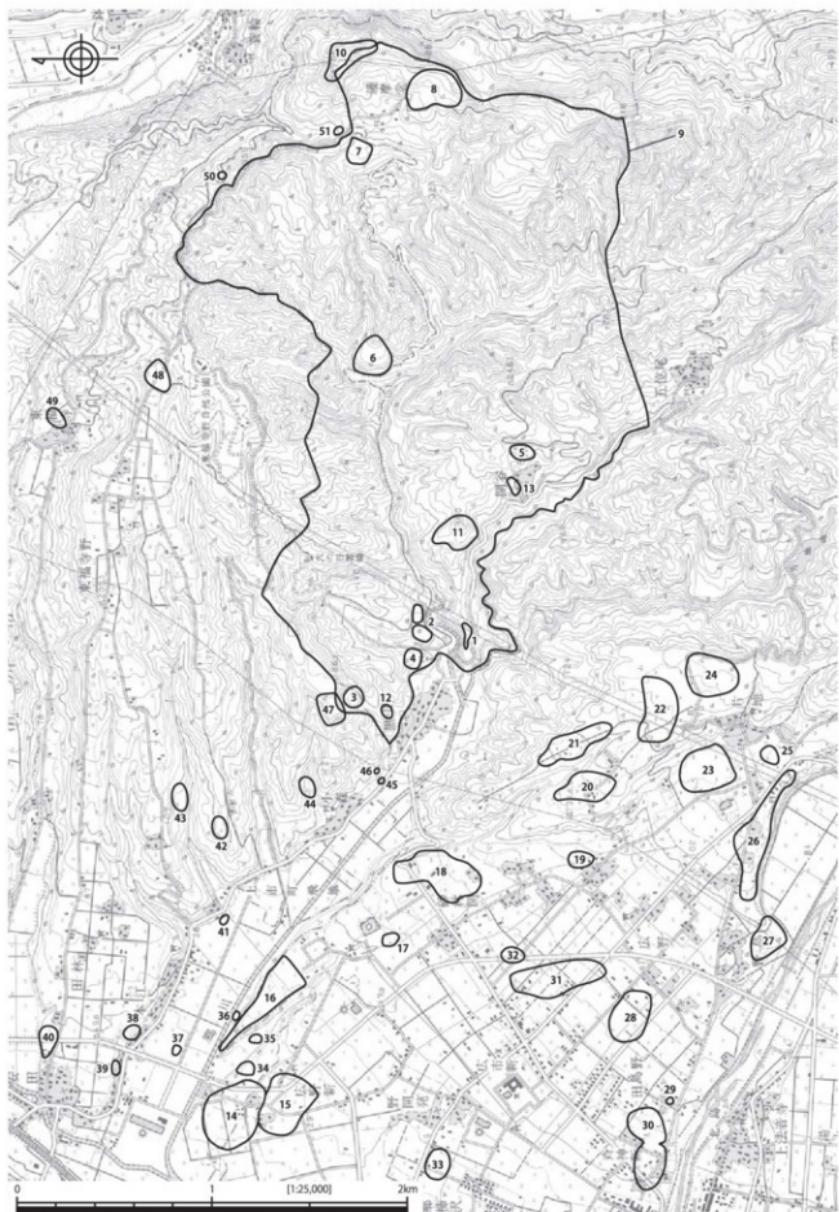
官符によると「便補當国堀江保壱所事」「在管新河郡黒川郷内」とあり、堀江保（莊）が黒川郷内にあったことがわかる。本史跡の成立・発展・衰退には、この堀江莊をめぐる社会の動きが大きく関わっていたものと考えられる。

近世では、現在富山県を代表する伝統工芸品となっている「越中瀬戸焼」の初期の窯跡が黒川窯跡・小森焼窯跡で見つかっている。いずれも大窯期のもので、特に黒川窯跡は越中瀬戸焼史上最古の窯として位置付けられている。

以上のように、本史跡の位置する郷川扇状地の扇頂部付近一帯の地域は、有史以前より長きにわたって重要な位置を占めてきた地域であるものと言える。

第1表 史跡周辺の遺跡

No.	遺跡名	種別	時代	備考	No.	遺跡名	種別	時代	備考
1	円念寺山経塚	経塚	古代（平安）、中世（鎌倉）	国史跡	27	野島遺跡	散布地、集落	縄文（前・後）	
2	黒川上山墓跡	墓	縄文（中）、古代（奈良・平安）、中世（鎌倉・室町）	国史跡	28	広野B道路	散布地	縄文（後）	
3	伝真興寺跡	社寺（寺院）	古代（平安）、中世（鎌倉・室町・朝日）、近世	国史跡	29	田島野道路	散布地	縄文	
4	日枝神社遺跡	社寺、祭祀	古代（平安）、中世（鎌倉・室町・朝日）、近世		30	齊神新古墳群	古墳	古墳（終）	
5	開谷東道路	社寺	古代（平安）、中世（鎌倉・室町・朝日）、近世		31	広野C道路	散布地	中世	
6	黒川岸天道跡	散布地、生産（石切）	中世、近世、近代		32	広野A道路	散布地	縄文（中）	
7	護摩堂曲戸道路	塚？	不明		33	郷柿沢道路	散布地	古墳（前）	
8	護摩堂村春遺跡	社寺	中世、近世		34	鶴山砦	城館	中世	滑川市
9	黒川地区信仰関連遺跡	社寺、祭祀	古代、中世、近世		35	本江桂谷道路	散布地	縄文（後・晩）	滑川市
10	護摩堂城跡（袁輪城跡）	城館（山城）	中世	一部滑川市	36	本江四升田道路	散布地	縄文（中）	滑川市
11	黒川砦跡	城館（山城）	中世		37	本江馬場田道路	散布地	古代（平安）、中世	滑川市
12	黒川窯跡	生産（窯）	近世		38	本江上石山道路	散布地	縄文（中）	滑川市
13	開谷遺跡	散布地	縄文（中）		39	本江下石山道路	散布地	縄文（後）	滑川市
14	広野新道路（本I道路）	散布地、集落	縄文（中・後・晩）、古墳	一部滑川市（歴史跡）	40	田林道路	散布地	縄文（中・後）	滑川市
15	広野新南道路	散布地	不明		41	本江二十四刈道路	散布地	縄文（後・晩）	滑川市
16	砂林間北I道路	散布地、集落	縄文（中）、弥生（終）		42	本江扁平遺跡	散布地	古墳	滑川市
17	砂林間北II道路	散布地	近世		43	万年寺谷道路	生産（窯）	古代（平安）	滑川市
18	砂林間道路	散布地	縄文（中）		44	小森燒窯跡	生産（窯）	近世	滑川市
19	広野D道路	散布地	中世、近世		45	花塚	塚	不明	滑川市
20	松原野道路	散布地	縄文（中）		46	和尚塚	塚	不明	滑川市
21	松原野新道路	散布地	縄文		47	小森鉢跡	城館（山城）	中世	滑川市
22	片地北道路	散布地	縄文		48	不水掛道路	集落	縄文（中）	滑川市
23	永代野道路	散布地、集落	縄文（晩）		49	東福寺窯跡	生産（窯）	近世	滑川市
24	片地揚場道路	散布地	縄文（中）		50	だんぼうの穴道路		不明	滑川市
25	片地道路	散布地	縄文		51	蛇塚	塚	不明	滑川市
26	永代道路	散布地、集落	縄文（中）						



第2図 史跡周辺の遺跡分布図

2. 史跡にかかる発掘調査

(1) これまでの調査経過

平成6年の黒川上山墓跡の発掘調査以来、周辺の関連遺跡を対象としてこれまで11次にわたる継続的な調査を実施してきた（指定対象外遺跡を含む）。その経過は次のとおりである。

第2表 既往の調査一覧

調査年度	調査期間	遺跡名	調査対象面積	内 容
平成6年度	5月～7月	黒川上山墓跡 (黒川上山古墓群)	約1,500m ²	13世紀代の墳墓22基を調査し、極めて良好な保存状態の中世墳丘墓群であることを確認した。また、調査区外でも多くの墳丘墓の存在を確認した。
平成8年度	11月～12月	黒川上山墓跡 (黒川上山古墓群)	約1,500m ²	45箇所の埋葬施設を検出し、全体で67基からなる大規模な中世墳丘墓群であることを確認した。また、本墓群が12世紀後半に成立／13世紀代に盛行／14世紀代に造営活動中断／15世紀初頭に再興・終焉、という過程を辿ることが判明した。
平成9年度	8月～10月	黒川上山墓跡 (黒川塚跡東遺跡)	約5,500m ²	平安時代のものと考えられる墳丘墓6基のほか、平坦面群、掘立柱建物跡、礎石、石垣などを検出した。
平成10年度	10月～翌3月	伝真興寺跡 (伝承真興寺跡)	約3,200m ²	真興上人の開基と伝えられる「真興寺」に比定できる寺院跡を確認した。本堂、塔、堂、山門、池などからなる伽藍の配置が明らかとなった。
平成11年度	9月～翌3月	伝真興寺跡 (伝承真興寺跡)	約3,200m ²	本堂が2回の建て替えを経ていることが判明した。また、多量の土師器皿と炭化物の入った土壙を検出した。
平成12年度	6月～翌3月	日枝神社遺跡 (日枝神社裏遺跡)	約1,500m ²	大規模な造成工事で造り出された平坦面、礎石、集石のほか、銅製鏡・鉄釘・土師器皿・珠洲貝片を納めた鏡壇に関わると推定される土壙などを検出した。
		円念寺山経塚 (円念寺山遺跡)	約1,500m ²	尾根上に連なる集石中から短刀や12世紀後半の珠洲貝・片口跡が出土し、平安時代末期に築かれた経塚群であることが窺われた。また、その直下の崖面では行者窟を発見した。
平成13年度	6月～翌3月	円念寺山経塚 (円念寺山遺跡)	約2,000m ²	少なくとも24基以上からなる国内屈指の大規模経塚群であることを確認した。また、金剛独钴杵と銅磬が一括出土したほか、多数の短刀・輸入磁器製品、銅鏡、珠洲絆外容器などが出土し、その内容においても突出したものであることが判明した。
平成14年度	7月～翌3月	護摩堂村巻遺跡	約12,000m ²	寺院、あるいは僧坊跡と考えられる広大な平坦面群を確認した。集石を伴う造成工事の痕跡、砂利敷きの通路跡などを検出した。
		護摩堂曲戸遺跡	約2,000m ²	地山・岩盤の削り出しの後に盛土によって構築された大型の塚状地形を確認した。
平成15年度	8月～翌3月	黒川岸天遺跡	約8,000m ²	行場と推定される巨岩群と岩屋、造成による平坦面群を確認した。
平成16年度	7月～翌3月	黒川岸天遺跡	約5,000m ²	宗教施設に関わる可能性のある壇状遺構を確認した。また、前年度にも確認していた加工痕の残る露岩が、近世～近代の石切場跡であることが判明した。
平成17年度	9月～翌3月	開谷東遺跡	約7,000m ²	赤彩土師器や須恵器が多く出土し、上市黒川遺跡群の成立期（9～10世紀）に並行して、この地に寺院あるいは祭祀的な場が存在していたことが窺われた。

※ () 内は調査時の名称

(2) 各遺跡の調査結果

(ア) 円念寺山経塚 (第3図～第6図、第3表、写真1～写真3)

a. 所在地

富山県中新川郡上市町黒川字舟ノ谷地内

b. 立地・眺望

郷川とその支流である片地谷川・村下川に挟まれた東西に伸びる両側の切り立った細尾根上に立地する。この尾根は通称「円念寺山」と呼ばれており、黒川集落の所在する平野最奥部の中心から集落方向に向けて突き出す格好となっている。標高は83～87m、現河床面からの比高差は50mほどである。尾根の上は東方に劍岳を望み、西には麓の黒川集落及び平野部、さらにはその先に日本海までをも遠望することができる景勝の地である。また、北方には郷川の流れを挟んで黒川上山墓跡・伝真興寺跡・日枝神社遺跡を望み、相互に視認関係を有する。

c. 調査

平成11年度の分布調査による遺跡発見を受けて、平成12年度・平成13年度の2ヶ年にわたって内容確認を目的とする発掘調査を実施した。調査主体は上市町教育委員会、調査対象面積は約2,000m²である。

d. 調査結果

発掘調査では、尾根上及びそれに連なる3箇所の平坦面上において、全体で39箇所の遺構を検出した。遺跡の中核をなす尾根上に位置する遺構の基本的な構造は、大きめの石によって作られた方形区画の中央部付近に土壙を穿ち、1枚の底石・4～6枚の側石・1枚の蓋石で構成される石槨を構築して埋納主体部とするものである。石槨は地上に1基、集石地下に23基の計24基を確認した。これらは尾根上にはほぼ一直線に連なり、上部を覆う集石の重なりから概ね尾根の先端から順に築造されていったことが窺える。築造当初はその上部にも積石や盛土などが施されていたものであろうが、大部分は既に失われていた。

石槨の大半は盜掘を受けた痕跡をもつものの、埋納主体部が完存していた6基をはじめ埋納品をとどめるものも多い。主体部が完存していた6基の石槨には、それぞれ珠洲経筒外容器2点・珠洲四耳壺2点・珠洲壺1点が中央に据えられ、その周囲(石槨内外)に副納品として銅鏡・青白磁製品・短刀・火打金などが納められていた。主体となる容器には内容物は遺存しておらず確定的な物証はないものの、これらは経塚とみてまず間違いない。またその他の石槨についても、遺構の類似性・断片的な出土遺物の性格、または同時期に造営が開始された黒川上山墓跡の遺構構造との相違などから総合的に判断すると、その全てが経塚であったものと考えられる。

なお、これらの経塚の造営時期については、出土した珠洲の年代観からするとその全てが12世紀後半代を降らないものと考えられる。同一地において24基(以上)という多数の経塚がこれほどの短期間に連続して築かれたという事例は全国的に見ても皆無に近く、極めて重要である。

調査の詳細については発掘調査報告書(上市町教育委員会2001・2002・2005a)を参照願うこととし、以下ではその概要について記述する。なお、各遺構の計測値等については第3表に示した。

・1-1号石槨・壇状集石：遺跡の西端、尾根の先端部に位置し、長方形の壇状をなす集石とその南西隅に取り付く方形の石槨からなる。両者は石槨一集石の順で築かれている。石槨は調査以前から地表面に露出していたものであるが、その底石上から金銅独鉢杵と銅磬が出土した。ともに経塚に埋納されることは極めて稀な品であり、これらの他には経筒外容器を納める空間的余裕や経筒の痕跡がないこと、本石槨が尾根の最先端部に位置すること、これのみが地上に露出することという特異性なども考え合わせると、これは「経塚」ではなかった可能性がある。本経塚群造営に際する造営主の強い意志、あるいは地鎮・界結などといった何らかの儀礼的な背景があったものと考えられる。また、壇状集石は50cmの大ぶりな石材を小口を意識して2段に積み、上面が概ね平坦となるなど他の集石とは様相が異なっており、この石槨に作る祭壇的なものである可能性がある。

- ・**1-2号経塚（主体部完存）：**1-1号壇状集石の南東部に接して築造された経塚である。石櫛内から珠洲四耳壺・片口鉢、石櫛の側石の外側から短刀1口が立てられた状態で出土した。なお、本経塚群における短刀の出土状況は、その大部分が石櫛の側石間あるいは裏側に立てられた状態であった。
- ・**2-2号経塚（主体部完存）：**1-2号経塚の東に隣接する経塚である。石櫛内から珠洲経筒外容器、側石の間から短刀1口が出土した。
- ・**3号経塚（主体部完存）：**2-2号経塚の東に隣接する経塚である。南北に長い梢円形を呈する石櫛のほぼ中央に珠洲経筒外容器が据えられ、その周囲を充填する詰石中から青白磁合子、青白磁小壺、火打金が出土した。また、石櫛の側石間などから4口の短刀が出土した。経筒外容器の身の外底面には「ふち二ね／ふちわらの／国公／有近／八月十四日」と読める刻銘が施されている。多様な解釈が可能な铭文であるが、1行目の「ふち二ね」を「文治2年」(1186)の略であるものと考えると、多くの出土遺物が示唆する本経塚群の造営時期（12世紀後半）と合致する。また、これに伴う蓋の外面は全体にわたって蓮草の花弁を八方に彫りこし、さらにその花芯部にあたる蓋頂部には四方火焰をもつ宝珠を頂くなど、珠洲焼の中でも極めて特殊な意匠を持つものとなっている。
- ・**5号経塚：**3号経塚から4mほど東に位置する経塚である。盗掘及び樹根による擾乱によって損壊しているが、集石中から珠洲経筒外容器蓋片、石櫛の外部から3口の短刀が出土した。
- ・**6-1号・6-2号経塚：**5号経塚の東に隣接する経塚である。尾根を南北に断ち切る溝状地形を埋めるように施された集石の地下から、南北に並ぶ2基の石櫛を検出した。石櫛・集石のいずれからも遺物は出土しなかった。
- ・**7-1号経塚：**6-1号・6-2号経塚の東に隣接する。盗掘により損壊を受けているが、石櫛内から珠洲片口鉢片、石櫛側石の裏側から短刀の断片が出土した。
- ・**7-2号経塚（主体部完存）：**7-1号経塚の東に隣接する経塚である。上部の集石の大部分及び石櫛の蓋石は失われていたが、石櫛内から珠洲片口鉢を蓋にした珠洲四耳壺が原位置を保った状態で出土した。
- ・**8-1号・8-2号経塚：**築造工程上互いに密接な関係にあるものと想定される経塚で、北辺・南辺の区画線石が平行に約240cmにわたって並び、その間に2基の箱型の石櫛が築かれている。いずれも盗掘を受けているが、8-1号経塚の石櫛側石の外側から短刀1口、石櫛外の集石中から青白磁小杯が出土した。
- ・**9号経塚（主体部完存）：**8-1号・8-2号経塚の東に隣接する経塚で、これも一連のものであった可能性がある。遺存状況は良好で、石櫛蓋石上から7口の短刀と2点の鉄製品断片（錐か）、蓋石下の石櫛内からは珠洲四耳壺・片口鉢が出土した。
- ・**10号経塚（主体部完存）：**9号経塚の東に隣接する経塚である。東隣の11号経塚の集石が一部覆い被さり、築造の前後関係を示している。石櫛は經容器である珠洲壺を固定するように小ぶりな礫を小口に積み上げたもので、また壺には陶製の蓋は作らず石櫛の蓋石が直接載るなど、他の石櫛とは構造が大きく異なっている。なお、壺以外では石櫛外から銅鏡1面、壺内部を充填する土砂内から3点の鉄製品断片（和鉄か）が出土した。
- ・**11号経塚：**10号経塚の東に一部重複して存在する経塚である。集石中から珠洲壺口縁部片・片口鉢片が出土しており、盗掘を受けていることが窺われるが、集石の地下には30cm大の石を長手に配した西に開く「コ」の字状の石組があり、その内部より鏡面を合わせた状態の銅鏡2面と短刀2口が出土した。
- ・**12号経塚：**11号経塚の東に位置する経塚である。盗掘及び樹根による損壊が著しく、石櫛は構築当初の姿をとどめている。
- ・**13-3号経塚：**平坦面1の西辺に位置する経塚である。樹根による損壊が著しく、石櫛は構築当初の姿をとどめている。
- ・**13-1号経塚：**13-3号経塚の東に位置する経塚である。長方形区画の南半部に石櫛が構築されている。盗掘を受けており、石櫛内外から珠洲経筒外容器の破片が出土した。また、石櫛の側石間から短刀1口が出土した。
- ・**13-2号経塚：**13-1号経塚の東に隣接する経塚で境界の区画線石を共有することから、これらの経塚も築造工程上

の関連を持つものと考えられる。13-1号経塚と同様に区画南半部に設けられた埋納主体部は北側・東側に側石状の石が存在するものの、残る2面には側石状のものは残っていない。西側は現状では土壁となっており、そこに口縁部を向けて張り付くようにして青白磁小壺と青白磁輪花皿が出土した。これらは石槨の内部に納められたものか、本来存在した側石の裏側に納められたものかは不明である。

- ・14号経塚：13-2号経塚の東に隣接する経塚である。盗掘によって石槨は損壊を受けているが、区画そのものは良好に遺存している。

- ・15号経塚：14号経塚の東に隣接する経塚である。30～50cm大の区画縁石が180cm四方の方形に廻り、その中央部に石槨を構築している。盗掘を受けてはいるものの、構造的には本遺跡における経塚遺構の本来の姿を最も良く残しているものと推測される。なお、西側の区画縁石は一部が14号経塚の東側区画縁石に乗り上げており、築造上の前後関係を示している。

- ・16-1号経塚：15号経塚の東に隣接する経塚で、境界の区画縁石を共有する。方形区画の東端部に構築された石槨は、円形土壙の壁に側石を貼り廻らせたものである。

- ・16-2号経塚：16-1号経塚の東に隣接する経塚で、境界の区画縁石を一部共有する。石槨内から遺物は出土しなかつたが、区画南辺付近より珠洲片口鉢片が出土した。なお、この経塚の南側はやや広めの空闊地となっており、土師器皿片と炭化物片がまとまって分布する状況を確認した。その最大分布範囲は東西250cm、南北130cmほどの長円形を呈する。土師器皿は大部分が細片と化しており、意図的な破碎と散布を窺わせる。なお、本集中域中の東寄りの地点には、板状に破碎された礫の集積が認められる。礫の中には被熱による赤化かと思われる痕跡を残すものがあり、この場において埋經に伴う何らかの儀式が執り行われていた可能性がある。

- ・16-3号経塚：16-2号経塚の東に位置する経塚である。石槨は底石をもたない箱状で、東側のみ側石ではなく円礫を2段に積んでいる。石槨内部とその周辺から珠洲片口鉢片が出土した。

- ・17号経塚：16-3号経塚の東に位置する経塚である。石槨は北側の一部と南側が板状の立石である以外は、礫を3段ほどに積み上げる。石槨内部から珠洲片口鉢の小破片が出土した。

- ・29号塚：平坦面3の北東端付近に位置し、長さ10m、幅2m、高さ0.9mほどの土堤状地形の上部に長さ6mほどの集石を施すものである。石槨のような地下施設は持たない。北側崖際では平成11年度の分布調査において完形の珠洲壺・片口鉢が採取されているが、調査ではそこから西に30cmほど離れた場所で、珠洲壺とそれに蓋として覆い被さる珠洲片口鉢が土中に埋設された状態で出土した。その他、集石中からは珠洲大壺の多量の破片（同一個体）と火打金が1点出土した。これらの珠洲焼は尾根上の経塚群出土のものと比べて若干ではあるが年代が新しく、また遺構の構造も差異が大きいことから、現状では本遺構の性格は不明である。

- ・その他の集石遺構：平坦面3の北側縁辺の崖際に連なる29号塚以外の集石については検出作業のみの実施で、その性格は明らかではない。作業に伴って各集石より珠洲壺・片口鉢片が散発的に出土したほか、集石25の南側で石礫の破片が出土した。

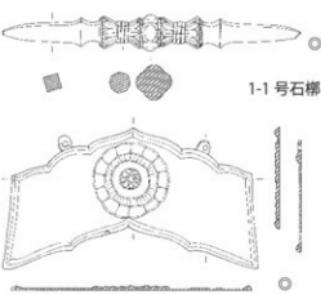
- ・平坦面3：平坦面3は集石20～集石30の間に広がる850m²ほどの平坦面で、標高は約85～86.5mを測り、南側に若干傾斜している。堂宇等の関連施設の存在を想定して試掘トレンチを設定して遺構の検出を試みたが、遺構を検出することはできなかった。また、表土中、あるいは表土直下より数点の遺物が出土したもの、それらは全て北側の集石に伴うものの流れ込みと判断し得る珠洲壺・鉢の小破片や近世以降のものであった。



第3図 円念寺山経塚遺構図

第3表 円念寺山経塚遺構一覧表

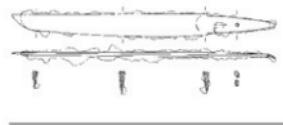
No.	区画			埋納主体部		出土遺物	備考	占地
	遺構番号	種別	形態	規模(cm)	構造	規模(内法, cm)		
1	1-1号	石塚 集石	—	—	石櫛(側石4・底石1)	30*25*40	金剛独特片1、銅鏡1	石櫛が地表に露出 祭壇、二段構み
	1-2号	経塚	方形集石か	200*100	石櫛(側石4・底石1)	—	—	主体部完存
3	2-1号	不明	方形集石?	180*180?	石櫛(側石4・底石1・蓋石1)	60*30*45	珠洲四耳壺・片口跡、短刀1	地下施設なし、詳細不明
4	2-2号	経塚	方形集石か	150*120	石櫛(側石4・底石1・蓋石1)	25*20*30	珠洲経筒外容器、短刀1	主体部完存
5	3号	経塚	方形集石?	180*180?	石櫛(側石6・底石1)	60*45*45	珠洲経筒外容器、青白磁合片1、青白磁小壺1、短刀4、火打金1	主体部完存、経筒外容器底に剝落あり
6	4号	不明	円形マウンド?	200*200?	—	—	—	詳細不明
7	5号	経塚	方形集石か	150*100	石櫛(半壙、側石4・底石1) 確認	45*35*30?	珠洲経筒外容器(蓋片のみ)、短刀3	樹根により崩壊
8	6-1号	経塚	長方形集石	300*150	石櫛(側石5・底石1)	35*30*40	—	尾根上
9	6-2号	—	—	石櫛(側石5)	30*25*30	—	—	—
10	7-1号	経塚	方形集石か	180*180	石櫛(側石7・底石1)	70*50*40	珠洲片口跡、短刀1	珠洲片口跡は破片で出土
11	7-2号	経塚	方形集石か	210*180	石櫛(側石5・底石1)	50*50*40	珠洲四耳壺・片口跡	主体部完存
12	8-1号	経塚	長方形集石	200?	石櫛(側石5・底石1)	30*25*40	青白磁小片1、短刀1	8-2号・9号とは一連のものか
13	8-2号	経塚	長方形集石	200?	石櫛(側石5・底石1)	30*30*40	—	8-1号・9号とは一連のものか
14	9号	経塚	長方形集石	220*120	石櫛(側石5・底石1・蓋石1)	35*35*30	珠洲四耳壺・片口跡、短刀7、練状鉄製品2	主体部完存、8-1号・8-2号とは一連のものか
15	10号	経塚	長方形集石	210*120	石櫛(鍛積みで構築、蓋石1)	35*35*45	珠洲西(内部に不明鉄製品3)、銅鏡1	主体部完存、石櫛は板状の縦を小口に積む、11号経塚の石櫛が覆い被される
16	11号	経塚	方形集石	200*200	「コ」の字形状の石組、西に開く	50*40*30	珠洲西・片口跡片、銅鏡2、短刀2	—
17	12号	経塚	不明	—	石櫛(半壙、側石3確認)	50*50*50?	—	位置を追記した倒石で埋まる
18	13-1号	経塚	長方形集石	200*120	石櫛(側石6・底石1)	45*40*40	珠洲経筒外容器片、短刀1	珠洲経筒外容器片は石櫛内に散在
19	13-2号	経塚	長方形集石	200*120	石櫛? 二側面に倒石状の石あり	40*40*30?	青白磁輪花皿1、青白磁小壺1	副納品はいずれも外向きで土壁に張りつく
20	13-3号	経塚	方形集石?	100*90?	石櫛(半壙、側石3・底石1) 確認	25*25*25?	—	樹根により崩壊
21	14号	経塚	方形集石	180*180	石櫛(半壙、側石3確認)	60*50*40	—	残存する側石のうち1枚は元位置を保っていない
22	15号	経塚	方形集石	180*180	石櫛(側石5・底石1)	30*30*30	—	—
23	16-1号	経塚	方形集石	180*150	石櫛(半壙、側石6確認)	60*60*45	—	土壠の壁に側石を埋らせる
24	16-2号	経塚	方形集石	150*150	石櫛(側石4・底石1)	30*25*35	珠洲片口跡片	区画内より珠洲片口跡片出土
25	16-3号	経塚	方形集石か	120*120?	石櫛(側石3)	30*30*50	珠洲片口跡片	石櫛は一方が鍛積み、内部より珠洲片口跡片出土
26	17号	経塚	方形集石か	210*210?	石櫛(半壙、鍛積みで構築)	25*20*45	珠洲片口跡片	石櫛内より珠洲片口跡片出土
27	18号	不明	不定形集石	200*200	—	—	—	—
28	19号	不明	不定形集石	300*100	—	—	珠洲西片	遺物は集石中に散布
29	20号	不明	不定形集石	200*100	—	—	珠洲西片	遺物は集石中に散布
30	21号	不明	不定形集石	300*100	—	—	珠洲西・片口跡片	遺物は集石中に散布
31	22号	不明	円形マウンドか	200*200	—	—	珠洲西片	遺物は集石中に散布
32	23号	不明	不定形集石	100*100	—	—	珠洲西片	遺物は集石中に散布
33	24号	不明	円形マウンドか	200*200	—	—	珠洲西・片口跡片	遺物は集石中に散布
34	25号	不明	不定形集石	450*150	—	—	珠洲西・片口跡片	集石は一部崖側に崩落
35	26号	不明	不定形集石	180*60	—	—	珠洲西・片口跡片	集石は一部崖側に崩落
36	27号	不明	不定形集石	150*90	—	—	珠洲西片	集石は一部崖側に崩落
37	28号	不明	不定形集石	150*60	—	—	珠洲西片	集石は一部崖側に崩落
38	29号	塚か	土壠上集石	600*150	—	—	珠洲西3・珠洲片口跡2、火打金1	珠洲西は2点が崖間に埋設、1点は集石中に散乱
39	30号	不明	不定形集石	300*90	—	—	短刀1、土製人形1	集石は一部崖側に崩落、遺物は集石外



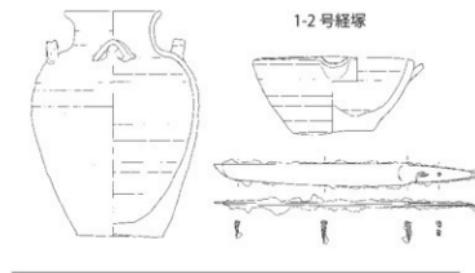
1-1号石棺



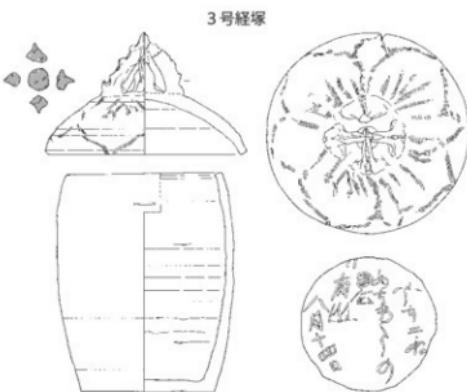
2-2号経塚



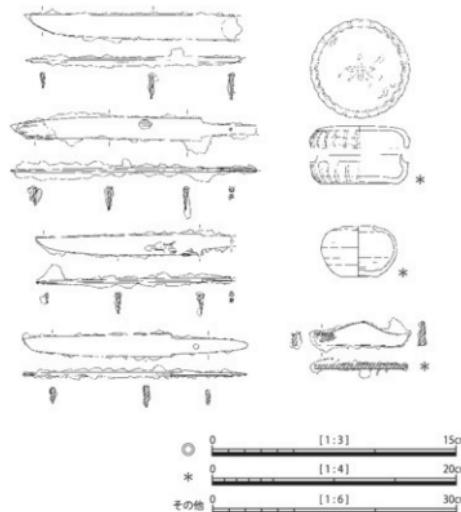
5号経塚



1-2号経塚

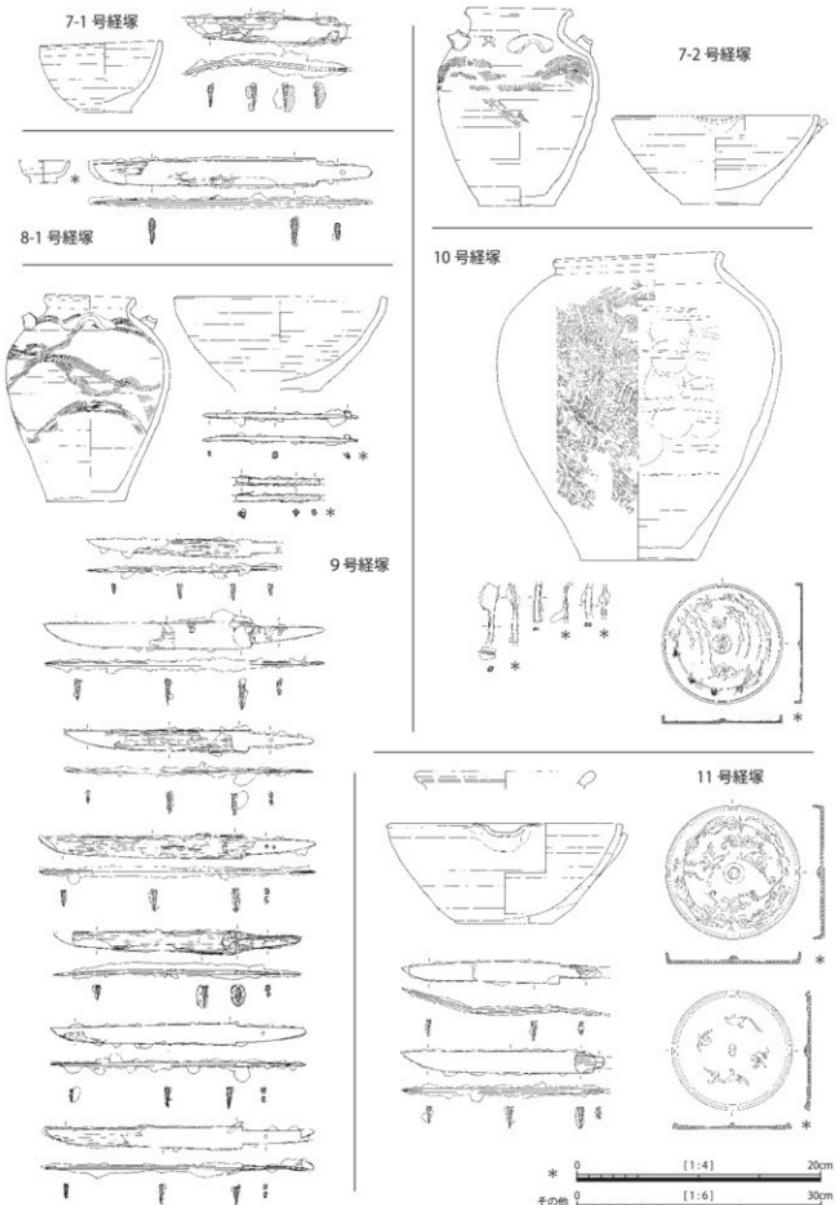


3号経塚

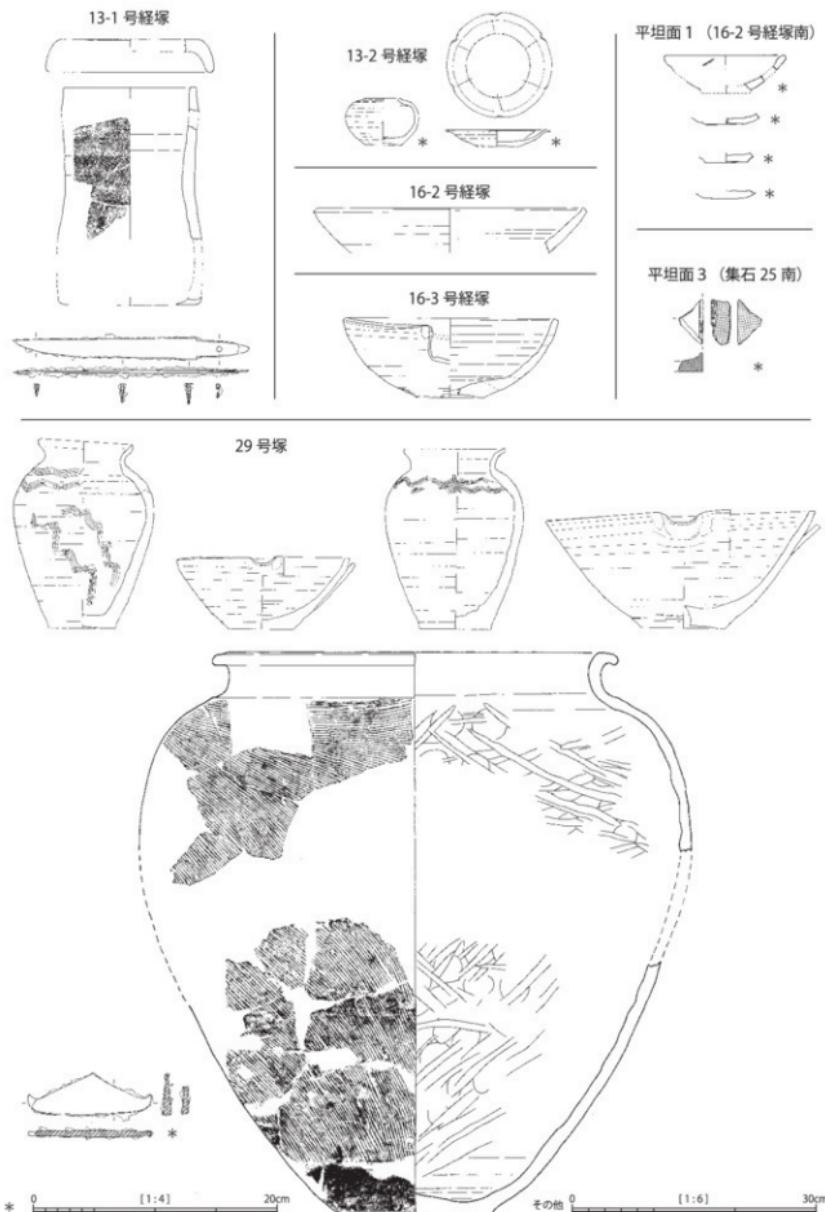


○ 0 [1:3] 15cm
* 0 [1:4] 20cm
その他 0 [1:6] 30cm

第4図 円念寺山経塚遺物実測図（1）



第5図 円念寺山経塚遺物実測図（2）



第6図 円念寺山經塚遺物実測図（3）

(イ) 黒川上山墓跡 (第7図～第11図、第4表、写真4～6)

a. 所在地

富山県中新川郡上市町黒川字上山・牛屋地内

b. 立地・眺望

郷川右岸の低位段丘面上に立地し、西地区と東地区の間には小規模な谷を挟む。標高は 62～75 m、現河床面からの比高差は 25～30 m ほどである。遺跡からは東方に劍岳・立山(雄山)の山頂及び護摩堂地区を望む。また郷川を挟んだ南方に円念寺山経塚を見上げ、西方には日枝神社遺跡を望む。

c. 調査

平成6年度に下水管路道の敷設に先立つ記録保存目的の発掘調査を行ったところ、保存状態の良好な中世墓群であることが判明した。この成果を受けて、平成8年度・平成9年度にわたって内容確認を目的とする発掘調査を実施した。いずれも調査主体は上市町教育委員会、調査対象面積は計約 8,500m²である。

d. 調査結果

【西地区】

調査により検出した遺構は、縄文時代と中世に属するものである。遺構は舌状に張り出した台地上のほぼ全体で検出されるが、縄文時代に属するものは大部分が中世の遺構によって破壊されているようで、一部を除いてはほとんど検出されなかった。

中世の遺構は全体で 71 箇所を確認した。そのほとんど全てが墓あるいはそれに関わる施設と想定されるものである。形態による分類の内訳では、埋葬施設が墳丘墓 40 基・集石墓 15 基・土塁上墓 11 基・塔墓 2 基・土壙墓 2 基の計 70 基、その他の施設が円形集石 1 基となる。ただし、1 基の墓に複数の埋葬主体部を持つものや既存の墓に追加して新たな墓が造りつけられたものが多く、また現状では墓として認識できていない部分があることも想定されることから、本墓群の正確な墓数及び被葬者の人数は不明である。

埋葬の方法としては土葬・火葬の双方が認められる。全ての主体部の調査を行ったわけではないため詳細な内訳は不明であるが、主体部の不明な墓であっても周辺に焼骨片が散布している場合が多く、全体の 8 割以上が火葬であるものと想定される。また火葬の場合では、焼骨をそのままあるいは有機質の容器に入れて納めるもの（ここでは「直接埋納」とする）と、陶製の蔵骨器を用いるものとがある。蔵骨器は多くの場合珠洲壺・片口鉢からなるが、白磁四耳壺や八尾壺もある。また副葬品としては一部に土師器皿が認められるのみである。これらの出土遺物の年代からはこうした造墓活動が行われたのは 12 世紀後半から 15 世紀初頭にかけてとみられるが、14 世紀前半で一度途切れているようである。そして 14 世紀末～15 世紀初頭にかけて墓群南側のテラス状平坦面上及び台地縁辺部に五輪塔や板碑を伴う塔墓が築かれ、まもなく終焉を迎えたことが窺われる。

調査の詳細及び遺構単位の内容については発掘調査報告書（上市町教育委員会 1995・1997・2005a）を参照願うこととし、以下では埋葬施設の形態分類ごとにその概略と分布状況、出土遺物等について記述する。なお、各遺構の計測値等については第4表に示した。

・**墳丘墓**：ここで言う墳丘墓とは、その高さや墓石等の外装施設の有無については問わず「墳丘をもつ墓」を抽出したものである。墳丘墓と分類したものは 40 基（1 号墓～14 号墓・16 号墓・17 号墓・20 号墓・25 号墓～32 号墓・43 号墓～47 号墓・49 号墓～51 号墓・55 号墓・61 号墓～64 号墓）で、本墓群の主体となるものである。墳丘の遺存状況は極めて良好で現状でも相当の高さを残し、12 世紀末の作とされる『餓鬼草子』の疾行餓鬼や食糞餓鬼の図に見える墓地の有様を男鬚とさせる。

墳丘は盛土によって構築されるものがほとんどで、平面形は方形を基調としたものが圧倒的に多い。また円形・長円形を呈するものであっても墳頂部の石組みは方形を意識しているものが多く、造墓に際して方形が強く意識されて

いたことが窺われる。1号墓を中心とする墓群や25号墓～29号墓などのように複数の墳丘墓がブロック的に連接するものが一部に認められるが、全体的な傾向としては概ねある程度の間隔を置きながら台地のほぼ全域にわたってそれぞれが独立して築かれている状況を見て取ることができる。これらの墳丘墓はおそらくこの地が墓域として利用され始めた初期の段階で、まだ空間的余地の多かった時期に順次築かれていったものであろう。

9号墓・12号墓～15号墓が土葬である以外はいずれも火葬と見られ、焼骨の直接埋納と藏骨器の使用の両方が見られる。藏骨器は珠洲焼を使用したものがほとんどで、壺・片口鉢のセットからなるものが2号墓で3組、2-2号墓・3号墓・55号墓でそれぞれ1組ずつ、壺のみのものが3-1号墓で1点確認された。珠洲焼以外では31号墓で八尾壺、45号墓で白磁四耳壺と土師器皿2枚からなる藏骨器が出土した。また、副葬品として土師器皿を出土するものが多く、中でも6号墓・8号墓はともに8枚の土師器皿が一括で埋納されていた。

これらの出土遺物の年代は12世紀後半～14世紀初頭まで幅があるが、その大部分は13世紀前半までのもので、先に触れたようにこれらの墳丘墓は墓群全体の中でも早い時期に集中して築かれたものと言える。

・**集石墓**：集石墓とは、墳丘を持たず平面的な集石・敷石が施されたもので、本墓群で集石墓と分類したものは15基ある（15号墓・21号墓～24号墓・30号墓・33号墓・42号墓・52号墓～54号墓・57号墓～59号墓・68号墓）。平面形は概ね方形で、一見雑然とした集石あるいは敷石のようでもよく見ると方形の縁石がめぐっているものがある。全体的に本墓群の南半域に偏在し、また48号円形集石を中心とするブロックの墓群に含まれる30号墓・33号墓以外は、墳丘墓間の空いた空間を利用して築かれている感がある。これまで確認された15基の他にも現在未発見の集石墓が多数存在している可能性が高く、実際に68号墓は調査終了後に樹根による搅乱を経て発見されたものである。

これらの集石墓はその全てが火葬と推定されるもので、42号墓・68号墓で珠洲壺の藏骨器が出土したほか、集石及びその周辺には焼骨片や珠洲壺片が散布していた。年代がわかるものは42号墓の藏骨器（13世紀末）のみであるが、遺構の位置関係等を加味して考えると、やはり前述した墳丘墓に後出するものが多いものと想定される。

・**土塁上墓**：土塁上墓とは土塁状の高まりの上に集石を施して築かれた埋葬施設で、本墓群では48号円形集石を取り巻くように配された34号墓～41号墓、墓群南東隅の墓道に面して築かれた65号墓～67号墓の計11基がある。前者は既に存在していた墳丘墓の間をつなぐように土塁が築かれており、時期的な前後関係が認められる。調査では土塁上面に方形の石組みを施しているものを埋葬施設として認識したが、これらの土塁上には明確な石組みを持たない未発見の主体部が多数存在している可能性が高い。これらは全て火葬と考えられ、36号墓で珠洲壺の藏骨器が出土したほか、集石中からは焼骨片や珠洲壺片が出土した。なお、36号墓の藏骨器は13世紀後半のもので、器面全体に類例のない装飾が施されており、埋葬に際しての特注品の可能性がある。

・**塔墓**：ここで言う塔墓とは、明確な墳丘や石組みを持たず五輪塔等の石製塔婆のみを墓標とするもので、ここまで分類とはややその区分が異なる。調査では元位置を保つものとして56号墓・60号墓の2基を確認した。いずれも墓域の縁辺部に築かれており、またこの2基以外にも墓群南側のテラス状平坦面上において五輪塔の部材や板碑等が多く検出されている。上部の崖際に存在する集石墓等からの崩落、及び現状では埋葬施設として認識できていない墓が存在している可能性が考えられる。60号墓では五輪塔（ないし宝篋印塔）の台座とその基礎となる石材が東西に2基分並んで検出され、その下位では西側にのみ珠洲壺の藏骨器が埋納されていた。各種石造物及び60号墓の藏骨器は14世紀末～15世紀初頭に位置づけられる。

・**土壙墓**：平坦面上に土壙を穿っただけの埋葬施設で、明確な墳丘や石組みは持たないものである。調査では18号墓・19号墓の2基のみ確認した。いずれも先述した集石墓のように墳丘墓間の空きスペースに築かれた感があり、他には土壙墓が集中するような空間的余地も見当たらない。出土遺物等ではなく年代は不明である。

・**48号円形集石**：34号墓・35号墓・39号墓～41号墓が乗る土壙に囲まれた中央の崖地に築かれた円形の集石である。東側に墓道があり、それに面する部分の土壙が途切れ、この集石への入口となっている。入口から西側を見ると25号墓～34号墓があたかも祭壇のように配置されている。集石の下位には土壙が存在するが、内容物はなくその性格

については不明である。しかしながらその立地から地上に墳墓堂あるいは石塔などが建立されていた可能性が考えられる。

【東地区】

西地区の中世墓群とは小規模な谷を挟んで位置する平坦面群である。後世の畑作や植林により地形の改変を受けているため必ずしも現存状況は良くないが、10箇所の平坦面、6基の墳丘、石垣、参道と考えられる緩斜面などを確認した。10箇所の平坦面のうち、平坦面2では2間×2間の掘立柱建物跡、平坦面6・平坦面8では原位置を離れた礎石群及び根石と考えられる集石が検出された。遺構に直接伴う遺物は出土していないためこれらの遺構の構築年代は不明であるが、平坦面上や墳丘盛土内からは9世紀後半～10世紀前半の須恵器を中心として多数の遺物が出土しており、西地区の中世墓群の造営に先立ち、この地に小規模な堂宇や古墓からなる何らかの宗教的な施設が存在したことを示している。

調査の詳細については、発掘調査報告書（上市町教育委員会 1998・2005a）を参照願いたい。



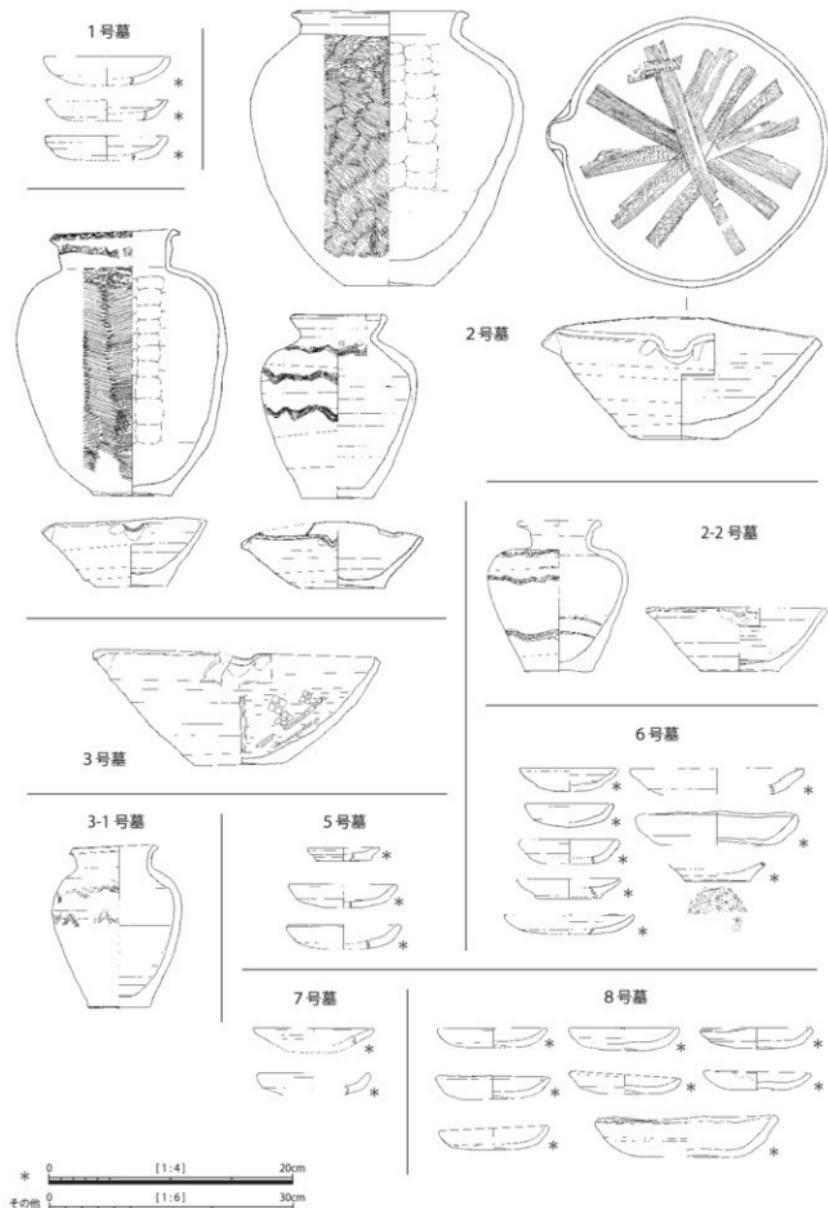
第7図 黒川上山墓跡遺構図（中世墓群部分）



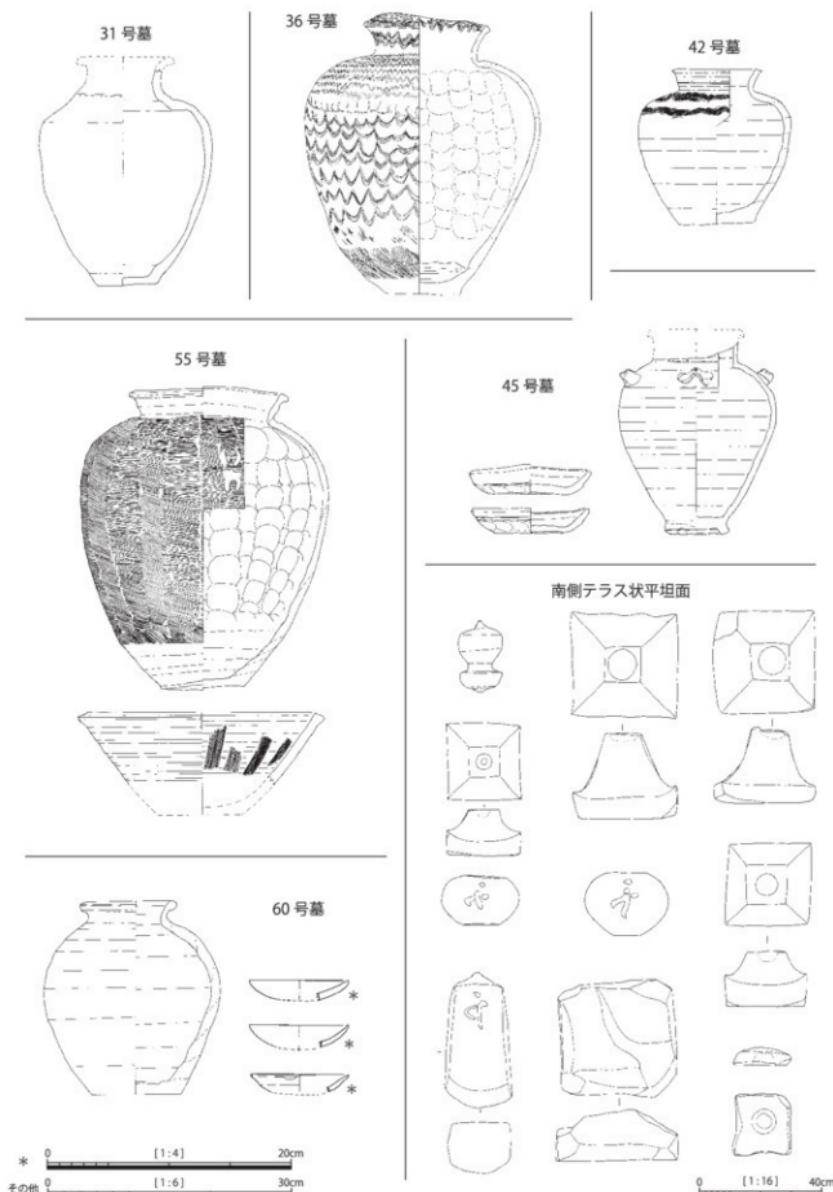
第8図 黒川上山墓跡遺構全体図

第4表 黒川上山墓跡 中世墓群関連遺構一覧表

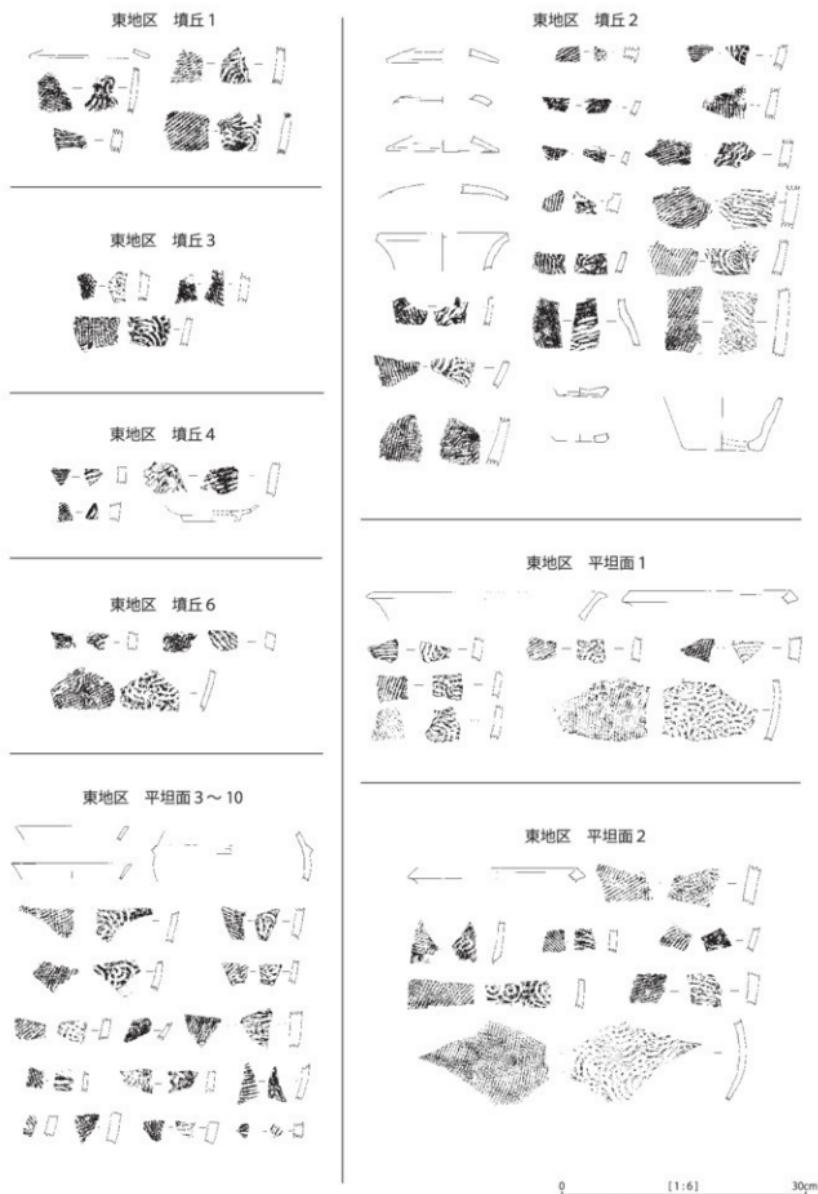
No.	遺構名	種別	区画				全体面積	年代	備考
			平面図	外表輪郭	長軸・短軸・高さ	形状	輪動・輪郭・深さ	跡跡	
1	1号墓	墳丘墓	方形	—	10.50'x7.12'x0.5	円形穴	0.20'x0.20' 7	火葬	—
						円形穴	0.32'x0.29' 7	—	12c 後
2	2号墓	墳丘墓	方形(三段)	石棺	5.11'x4.63'x0.89	円形穴	0.50'x0.50	火葬	不明
						円形穴?	不明	火葬	13c 前
3	3-1号墓	墳丘墓	方形	石棺	2.80'x1.89'x0.56	円形穴?	不明	火葬	珠洲西・鉢
4	4-2号墓	墳丘墓	長方形	石棺	7.05'x0.60'x0.40	円形穴?	不明	火葬	珠洲西・鉢
5	5号墓	墳丘墓	方形	石棺	4.38'x1.46'x0.65	円形穴?	不明	火葬	珠洲西・鉢
6	6-1号墓	墳丘墓	不規	—	—	円形穴	0.25'x0.25'x0.27	火葬	珠洲西
7	4号墓	墳丘墓	方形	石棺	2.93'x1.73'x0.51	円形穴	0.34'x0.30'x0.48	火葬	—
8	5号墓	墳丘墓	圓内円	—	4.56'x1.86'x0.35	方穴六	1.51'x1.43'x0.42	火葬	13c 前
9	6号墓	墳丘墓	長方形	石棺	5.49'x1.20'x0.56	円形穴	1.25'x0.80'x0.67	火葬	13c 前
10	7号墓	墳丘墓	圓内円	—	3.97'x1.43'x0.51	円形穴	1.17'x1.09'x0.69	火葬	13c 前
11	8号墓	墳丘墓	圓内円	—	4.56'x1.63'x0.61	墳丘底面圖	—	火葬か	13c 前~14c
12	9号墓	墳丘墓	圓内円	—	11.40'x6.35'x1.69	円形穴	1.42'x1.30'x1.10	土葬	—
13	10号墓	墳丘墓	圓内円	—	3.42'x2.77'x0.28	円形穴?	不明	火葬	不明
14	11号墓	墳丘墓	方形(三段)	石棺	4.65'x1.77'x0.94	円形穴	0.60'x0.50'x2.52	火葬	不明
15	12号墓	墳丘墓	方形	石棺	3.18'x1.89'x0.58	円形穴	1.12'x0.95'x0.58	土葬	不明
16	13号墓	墳丘墓	方形	石棺	2.67'x1.67'x0.31	円形穴	0.65'x0.50'x0.62	土葬	不明
17	14号墓	墳丘墓	方形(三段)	石棺	3.58'x1.09'x0.49	円形穴	1.52'x1.50'x0.42	土葬	不明
18	15号墓	集石塚	—	—	—	—	—	—	13c 前
19	16号墓	墳丘墓	圓内円	石棺	3.55'x1.84'x0.56	墳丘底面圖	—	火葬か	石棺より珠洲西・土葬器皿1
20	17号墓	墳丘墓	方形	—	2.36'x2.36'x0.24	円形穴?	不明	土葬か	墳丘より土葬器皿2
21	18号墓	土塁	—	—	—	円形穴	1.07'x0.72'x0.33	土葬	土塁より土葬器皿・土葬器皿
22	19号墓	土塁	—	—	—	円形穴	1.26'x1.03'x0.26	土葬	—
23	20号墓	墳丘墓	圓内円	石棺	1.00'x1.00'x0.50	不明	不明	火葬	珠洲西より珠洲西片
24	21号墓	集石塚	方形	—	—	不明	不明	火葬か	不明
25	22号墓	集石塚	—	—	—	不明	不明	火葬か	22号と豆腐か
26	23号墓	集石塚	—	—	—	不明	不明	火葬か	21号と豆腐か
27	24号墓	集石塚	—	—	—	不明	不明	火葬か	24号と豆腐か
28	25号墓	墳丘墓	方形	石棺	3.00'x2.34'x0.43	不明	不明	火葬か	墓底面で変形化・被熱焼粙化。椎骨等はなし。
29	26号墓	墳丘墓	方形	石棺	3.00'x2.34'x0.42	不明	不明	火葬か	墓底面で変形化・被熱焼粙化。椎骨等はなし。
30	27号墓	墳丘墓	方形	石棺	2.58'x2.40'x0.46	不明	不明	火葬か	墓底面で変形化・被熱焼粙化。椎骨等はなし。
31	28号墓	墳丘墓	方形	石棺	2.74'x1.84'x0.32	円形穴?	不明	火葬	珠洲西・鉢
32	29号墓	墳丘墓	方形	石棺	3.64'x2.76'x0.23	不明	不明	火葬か	墓底面で変形化・被熱焼粙化。椎骨等なし。28号と豆腐か
33	30号墓	集石塚	—	—	—	不明	不明	火葬か	不明
34	31号墓	墳丘墓	方形	石棺	2.88'x1.80'x0.21	円形穴	0.32'x0.20'x0.28	火葬	八尾東
35	32号墓	墳丘墓	方形	石棺	4.00'x4.60'x0.39	不明	不明	火葬か	13c 前~14c 前
36	33号墓	集石塚	—	—	—	不明	不明	火葬か	不明
37	34号墓	集石塚	—	—	—	不明	不明	火葬か	不明
38	35号墓	土塁上塗	—	—	—	不明	不明	火葬か	不明
39	36号墓	土塁上塗	—	—	—	不明	不明	火葬か	不明
40	37号墓	土塁上塗	—	—	—	不明	不明	火葬か	不明
41	38号墓	土塁上塗	—	—	—	不明	不明	火葬か	不明
42	39号墓	土塁上塗	—	—	—	不明	不明	火葬か	不明
43	40号墓	土塁上塗	—	—	—	不明	不明	火葬か	不明
44	41号墓	土塁上塗	—	—	—	不明	不明	火葬か	不明
45	42号墓	集石塚	—	—	—	不明	不明	火葬か	珠洲西
46	43号墓	墳丘墓	方形	石棺	4.74'x1.40'x0.80	不明	不明	火葬か	13c 未
47	44号墓	墳丘墓	方形	—	5.10'x1.94'x0.45	不明	不明	火葬か	不明
48	45号墓	墳丘墓	方形	—	5.00'x1.91'x1.30	墳丘底面圖	—	火葬	白堀四貝塚・土葬器皿2
49	46号墓	墳丘墓	方形	石棺	4.08'x1.86'x0.93	不明	不明	火葬か	12c 後
50	47号墓	墳丘墓	長方形	—	7.94'x1.96'x0.78	不明	不明	火葬か	不明
51	48号墓	集石塚	—	—	—	—	—	—	造塚跡か
52	49号墓	墳丘墓	方形	石棺	7.42'x2.40'x0.31	不明	不明	火葬か	50号と豆腐か
53	50号墓	墳丘墓	長方形	石棺	7.42'x2.40'x0.31	不明	不明	火葬か	50号と豆腐か、表面に1.75 m x 1.1 m の縫合跡あり。袋泡空洞か
54	51号墓	墳丘墓	方形	石棺	3.00'x2.46'x0.45	不明	不明	火葬か	不明
55	52号墓	集石塚	—	—	—	不明	不明	火葬か	不明
56	53号墓	集石塚	—	—	—	不明	不明	火葬か	周辺東石中より珠洲西片・珠洲跡片
57	54号墓	集石塚	—	—	—	不明	不明	火葬か	周辺東石中より珠洲西片・珠洲跡片
58	55号墓	墳丘墓	方形	—	2.12'x1.80'x1.72	円形穴	0.38'x0.34'x0.30	火葬	珠洲西・鉢
59	56号墓	堆塚	—	—	—	不明	不明	火葬か	55号と豆腐か
60	57号墓	集石塚	—	—	—	不明	不明	火葬か	55号と豆腐か
61	58号墓	集石塚	—	—	—	不明	不明	火葬か	不明
62	59号墓	集石塚	—	—	—	不明	不明	火葬か	不明
63	60号墓	堆塚	—	—	—	円形穴	2.80'x1.18'x0.50	火葬	珠洲西
64	61号墓	墳丘墓	方形	—	3.26'x1.04'x0.48	不明	不明	火葬か	14c 未~15c 前
65	62号墓	墳丘墓	方形	—	3.12'x1.64'x0.30	不明	不明	火葬か	12c 未と豆腐か
66	63号墓	墳丘墓	方形	—	4.74'x1.68'x1.17	不明	不明	火葬か	不明
67	64号墓	墳丘墓	方形	—	3.74'x2.80'x0.58	不明	不明	火葬か	不明
68	65号墓	土塁上塗	—	—	—	不明	不明	火葬か	不明
69	66号墓	土塁上塗	—	—	—	不明	不明	火葬か	不明
70	67号墓	土塁上塗	—	—	—	不明	不明	火葬か	周辺東石中より珠洲西片
71	68号墓	集石塚	—	—	—	円形穴	0.36'x0.36'x0.22	火葬	平成16年度発掘・検査記録



第9図 黒川上山墓跡遺物実測図（1）



第10図 黒川上山墓跡遺物実測図（2）



第11図 黒川上山墓跡遺物実測図（3）

(ウ) 伝真興寺跡（第12図～第13図、写真7～9）

a. 所在地

富山県中新川郡上市町黒川字花岡谷地内

b. 立地・眺望

黒川集落背後の山中、花岡谷の谷頭にある通称「フルデラ」と呼ばれる平坦面上に立地する。標高は120～135m、麓の集落との比高差は90～100mほどである。中心となる平坦面は地形上は南西方向を向くが視界は真西方向に開け、平野部への眺望が良好である。残る三方は山地斜面となり視界が遮られているが、東側の尾根上に上がると南方に円念寺山経塚・黒川上山墓跡を見下ろすことができ、また東方には劍岳・立山（雄山）の山頂及び護摩堂地区を望むことができる。

c. 調査

黒川上山墓跡の調査成果を受けた周辺調査として、平成10年・平成11年の2ヶ年にわたって発掘調査を実施した。調査主体は上市町教育委員会、調査対象面積は約3,200m²である。

d. 調査結果

この地は、地元では古くから「フルデラ」と呼びならわされていた。近年まで麓にあった真言宗本覚院の寺伝によると、本覚院は寛弘5年（1008）に真興上人によって開かれた「花岡山真興寺」が富山に移転したため、その後を継ぐものとして享保7年（1722）に開かれたものであり、「真興寺」は寛和2年（896）に真興上人が弘法大師止錦の護摩堂村弘法堂を参拝した帰りに麓の黒川に立ち寄り、この地を八正道を宣布するにふさわしい地であるとして庵を結んだのが始まりとされている。この伝承の真偽についてここで詮索することはしないが、調査では実際にこの地が寺院であったことが判明し、伝承にある「真興寺」に比定できるものと考えた。

ここでは、山中に人為的に造成された大小11箇所の平坦面群を対象として実施した調査の結果について概略を記述する。詳細については発掘調査報告書（上市町教育委員会1999・2000・2005a）を参照願いたい。

・平坦面1：本遺跡の中心となる広大な平坦面で、面積は約1,300m²を測る。基壇状の高まりなどの地形の変化によって平坦面1-1～VIIの7箇所に区分した。

平坦面1-1は、本寺院の中核となる本堂（ないし金堂）跡と考えられるもので、平坦面1の中央で周囲からは50cmほど高い基壇状の高まりを有している。その平面規模からは本堂は五間堂であったものと想定される。ほとんどの礎石は後世の烟作等で移動しているが、原位置を保つものや根石の痕跡等を検討した結果、3棟の礎石建物跡が復元され、少なくとも2度の建替えが行われたことが窺われた。なお、これらの礎石建物はいずれも南北方向を正面としており、現在の地形とも合致するものである。ただし、建物の復元に至らなかった一部の石列等にはほぼ正確に東西・南北方向に軸を持つものがあり、遺跡からの眺望がほぼ真西に向けて開けていることなどを考慮すると、西方を正面とする前身施設が存在した可能性が高い。

本堂跡及びその周辺の出土遺物には土師器・須恵器・珠洲焼・越中瀬戸焼・唐津焼・鉄製品・銅製品・石製品などがある。9～19世紀という広い年代幅を持つが、14・17世紀代のものはほとんどみられない。数量的には15～16世紀代のものが多く、建替えに伴う片付け等を考慮する必要はあるものの、現在確認される寺院遺構の最盛期はこの時期と見ることが可能である。また、一定量出土している古い時期の遺物は、前述した前身施設に伴うものであろう。

平坦面1-IIは、本堂に向かって左に抵張された基壇状の高まりである。後世の烟作で削平されたためかやや低く、建物等の痕跡は確認できなかった。

平坦面1-IIIは本堂に向かって右側の地区で、その北東隅では2箇所の池を確認した。池1は現在も水が湧き出しているもので、壁面には石が貼られている。池の南西側には若干隙間を空けて整然と並べられた石敷きが設けられ、さらに本堂横を辿って山門付近まで続く石組みの溝跡が存在する。これらは池1からの導水施設と考えられる。池1

の南側にある池2は水が湧き出ているものではないが、池1が雨水などで増水した際にそれを受けけるような形で配されている。池1・2の間で検出された土壤SK1は、内部から多量の炭化物と土師器皿が出土した。土師器皿は被熱痕やタールの付着が認められるものが多く含まれ、護摩等の火を焚く儀式の後片付けが行われた跡であるものと想定される。またそのことにより、防火を意識して池に隣接した場所に設けたものと想定される。なお、平坦面の南隅では土壤SK2とそれに隣接する集石が検出されたが、性格は不明である。

平坦面1-IVは、本堂正面の広場に相当する部分である。南西端部付近には石列、また南西下方に位置する平坦面2との間の段差には石垣が築かれており、いずれも本堂の柱列にほぼ平行する。石垣・石列のほぼ中央には4段の石段があり、周囲の状況から山門の存在が想定される。なお、現在確認される山門の北西には石垣・集石を伴うスロープ状の部分があり、ここからも平坦面1-IVへと至ることができる。その軸方向は前述した前身施設の軸方向とはほぼ一致することから、前身施設に伴うものであった可能性が高い。

平坦面1-Vは平坦面1-IIの北西の地区で、この面上には平坦面1-VI・VII・VIIIとした基壇状の高まりが背後の急斜面の裾部に接して築かれている。上面の調査は行っておらず詳細は不明であるが、堂宇の存在が窺われる。平坦面1-VIIIが本堂と平行して南西方向に向くのに対し、平坦面1-VI・VIIはほぼ南面して前述した本堂の前身施設と軸方向が一致し、これらの基壇群にも時期差が想定される。

- ・ **平坦面2**：平坦面1-IVの南西下方に位置する平坦面で、山門の前庭部に相当する。この平坦面南端部分には尾根道から続く参道が接続し、入口部分の斜面には石段の痕跡が残っている。

- ・ **平坦面3**：平坦面1の南東に位置する1段高い平坦面で、比高差は3mほどである。奥まった位置には縁石を痕跡的に残す基壇状の高まりが設けられており、その上面で3間×3間の礎石建物跡を検出した。礎石は一部移動しているものの概ね原位置を保っている。これはその規模から三重塔の跡と推定され、基壇状の高まりは亀腹とみられる。礎石の軸方向は本堂と一致し、同時期のものと判断できる。なお、時期は不明ながらも鉄製風鈴の破片が出土しており、この遺構が塔跡であることを裏付けている。

- ・ **平坦面4**：平坦面3の北に位置する小規模な平坦面で、本来は同一面であった可能性が高いものである。

- ・ **平坦面5**：平坦面3の南東上方に位置する平坦面で、比高差は7mほどである。調査の対象とした平坦面の中では最高所に位置する。この平坦面上では南東側に寄った位置で1間×2間の礎石建物跡を検出した。春日造あるいは一間社流造の社殿と推定され、本寺院の鎮守社に相当するものであろう。なお、礎石の軸方向は本堂及び塔と一致する。

- ・ **平坦面6**：平坦面4の南東上方に位置する平坦面で、比高差は約4mである。狭小な削平面であるが平坦面3と繋がる小道が確認され、平坦面3から平坦面5へと至る際の通路の途中に何らかの施設が設けられていた可能性がある。

- ・ **平坦面7**：本堂の背後に1mほど高く広がる平坦面である。中央付近には後世の炭窯が築かれている。

- ・ **平坦面8**：平坦面2の南西下方に位置する平坦面で、比高差は5mほどである。中央に土壙があり、周辺に散乱する石には五輪塔の火輪が含まれていた。寺院の移転時に掘り返された墓跡の可能性がある。

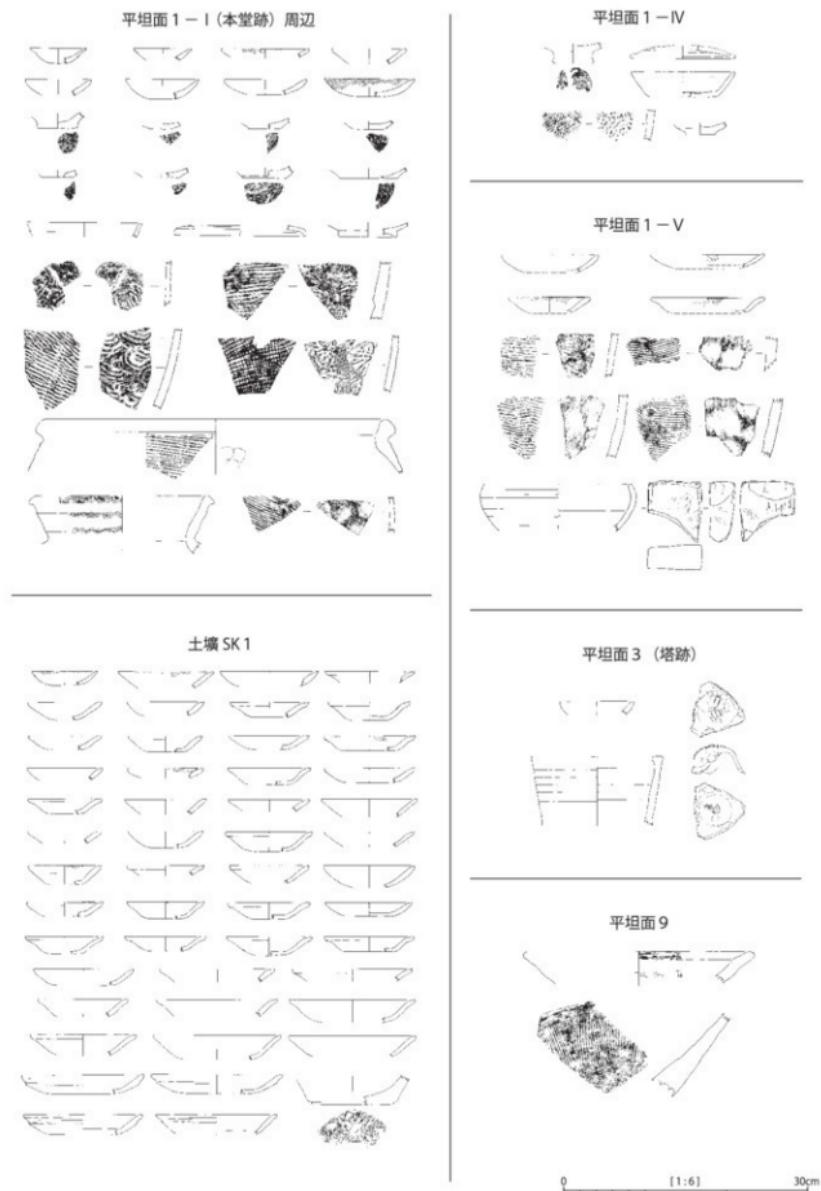
- ・ **平坦面9**：平坦面2の西下方に位置する平坦面で、比高差は4.5mほどである。平坦面1・2との間の斜面の裾部には墓跡と推定される集石が3基築かれている。

- ・ **平坦面10**：平坦面1の西下方、平坦面9の北に谷を挟んで位置する平坦面である。平坦面1との比高差は5mほどである。北側の山裾部分には湧水地点があり、麓へと水を送るパイプが取り付けられている。本寺院における重要な水源であったものと想定される。

- ・ **平坦面11**：平坦面8の西に位置する狭小な平坦面である。東側の崖面には横穴が開口しており、その前庭部となっている。



第12図 伝真興寺跡遺構図



第13図 伝真興寺跡遺物実測図



円念寺山経塚全景（北より）



尾根上に並ぶ経塚遺構（東より）

写真1 円念寺山経塚調査写真（1）



1-1号石燈遺物出土状況（西より）



1-2号経塚遺物出土状況（南より）



2-2号経塚遺物出土状況（南より）



3号経塚遺物出土状況（西より）



3号経塚の石燈（西より）



3号経塚遺の埋納状況復元（南より）

写真2 円念寺山経塚調査写真（2）



7-2号経塚遺物出土状況（南より）



9号経塚遺物出土状況（南より）



9号経塚遺物出土状況（南より）



10号経塚遺物出土状況（南より）



11号経塚遺物出土状況（南より）



15号経塚の構造（南より）

写真3 円念寺山経塚調査写真（3）



黒川上山墓跡全景（南より）



西地区の中世墓群（北より）

写真4 黒川上山墓跡調査写真（1）



北半（平成 6 年度調査区）の墓群（北西より）



1号墓周辺の様子（南西より）



2号墓遺物出土状況（東より）



8号墓遺物出土状況（西より）



11号墓（東より）



南半（平成 8 年度調査区）の墓群（北より）

写真 5 黒川上山墓跡調査写真（2）



36号墓遺物出土状況（南東より）



48号円形集石周辺の様子（東より）



60号墓遺物出土状況（南西より）



南側テラス上の石造物出土状況（南東より）



東地区の平坦面（南より）



東地区の石垣（東より）

写真6 黒川上山墓跡調査写真（3）



伝真興寺跡全景（南西より）



本堂跡（東より）

写真7 伝真興寺跡調査写真（1）



石段の痕跡を残す参道跡（南西より）



4段の石段を残す山門跡（南より）



本堂跡の基壇裾部（西より）



本堂跡横の石組溝（南より）



池1（西より）



池1（水抜き後、北東より）

写真8 伝真興寺跡調査写真（2）



土壙 SK1（西より）



山門横の石造物出土状況（西より）



山裾の基壇（平坦面1－VI、南より）



塔跡（平坦面3、北西より）



塔跡の礎石（南東より）



社殿跡（平坦面5）の礎石（南東より）

写真9 伝真興寺跡調査写真（3）

3. 史跡周辺の関連遺跡及び関連施設

本史跡の周辺には、史跡との関連性が窺われる遺跡・施設等が密集する。ここでは、それについて概観する。

(1) 関連遺跡

・日枝神社遺跡（第14図4、第15図）

現在の黒川日枝神社背後の山中に位置する社寺跡あるいは僧坊跡と想定される遺跡である。平成12年度に実施した発掘調査では、大規模な造成工事で造り出された平坦面、礎石、集石、石敷きの通路跡などのほか、銅製鉢・鉄釘・土師器皿・珠洲甕片を納めた埴輪に関わるものと推測される土壌を検出した。

・開谷東遺跡（第14図5、第16図）

宗教集落として発達したと伝えられる開谷地区の山中に位置する遺跡で、現在は開谷八幡社の境内地となっている。平成17年度に実施した発掘調査では9世紀後半～10世紀前半の赤彩土師器や須恵器が多数出土し、本史跡の成立期に並行する時期にこの地に寺院あるいは祭祀的な場が存在したことが判明した。

・黒川岸天遺跡（第14図6、第17図）

護摩堂地区に近い山中に立林する巨岩群とそれらの間に広がる平坦面群、そして斜面に開口する岩屋からなる遺跡で、平成15・16年度に発掘調査を実施した。造成された平坦面のほかには明確な「遺構」がなく、また遺物も少数の珠洲甕片（同一個体）以外にはほとんど出土していないため詳細は不明であるが、全体として「行場」としての性格を持つものと推定される。なお、本遺跡周辺の巨岩群の一部は地元で「仏岩」と呼びならわされていた。

・護摩堂曲戸遺跡（第14図7、第18図）

弘法大師ゆかりの地（伝承内容は後述する）とされる護摩堂集落の入口付近に存在する大型の塚状地形とその周囲に広がる広大な平坦面群及び塚群からなる遺跡である。平成14年度の発掘調査では調査区が狭小であったため詳細は不明であるが、大型の塚状地形は地山・岩盤の削り出しと盛土によって構築されていることを確認した。

・護摩堂村巻遺跡（第14図8、第19図）

護摩堂地区の「弘法堂」裏手の山中に立地する遺跡で、社寺跡あるいは僧坊跡と想定される広大な平坦面群が尾根上まで広がっている。平成14年度に実施した発掘調査では、集石による地業を伴う造成工事の痕跡や砂利敷きの通路跡などを検出した。遺物は近世に属するものが大部分であるが、わずかに13世紀代の珠洲焼も出土している。

・黒川地区信仰関連遺跡（第14図9）

本史跡から護摩堂地区周辺に至る郷川流域のエリアを中心とした広範囲にわたる埋蔵文化財包蔵地で、平成10年度から実施してきた分布調査によって発見された社寺跡と推測される平坦面群や塚跡群を包括する単位として設定したものである。内部には本史跡及び前述してきた関連遺跡などをその構成要素として含む。なお、前述してきた日枝神社遺跡・黒川岸天遺跡・護摩堂曲戸遺跡・護摩堂村巻遺跡はこの分布調査によって発見したものであり、未調査の遺構群についても同様な内容を持つものが含まれている可能性が高い。

・黒川砦跡（第14図10、第20図）

円念寺山経塚の立地する尾根を週った位置に立地する砦跡である。文献も伝承もなくその背景については不明であるが、黒川集落方向を意識したつくりから、土肥氏による信仰の統制・支配に関わるものと見る意見もある。

・護摩堂（鞍輪）城跡（第14図11、第21図）

護摩堂集落背後の尾根上に築かれた山城で、椎名氏の築いた松倉城跡（魚津市）の支城として位置づけられている。特徴的な山容により平野部からもランドマーク的に望むことができ、また頂上部は付近一帯で最も眺望の利くポイントとなっている。本史跡の立地する谷の最奥部に位置し、また後述するように中世の劍岳・立山信仰上でも重要な位置に立地することから、何らかの宗教施設を前身としている可能性が想定されるものである。

・小森館跡（第14図12、第22図）

伝真興寺跡の直上に位置する城館跡である。文献等では在地土豪小森氏の居城とされるが、前述した黒川砦跡と同様に土肥氏による信仰統制・支配に関わるもの、あるいは伝真興寺跡に付随する城郭施設とする見方もある。

・黒川窯跡（第14図13、第23図）

伝真興寺跡に近接して立地する越中瀬戸焼の窯跡である。現在確認されている越中瀬戸焼の窯としては最古のもので、16世紀後葉の操業とされる。本史跡の盛期との時期的な重複はないが、伝真興寺跡が寺院としての機能を保っていた時期の操業であること、また伝真興寺跡からは同窯産の可能性が高い製品が出土していることから、開窯に何らかの係わりを有していた可能性がある。

(2) 関連施設

・穴の谷靈場（第14図14、写真10）

環境庁選定全国名水百選の「穴の谷靈水」の地で、連日多くの水汲み客で賑わう上市町屈指の観光地である。砂岩と粘板岩からなる岩壁に洞窟が開口し、そこから「靈水」が尽きることなく湧き出している。この洞窟は「行者穴」とも呼ばれて古くから多くの行者が修行に訪れ、最も古い記録では嘉永元年（1848）に美濃国の白心行者が修行したとされている。靈場に至る参道沿いや周辺の山中には社寺跡と推定される大小の平坦面群が認められ、また敷地内からは15世紀代の五輪塔も出土している。これらのことから、この地の宗教的な利用は中世に遡り、本史跡とも密接に関わっていたことが想定される。

・黒川～護摩堂古道（第14図15、写真11）

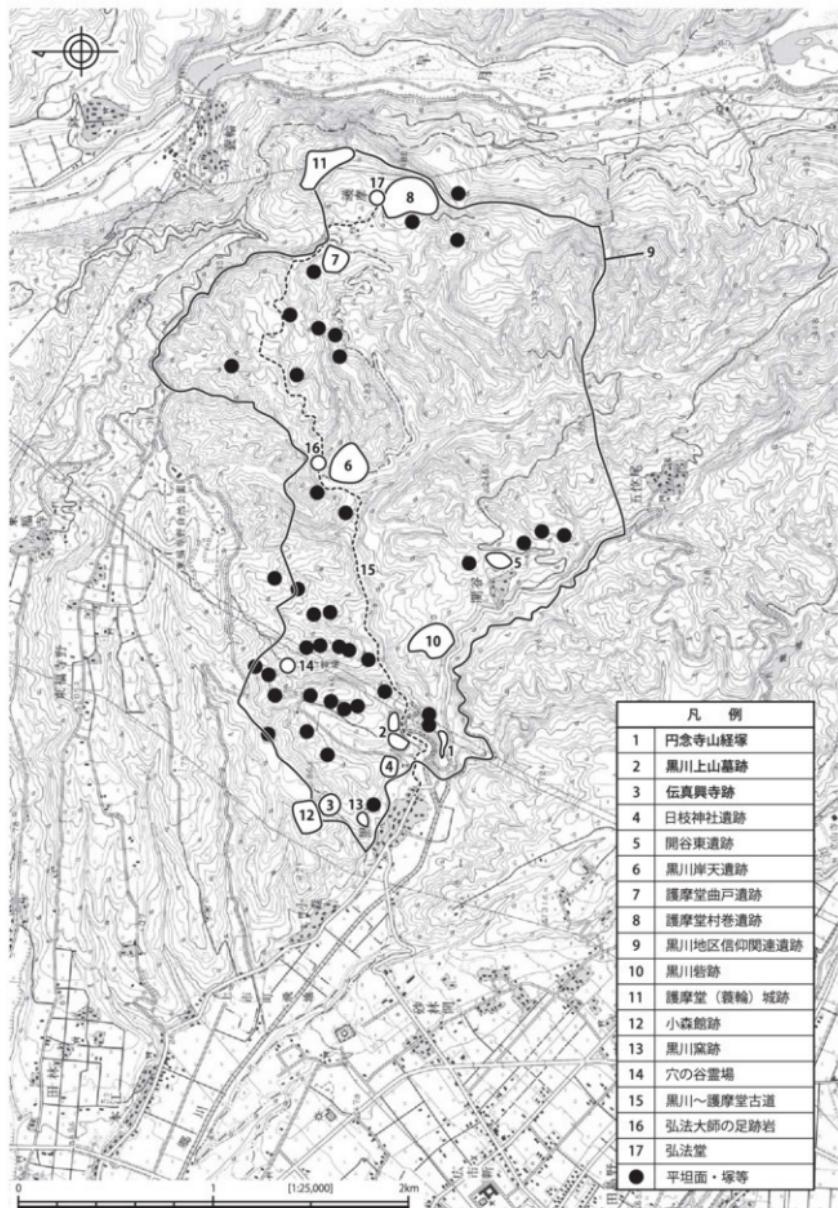
黒川地区と護摩堂地区を結ぶ古道で、一部現在の町道黒川護摩堂線と重複している。黒川岸天遺跡付近の沢の分岐に伴って町道と分岐し、林の中を行く山道となる。道沿いでは各所で黒川岸天遺跡で見られるような巨岩が露出しており、これらもやはり「仏岩」と呼ばれている。道沿いには大小の平坦面群が認められる。

・弘法大師の足跡岩（第14図16、写真12）

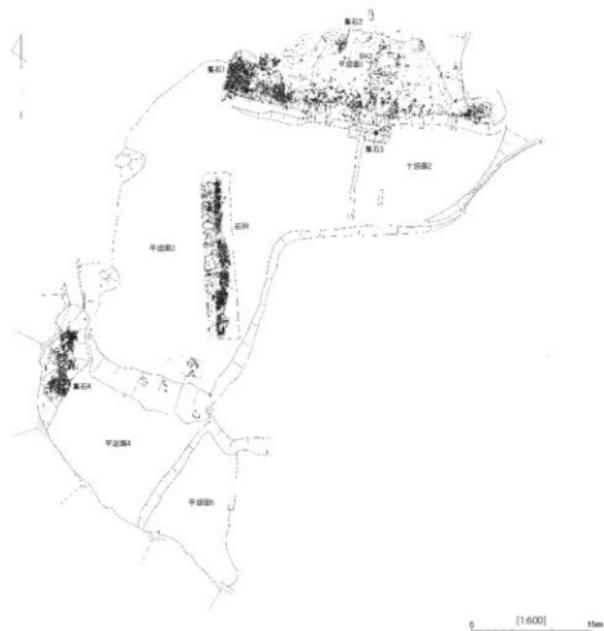
前述した古道が町道と分岐した直後の道沿いにある人為的な開削面に大小3つの自然石が配置されている。そのうち最大のものの表面には大きな窟があり、弘法大師の足跡であるとされて信仰の対象となっている。

・弘法堂（第14図17、写真13）

護摩堂村巻遺跡・護摩堂城跡の麓に所在する堂宇で、天和年間（1681～84）に大岩山日石寺の住僧が弘法大師の靈跡として建立したものとされている。本来の堂宇は火災で消失し、現在のものは明治28年（1895）に再建されたものである。堂宇の裏手からは「弘法大師の清水」（「とやまの名水」選定）が湧き出しており、水汲み客が後を絶たない。なお、この地にかかる弘法大師の伝承とは、「延暦21年（802）、弘法大師がこの地を訪れた際に住民に水を求めた。しかし付近では水の入手は容易ではなく、老婆が何町も離れた沢を下って水を汲んできた。それを大変憐れんだ弘法大師が錫杖を地面に突き立てたところ、たちどころに水が溢れ出した。そして親切にしてくれた住民の幸せを祈って護摩を焚いて祈祷を行った。」とするもので、「護摩堂」の地名もこれに由来する。

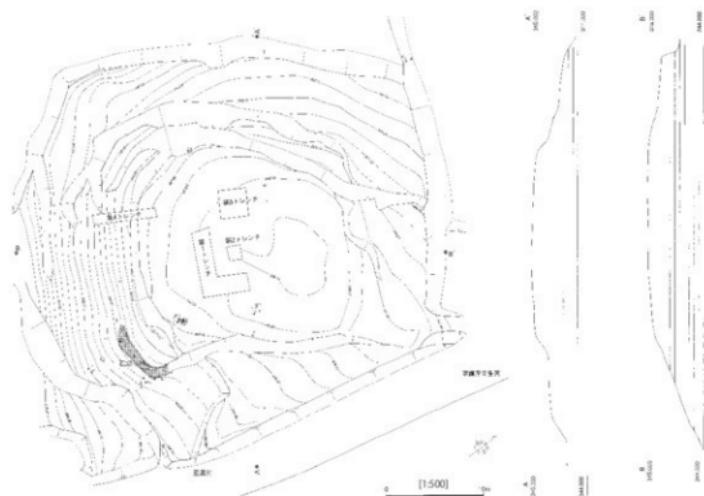


第14図 周辺関連遺跡等分布図





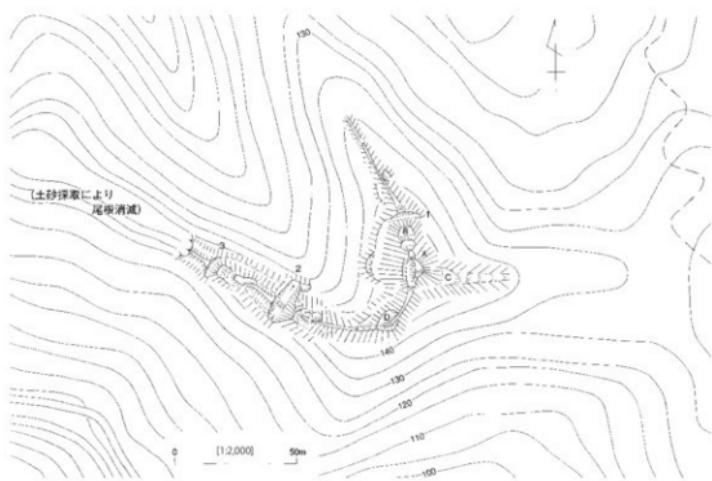
第17図 黒川岸天遺跡 (上市町教育委員会 2005b より)



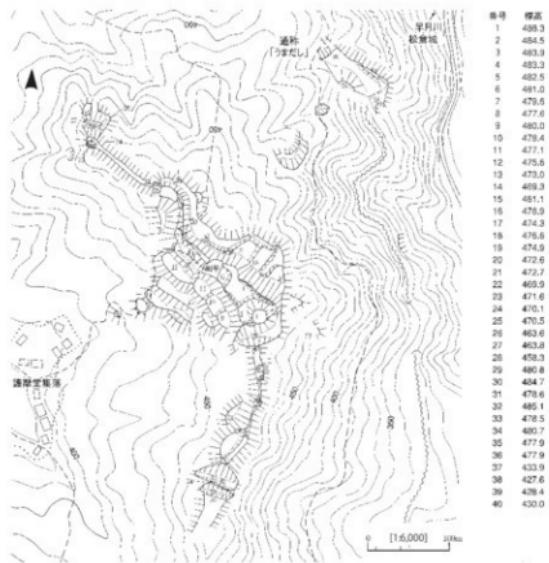
第18図 護摩堂曲戸遺跡 (上市町教育委員会 2003 より)



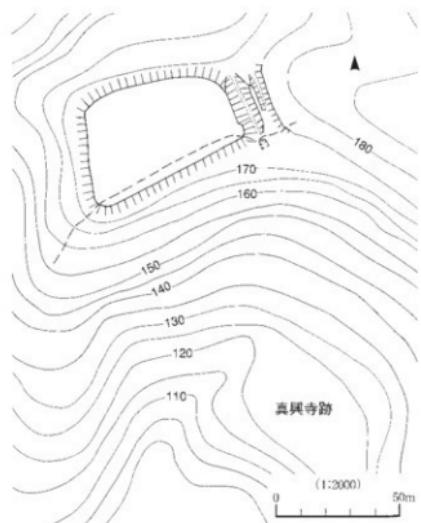
第19図 護摩堂村巻遺跡（上市町教育委員会 2003より）



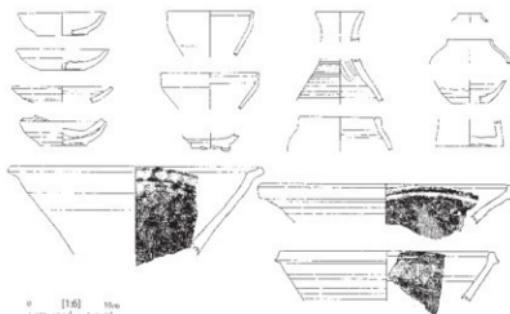
第20図 黒川砦跡（高岡 2007より）



第21図 護摩堂（葦輪）城跡（富山県埋蔵文化財センター 2006 より）



第22図 小森館跡（富山県埋蔵文化財センター 2006 より）



第23図 黒川窯跡（北陸中世土器研究会 1997より）



写真10 穴の谷靈場



写真11 黒川～護摩堂古道



写真12 弘法大師の足跡岩



写真13 弘法堂

4. 総括

(1) 史跡上市黒川遺跡群の変遷とその背景

ここまで本史跡及び周辺の関連遺跡等について概略を述べてきた。ここであらためて本史跡の年代的な推移を整理すると、第24図のようになる。

遺跡名／年代	9C	10C	11C	12C	13C	14C	15C	16C	17C	18C
円念寺山経塚				■						
黒川上山墓跡	■	■	■	■	■	■	■			
伝真興寺跡	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

第24図 史跡上市黒川遺跡群の消長

不明瞭な部分を含みながらも、これらの消長にはいくつかの画期を見出すことができる。ここではその画期を元に史跡の存続期間を第1期から第4期に区分し、その背景について検討する。

- ・**第1期（9～11世紀）**：史跡内では黒川上山墓跡・伝真興寺跡、周辺遺跡では日枝神社遺跡・開谷東遺跡において遺物が出現し、何らかの営みが開始された時期である。全国的に山岳修験が発生・流行した時期であり、これらの遺跡が山中に立地することやその後の展開を考えると、山林修行の場としての機能を有していた可能性が高い。
- ・**第2期（12～13世紀）**：円念寺山経塚及び黒川上山墓跡の墓群が造営を開始し、さきに出現していた伝真興寺跡と合わせ、「黒川靈場」とでも言うべき宗教施設群の最盛期を迎える時期である。なお、この時期は本史跡の下流域に広がっていた堀江荘（保）の成立時期にある。堀江荘は国衙領の系譜をもつ莊園で、国衙在庁官人宮道季式の手によって勧修寺流藤原氏の松室法橋に寄進された後、文治2年（1186）には祇園社領となった。「黒川靈場」の成立・発展の背景にはこの堀江荘をめぐる社会の動きが大きく関わっていたものとみられ、場合によってはこの荘園自体が「靈場」を運営していくことを目的として開かれた国衙領であった可能性もある。
- ・**第3期（14～16世紀）**：黒川上山墓跡と伝真興寺跡がほぼ時を同じくして活動を中断し、その後黒川上山墓跡は一時の再興の後に廃絶、伝真興寺跡は再興して寺院としての最盛期を迎えるという時期である。この時期は、東国武士である土肥氏が堀江荘の荘官として入部して勢力を拡大するなど、周辺一帯で武家勢力の活動が活発になった時期にある。黒川の宗教施設群の周辺及び後述する立山靈場へ至る尾根筋ルート上には、これらを監視・規制するかのようなかたちで各所に山城が築かれ、両者の間で何らかの摩擦が生じていた可能性が想定される。
- ・**第4期（17世紀～）**：この地における宗教的な活動がほとんど確認できなくなり、歴史上からその姿をほぼ消してしまう時期である。伝真興寺跡は18世紀初頭に再興するがすぐに移転・廃絶し、その跡地は麓に開かれた本覚院によって畑作などの土地利用が行われるようになった。なお、この時期は加賀の前田氏が越中支配を確立した時期でもある。前田氏は、立山靈場への入口を芦峠寺からのルートに一本化したり、その時点では衰退していた大岩山日石寺を加賀藩の祈願所となるなど、信仰を「規制」するのではなく「管理」するという施策を展開したようである。これにより黒川からの立山靈場への入口は完全に忘れ去られることになったものと考えられる。

(2) 「立山信仰」とのつながり

史跡上市黒川遺跡群の背後には、北アルプス立山連峰の靈峰・剣岳を仰ぎ見ることができる。この地で本史跡のような宗教的な営みが成立・発展した背景には、この剣岳に対する信仰があったとみて間違いない。そうした視点から周辺の状況を検討してみると、黒川から立山信仰上の一拠点・室堂に至る「黒川—護摩堂—千石城山—大熊山—早乙女岳—大日岳—奥大日岳—室堂」という尾根筋ルートが浮かび上がる（第25図）。さらに周辺に目を転ずると、史跡・重要文化財の磨崖仏で知られる大岩山日石寺からも高峰山・大辻山・早乙女岳を介して室堂にいたるルートが想定さ

れ、さらには立山町の芦ヶ岳寺からも礼拝山を経由してこれらのルートに合流することが可能であることがわかる。

これらのことからは、芦ヶ岳寺から常願寺川沿いに室堂へと至る「芦ヶ岳寺ルート」のみで知られる近世立山信仰の成立以前には、各地で複数の入口がありそれが密接に結びつきながら信仰上のネットワークを形成していた可能性を想定することができるであろう。

なお、立山霧場では芦ヶ岳寺室堂遺跡の発掘調査などの成果により、その内容が立山1期～立山4期に区分し得ることが知られている。これを前述した黒川の変遷と対比させると第5表のようになる。両地域の動向が見事なほど同調しているのが理解でき、前述した尾根筋ルートを介して黒川と立山霧場が深く結びついていたことを物語っている。

第5表 史跡上市黒川遺跡群と立山霧場の変遷

時期（年代）	史跡上市黒川遺跡群			立山霧場	
中世以前 (奈良～平安) 9世紀～11世紀	黒川1期 発生	【遺跡の出現】 黒川上山墓跡 伝真興寺跡	・山岳修験との結びつき	立山1期 発生	・鶴岳をはじめとする山上祭祀 (信仰) 遺跡の出現 ・芦ヶ岳寺室堂遺跡活動開始 (遺物の出現)
中世前期 (平安後～鎌倉) 12世紀～13世紀	黒川2期 発展	【遺跡群の盛行】 円念寺山經塚 黒川上山墓跡	・「霧場」の成立 ・堰江荘(保)成立	立山2期 発展	・芦ヶ岳寺室堂遺跡盛行 (遺物の増加)
中世後期 (南北朝～戦国) 14世紀～16世紀	黒川3期 衰退	黒川上山墓跡の麻絶 伝真興寺跡の断絶・再興	・土肥氏など武家勢力の介入 ・尾根筋ルートの監視・規制	立山3期 衰退	・芦ヶ岳寺室堂遺跡衰退 (遺物の極端な減少)
近世以降 (江戸～) 17世紀～	黒川4期 麻絶	伝真興寺跡の移転・麻絶	・大岩山日石寺への加賀藩の庇護 ・尾根筋ルートの麻絶	立山4期 再興	・芦ヶ岳寺室堂遺跡再興 (遺物の激増) ・加賀藩による芦ヶ岳寺ルートの 推奨・一本化

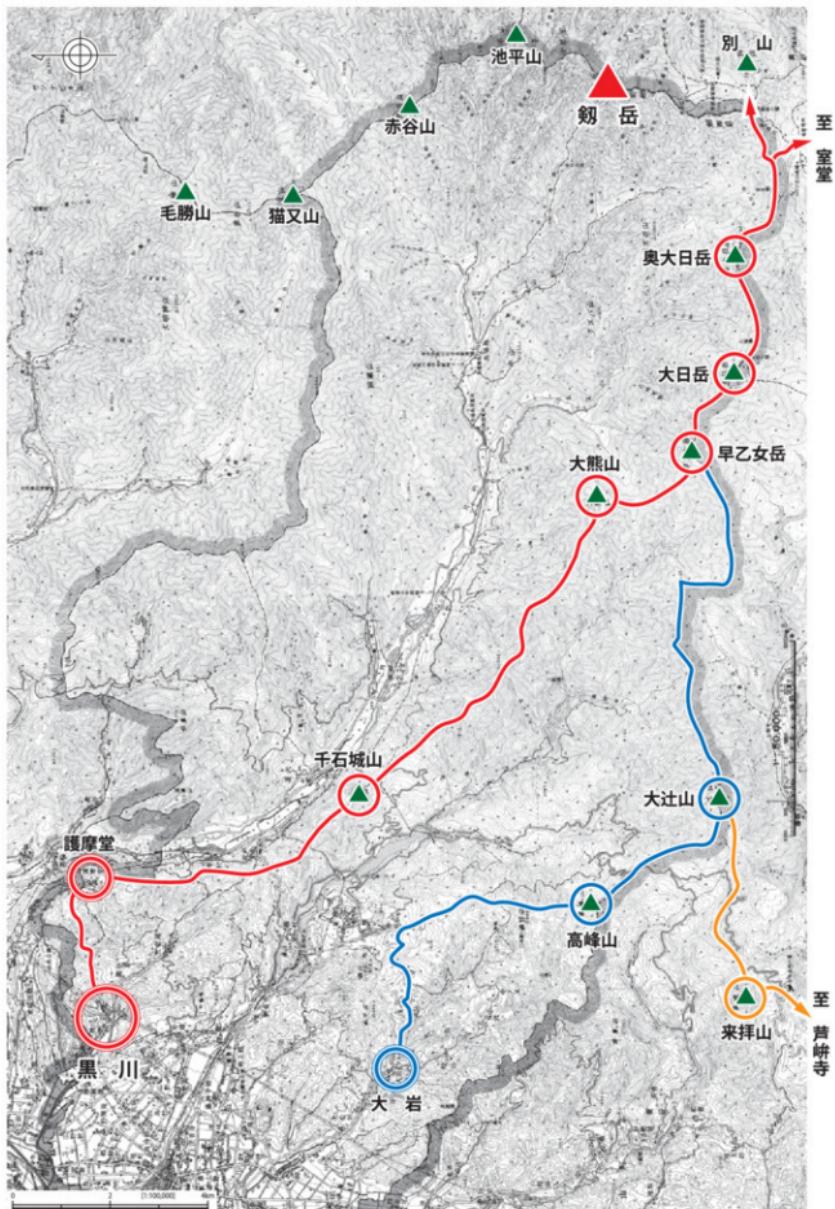
(3)まとめ—史跡上市黒川遺跡群の歴史的意義—

○本史跡は、経塚・墓・寺院といった中世の信仰に関わる遺跡が相互に関連しながら存在するものである。出土品も当時の第一級のものが多く、全国的にも他に類をみない遺跡群である。さらに、これらの遺跡群が中世後半期のほぼ同時期に廃絶していく「忘れられた霧場」となっていた点、及びそれが継続的な調査によって確認されたという意味でも重要である。

○史跡を含む関連遺跡群の背後には北アルプス立山連峰の聖峰・御岳を仰ぐことができ、本遺跡群でみられる宗教的営みの根底にはこの御岳に対する信仰があったことは疑いない。また黒川の地からは尾根伝いに護摩堂一千石城山一大熊山一早乙女岳一大日岳一奥大日岳を経て立山室堂へと至るルートが想定され、いわゆる「立山信仰」との密接な結びつきが窺われる。近世立山信仰の成立以前には、こうした「忘れられた霧場」が山岳信仰を支え発展させた可能性が考えられる。

○黒川上山墓跡・伝真興寺跡は14世紀代に一時に途絶える。また標高約2,600mの芦ヶ岳寺室堂遺跡でも、ほぼ同時期に遺物量が極端に減少したことが認められている。この時期は後に新川郡一帯を支配する東国武士「土肥氏」の越中入部及び勢力拡大の時期にあたり、立山へ至る尾根筋ルート上にはこうした武家勢力によって築かれた山城が点在するようになった。これによって從来の尾根筋ルートは分断あるいは統制を受けて衰退し、さらには近世、加賀藩による芦ヶ岳寺ルートへの一本化を経て、歴史から姿を消すことになったものと考えられる。

○日本歴史上、平安時代・鎌倉時代の移行期は、公家寺社と武家が連合・競合する中で、次第に新興の武家が力を強めていく思想・経済上の大きな変革期にあたる。本史跡で得られた知見は、この時期における思想上の支柱であった寺社の壮大な営みの実態を物語るものである。またその衰退は、武家関連遺跡の動向と密接に関連づけて理解できるものであった。この成果は、当時の日本各所で起こったであろう社会変革の実態を解明する上で、貴重な事例になるものである。



第25図 立山靈場への道

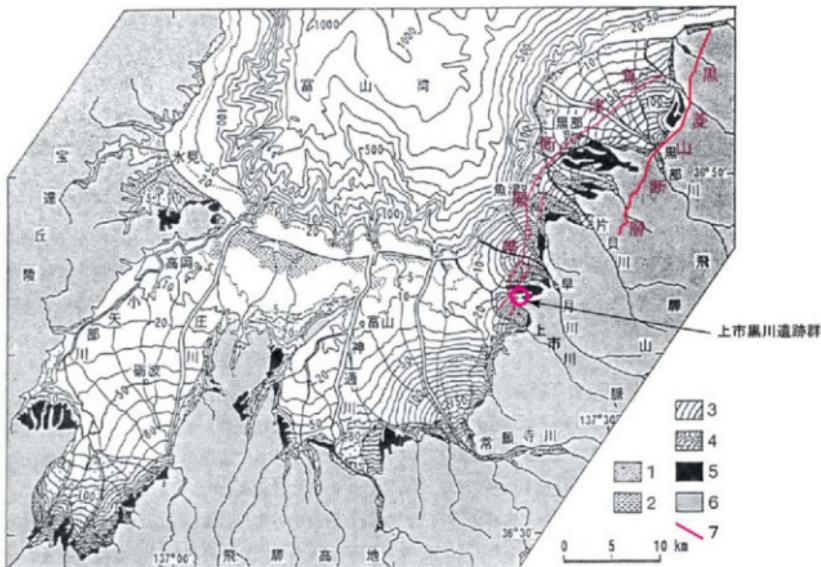
第2項 自然的調査の結果

1. 地形・地質調査

(1) 地形・地質概要

(ア) 地形概要

上市黒川遺跡群は、富山県南東部を区切って東北東～西南西に延びる飛騨山脈の北西麓を縁どる丘陵もしくは河岸段丘上にある。丘陵の前面に並ぶ富山平野の大部分は飛騨山脈や県南部の飛騨高地から流出する河川が造った扇状地であり、これらは数段の段丘面（もしくは開析扇状地）に分けられる（第26図）。丘陵と山地との境界付近には「黒菱山断層」が、また開析扇状地から沖積扇状地にかけては、複数の断層群からなる「魚津断層帯」が飛騨山脈と平行に伸びている。これらの断層はいずれも活断層（起震断層）で、富山湾側の地塊が沈降し、飛騨山脈側の地塊が隆起する逆断層である。なお、遺跡群の周辺には土砂災害に関する土地利用規制区域や土砂災害警戒区域が設定されている（第27図）。

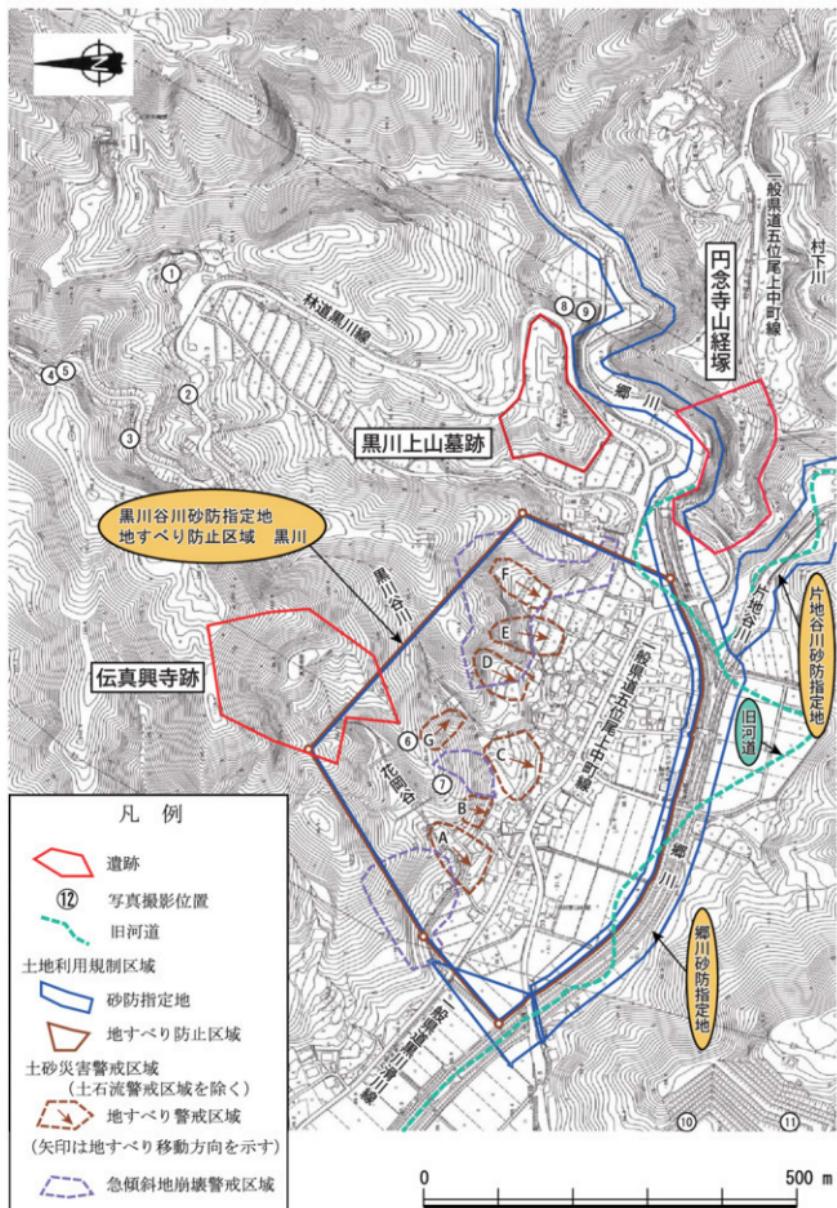


(低地) 1: 砂洲・砂丘 2: 湿地 3: 沖積扇状地
 (台地) 4: 中・低位の開析扇状地と段丘 5: 高位の開析扇状地と段丘
 6: 山地・丘陵 7: 活断層

第26図 富山平野の地形区分

「富山県の急流河川と平野の発達－昭和60年度文化ゼミナール講義録－」

（とやま百川1-6、竹村利夫、1987）に活断層の位置を加筆



第27図 史跡周辺の土砂災害危険区域

	
<p>No. 1 平成 20 年 9 月 11 日 高位扇状地疊層</p>	<p>No. 2 平成 20 年 9 月 11 日 凝灰質細粒砂岩の崩壊斜面。地下水の滲み出しがある。 地層の走向 N 80° E、傾斜 24° N。</p>
	
<p>No. 3 平成 20 年 9 月 11 日 高位段丘堆積物（高位扇状地疊層）。最大疊径 60cm。 疊種は花崗岩、片麻岩を主とし、火山疊凝灰岩・流紋岩を含む。一部が腐り疊となっている。</p>	<p>No. 4 平成 20 年 9 月 11 日 高位段丘堆積物（高位扇状地疊層）。花崗岩・片麻岩の疊を主とし、それらの大半が腐り疊である。疊径 10 ~ 30cm。</p>
	
<p>No. 5 平成 20 年 9 月 11 日 高位段丘堆積物。No. 4 の一部を拡大。</p>	<p>No. 6 平成 20 年 9 月 11 日 吳羽山疊層。中粒砂と疊からなる。</p>

写真 14 調査地周辺の地質（1）

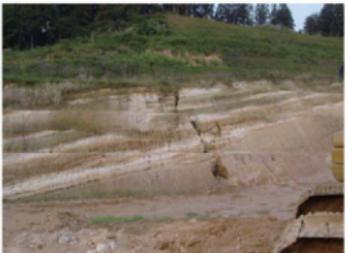
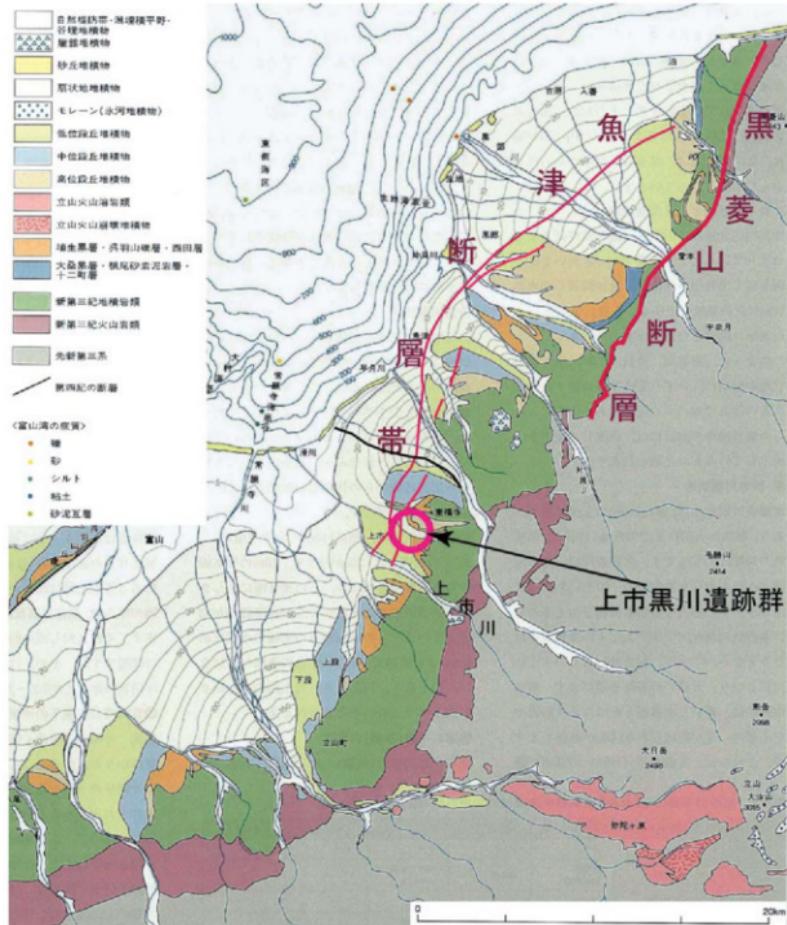
	
<p>No. 7 平成 20 年 9 月 11 日 尾根上に残る巨礫。起源は呉羽山礫層と推定される。</p>	<p>No. 8 平成 20 年 9 月 4 日 砂質泥岩～細粒砂岩。一部に層理が見られる。走向 N20° E、傾斜 26° NW。</p>
	
<p>No. 9 平成 20 年 9 月 4 日 砂質泥岩～細粒砂岩 (No. 8 の上方に露出する)。滑らかな壁面を形成している。</p>	<p>No.10 平成 20 年 9 月 11 日 呉羽山礫層。郷川左岸の採土地で切土法面に露出している。上部に礫層 (暗褐色部)、下部に含礫砂層～砂層が見られる。地層の走向 N74° E、傾斜 16° N。</p>
	
<p>No.11 平成 20 年 9 月 11 日 呉羽山礫層。採土地の東側法面を見ている。雨裂と湧水による法面侵食が顕著である。</p>	

写真 15 調査地周辺の地質（2）

(イ) 地質概要

調査対象地域を含む富山県東部の地質は次のように大別される（カッコ内は主な地形を示す）。

- ①新第三紀に至る前の堆積岩・変成岩・深成岩（飛騨山脈）
- ②新第三紀の堆積岩および火山岩類（主として低山地～丘陵）
- ③第四紀更新世前・中期の堆積物（丘陵・高位段丘）
- ④第四紀更新世中・後期の段丘堆積物もしくは開析扇状地堆積物（段丘・開析扇状地）
- ⑤第四紀更新世末期・完新世の堆積物（扇状地・谷底平野）



第28図 富山平野とその周辺の第四紀地質図

アーバンクボタ第31号「北陸の丘陵と平野」（藤井・絹野・三浦、1992年）に活断層の位置を加筆

富山県東部地区における地質層序を下に、調査対象地域周辺の地質分布を第29図に、また第四紀層の相互関係を示す模式断面を第30図に示す。

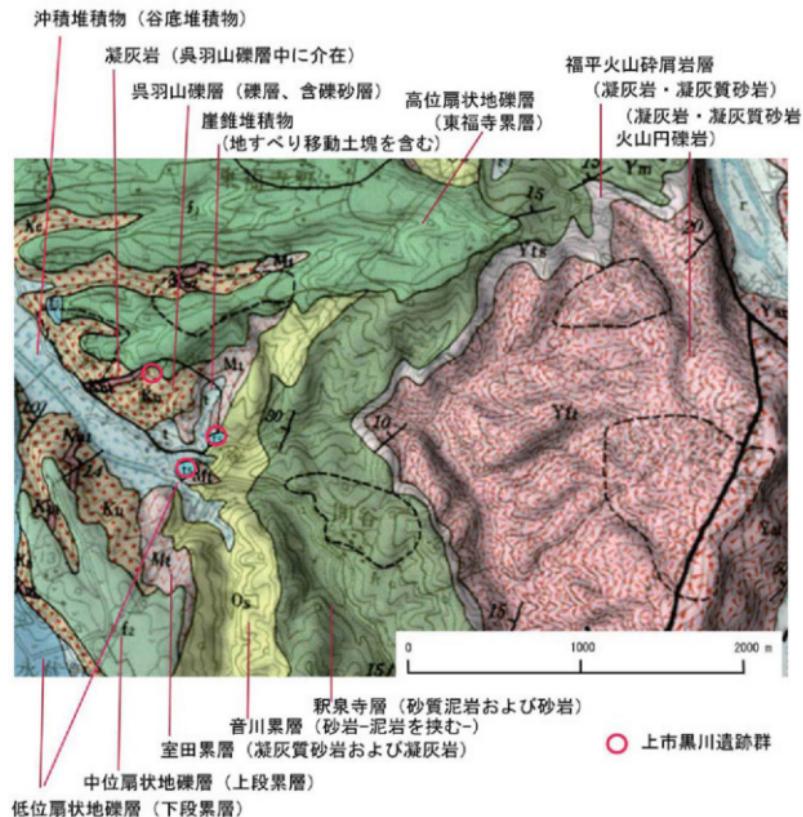
上市黒川遺跡群の基盤をなす地質は、北西に15～30度傾斜する新第三紀層（主として砂岩・凝灰質砂岩）の上に載った河岸段丘堆積物（低位～中位段丘堆積物）、あるいは第三紀鮮新世後期から第四紀更新世中期にかけて堆積した呉羽山疊層（凝灰岩が介在する）である。

上市黒川遺跡群周辺の地質層序

地質時代 (年代：万年)		地層名	地形	地質の特徴	層厚 (m)
1 2 12 50 80 180	第 四 紀 更 新 世	完新世 後期	沖積堆積物	扁状地・谷底平野	粘土・砂・疊
			下段累層	低位段丘 低位開析扁状地	表面に厚さ0.5～1.0mの被覆土。 疊はほぼ新鮮。
			上段累層	中位段丘 中位開析扁状地	表面に厚さ1～1.5mの被覆土。 主に花崗岩・片麻岩の疊で一部が風化。 疊径15～30cm。
		中期	東福寺累層	高位段丘 高位開析扁状地	表面に厚さ2m余の赤色土。 疊径10～30cmで腐り疊が多い。
			呉羽山疊層	丘陵	細～中粒砂層・含疊砂層・疊層。 最大疊径30cm。一部が腐り疊。 弱く固結し、凝灰岩層（厚さ12～13m）を挟む。
		新 第 三 紀 新 世	氷見累層 (室田累層)	丘陵	凝灰質砂岩を主とする。砂粒は火山ガラスが多く、斜交葉理が発達する。 弱く固結。西北西向きに15～20度傾斜。
			音川累層	丘陵・低起伏山地	シルト質細粒砂岩。ほぼ均質で層理が不明瞭。 半固結の軟岩。
			八尾累層 (釀泉寺層)	低～中起伏山地	シルト質泥岩・砂質泥岩。一般に無層理で弱い層理が一部に見られる。 半固結の軟岩。西北西向きに10～25度傾斜。
					200数10

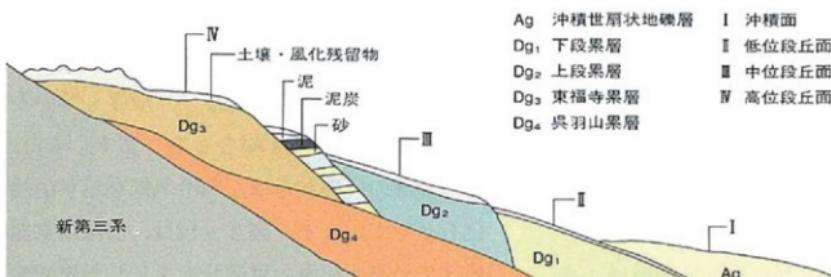
*各層の地質時代は、「魚津断層帯の第四紀断層運動と地下地質」（松浦旅人ほか、活断層研究26、2006年）

を参照した



第29図 上市黒川遺跡群周辺の地質図

「土地分類基本調査 魚津・表層地質図」(富山県 1982 年) の一部を 3D 表示



第30図 富山県東部地域の第四紀層の模式断面図

アーバンクボタ第31号「北陸の丘陵と平野」(藤井・絹野・三浦、1992年)

(2) 遺跡基盤の地形・地質

(ア) 円念寺山経塚

a. 地形

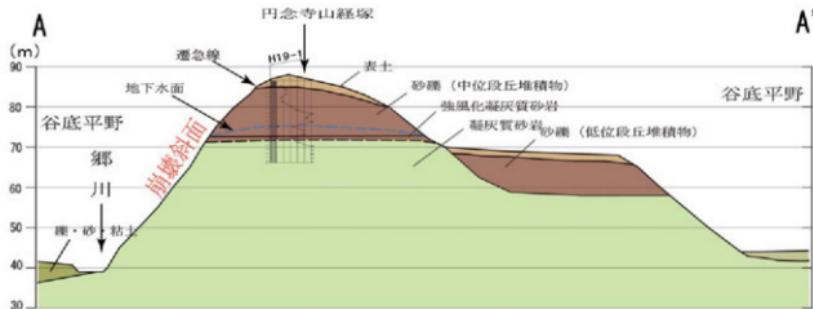
円念寺山経塚は郷川とその支流片地谷川・村下川に挟まれ、東西に伸びる尾根状の台地上に立地する。この尾根の頂部は郷川の河床からの比高が45~50mの中位段丘面である。なお、比高が20~30mの低位段丘面が尾根の南側と西側に見られる。尾根の北側斜面（段丘崖）は郷川曲流部の攻撃斜面であり、斜面崩壊によって段丘面との境界が明瞭な遷急線となっている。

b. 地質

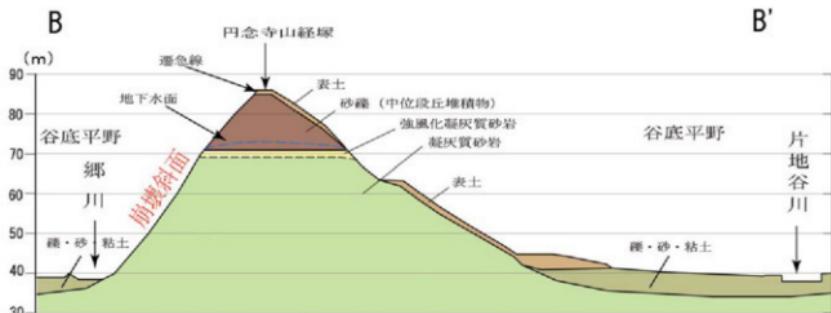
中位段丘には厚さが約15mの砂礫層がほぼ水平に堆積している。礫は主として花崗岩・片麻岩で、礫径は15~20cmのものが多い。上半部は腐り礫を多く含む。低位段丘には厚さが約10mの砂礫層が分布する。礫は花崗岩・片麻岩・安山岩などで、礫径は10~30cmのものが多い。段丘堆植物の表面は厚さが1.5m以下の疊まじりシルト質粘土で覆われている。

段丘堆植物の下位には細粒~中粒の凝灰質砂岩や凝灰岩が分布する。これらの岩石は層理に乏しく、ナイフで岩片を切断できる程度の軟岩であり、割れ目がほとんど認められない。

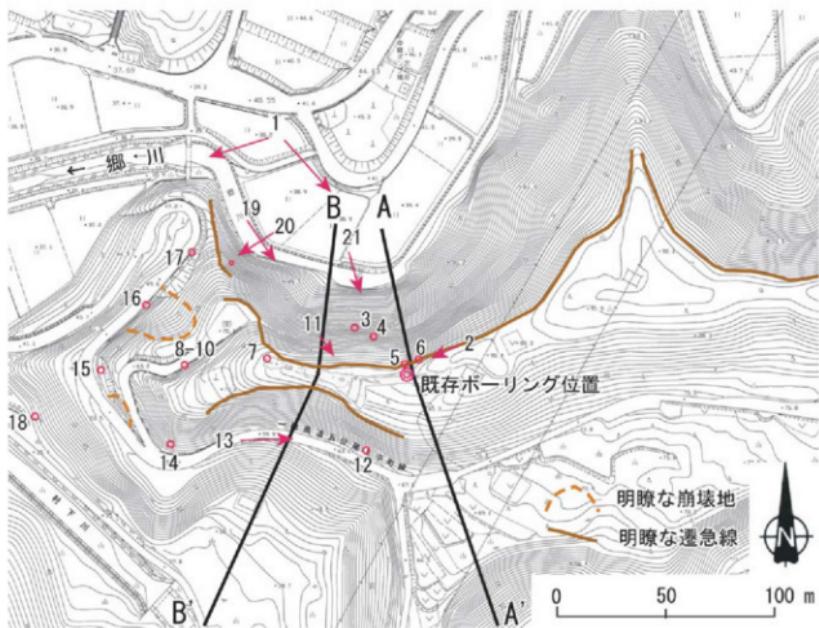
南北方向のA-A'断面及びB-B'断面の地質断面図を以下に示す。



第31図 円念寺山経塚の地質断面図（A-A'断面）



第32図 円念寺山経塚の地質断面図（B-B'断面）



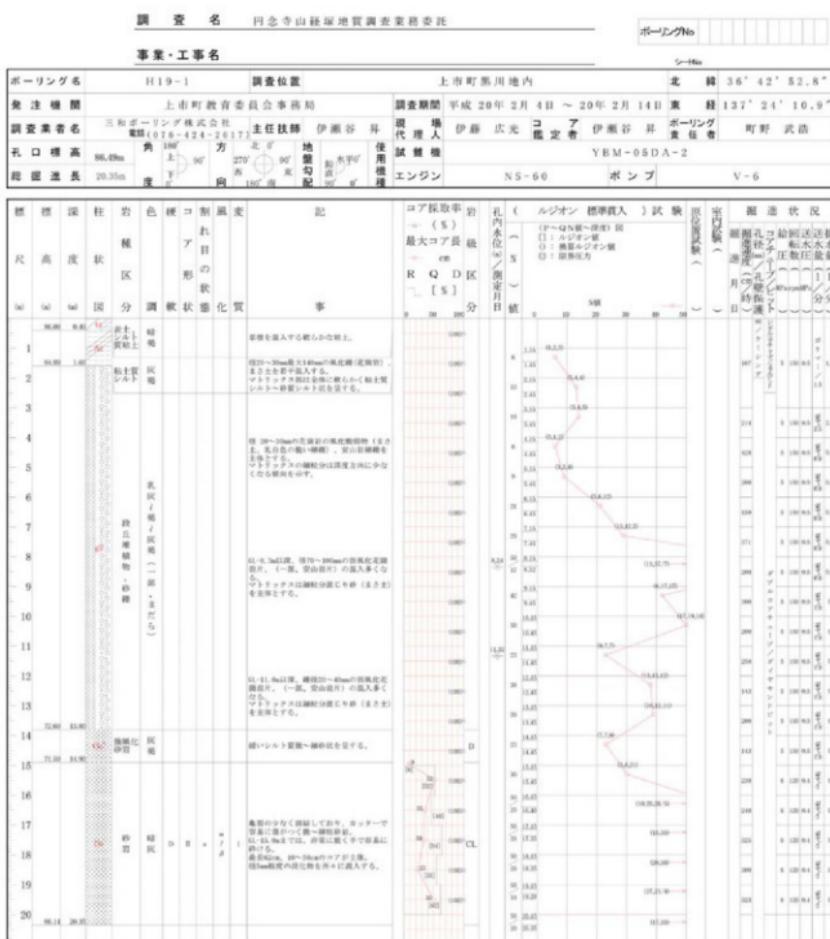
第33図 円念寺山経塚の断面位置及び写真撮影位置図

なお平成19年度に実施したボーリング調査（第33図に調査位置を示す）により得られた地質柱状図と地質想定断面図を、それぞれ第34図・第35図に示す。地質構成の概要是以下のとおりである。地下水位は砂岩上面よりも2.5m浅い深度11.3mにある。

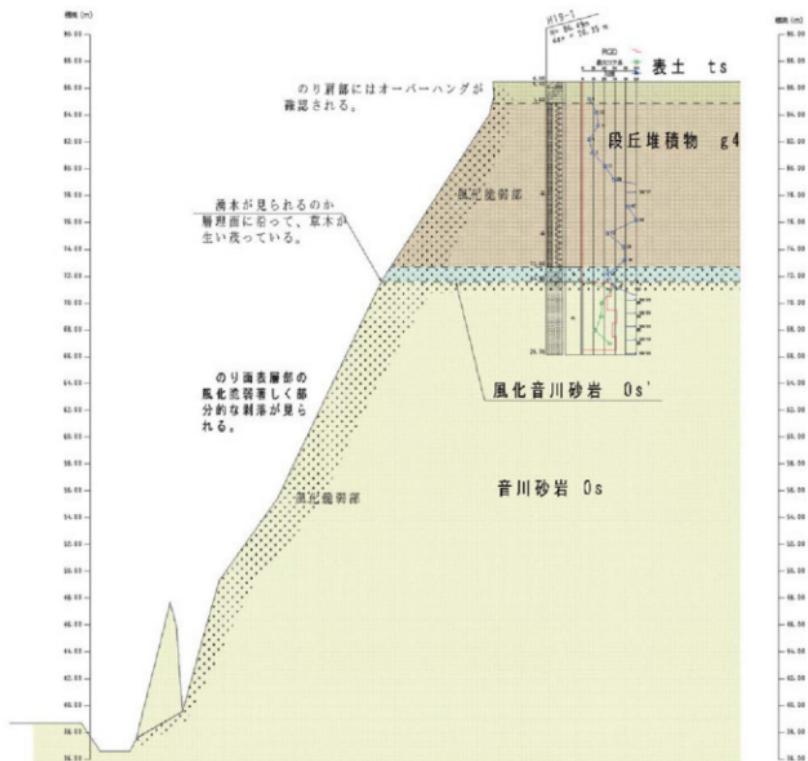
地質構成の概要

深度 0～1.6m	花崗岩の腐り礫を含むやや固い粘土質シルト。「風化土」に相当する。
深度 1.6～8.3m	花崗岩の腐り礫と安山岩質の細礫、および粘性土～砂質土の基質からなる段丘堆積物。N値は6～26で、深さを増すにつれて基質中の細粒分が少なくなる。
深度 8.3～13.8m	やや風化した花崗岩（一部は安山岩）の礫（見かけの礫径2～10cm）と花崗質砂の基質からなる段丘堆積物。N値は23～50以上。礫当りの部分で測定値が高い値となる。
深度 13.8～14.9m	強風化砂岩。シルト質細砂からなる。灰褐色で固結度は低く、N値は23。
深度 14.9～20.35m	細粒砂岩。暗灰色で亀裂が少なく、固結して軟岩状である。N値30～50以上。炭化物を含む。

ボーリング柱状図



第34図 円念寺山経塚ボーリング柱状図



第35図 円念寺山経塚地質想定断面図

	
<p>No. 1 平成 20 年 9 月 4 日 郷川左岸の河岸段丘（中位段丘）。円念寺山経塚が中位段丘面にある。東西に延びる段丘面北側の段丘崖の高さは 45～50m で、蛇行河川の水衝部攻撃斜面にあたり、侵食・崩壊が進行している。</p>	<p>No. 2 平成 20 年 3 月 段丘面北端の斜面肩遷急線。段丘面上に遺跡がある。</p>
	
<p>No. 3 平成 20 年 9 月 4 日 段丘崖の中下部に露出する凝灰質砂岩。段丘堆積物（砂礫）の直下を見ている。</p>	<p>No. 4 平成 20 年 9 月 4 日 中位段丘堆積物（中位扇状地疊層）の下部。直径 15～20cm の花崗岩・片麻岩の円礫を主とする。</p>
	
<p>No. 5 平成 20 年 3 月 段丘崖北側斜面肩付近の崩壊。斜面肩が張り出しており、表層崩壊の形跡が見られる。</p>	<p>No. 6 平成 20 年 9 月 4 日 斜面肩の張り出し部。段丘堆積物中には腐り礫が多い。板根層が張り出している。</p>

写真 16 円念寺山経塚現地写真（1）

	
No. 7 平成 20 年 9 月 4 日 中位段丘面の西端部。段丘堆積物（砂礫）が露出している。礫径 5 ~ 10cm。	No. 8 平成 20 年 9 月 4 日 段丘堆積物と凝灰質砂岩との境界面付近。地下水の滲み出しが一部に見られる。
	
No. 9 平成 20 年 9 月 4 日 中位段丘堆積物。直徑 10 ~ 30cm の花崗岩・片麻岩の円礫を主とする。礫間の砂が侵食され、礫が浮き出している。	No.10 平成 20 年 9 月 4 日 段丘堆積物直下の凝灰質砂岩。ネジリ鎌で容易に削ることができ、斜交葉理が見られる。
	
No.11 平成 20 年 9 月 4 日 段丘崖上部の斜面を見上げる。浅い崩壊の痕跡が各所に見られる。	No.12 平成 20 年 3 月 凝灰質細粒砂岩。層理が不明瞭で亀裂が少ないが、剥離性的亀裂から湧水がある。肌落ちが少なく、滑らかで安定な壁面をなす。

写真 17 円念寺山経塚地写真（2）

	
<p>No.13 平成 20 年 9 月 4 日 自立性の高い凝灰質砂岩。段丘堆積物の直下にあり、常に温潤な状態である。(西側より)</p>	<p>No.14-1 平成 20 年 9 月 4 日 凝灰質砂岩。(南側より)</p>
	
<p>No.14-2 平成 20 年 9 月 4 日 No.14-1 と同じ。凝灰質砂岩。弱い葉理が見られる。</p>	<p>No.15 平成 20 年 9 月 4 日 中位段丘堆積物と凝灰質砂岩の境界。</p>
	
<p>No.16 平成 20 年 9 月 4 日 崖錐斜面の末端部。石積みの土留めが施工されている。</p>	<p>No.17 平成 20 年 9 月 4 日 凝灰質砂岩の一部に見られる層理。手前（西向き）に約 20° の傾斜を持つ層理面がある。</p>

写真 18 円念寺山経塚現地写真（3）

	
No.18 平成 20 年 9 月 4 日 粗粒の凝灰質砂岩。低位段丘の段丘崖に露出する。	No.19 平成 20 年 9 月 4 日 郷川左岸の段丘崖下部。崩土が堆積している。
	
No.20 平成 20 年 9 月 4 日 段丘崖中上部に見られる剥離性の亀裂面。	No.21 平成 20 年 9 月 4 日 段丘崖の崩落跡。

写真 19 円念寺山経塚現地写真（4）

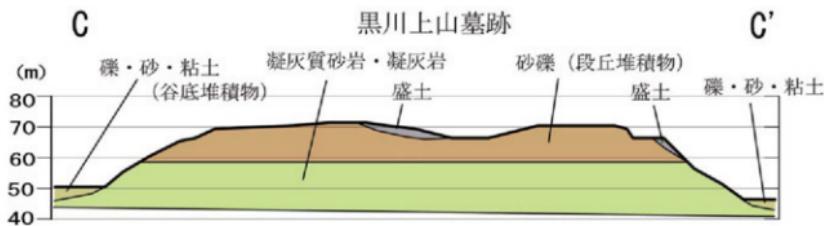
(イ) 黒川上山墓跡

a. 地形

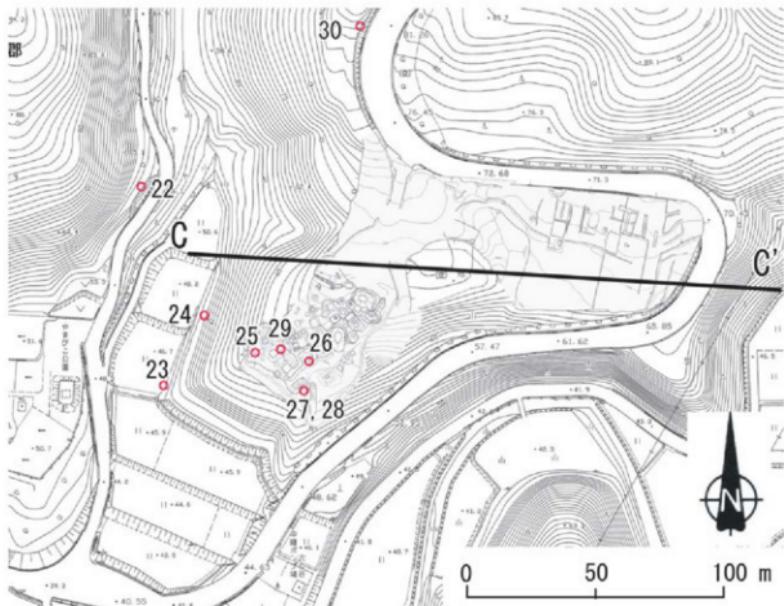
黒川上山墓跡は、郷川右岸の低位段丘面上にあり、河床からの比高は25～30mである。丸石積みの墓跡は東西に延びる段丘の西寄りの位置にあり、この付近では南西側に緩く傾斜している。降雨時には墓跡の間の凹地に湛水し、侵食溝に沿って水流が生じる。

b. 地質

段丘には厚さが約10mの砂礫が分布している。礫径は20～30cmのものが多い。礫種は花崗岩・片麻岩・安山岩などで、腐り礫はほとんど見られない。砂礫層の下位には固結度が低く割れ目の無い凝灰質砂岩・凝灰岩が分布する。



第36図 黒川上山墓跡の地質断面図 (C-C' 断面)



第37図 黒川上山墓跡の断面位置及び写真撮影位置図

	
<p>No.22 平成 20 年 9 月 11 日 凝灰質細粒砂岩。層理不明瞭。風化により固結度が低くなっており、ネジリ鎌で容易に削ることができる。</p>	<p>No.23 平成 20 年 9 月 11 日 凝灰質細粒砂岩。段丘堆積物の直下。固結度が低い。</p>
	
<p>No.24-1 平成 20 年 9 月 11 日 凝灰質細粒砂岩。遺跡の西側。</p>	<p>No.24-2 平成 20 年 9 月 11 日 凝灰質細粒砂岩。段丘堆積物の直下。固結度が低い。</p>
	
<p>No.25 平成 20 年 9 月 11 日 低位段丘堆積物（低位扇状地疊層）中の礫。礫径 20 ~ 50cm。</p>	<p>No.26 平成 20 年 9 月 11 日 凝灰質の細～中粒砂岩。</p>

写真 20 黒川上山墓跡現地写真（1）

	
<p>No.27 平成 20 年 9 月 11 日 低位段丘面の南西端部に形成された雨裂（ガリー）状の溝。</p>	<p>No.28 平成 20 年 9 月 3 日 No.27 と同じ。降雨時における表流水の流下状況。時間雨量 15mm（上市、12～13 時）のやや強い雨が降っている最中。</p>
	
<p>No.29 平成 20 年 9 月 3 日 石積み埴丘墓間の凹地。降雨時の湛水状況。</p>	<p>No.30 平成 20 年 9 月 11 日 含砂礫層。奥羽山礫層に属する。細粒砂層中に砂礫層がレンズ状に介在する。地表付近に侵食残留縁が見られる。</p>

写真 21 黒川上山墓跡現地写真（2）

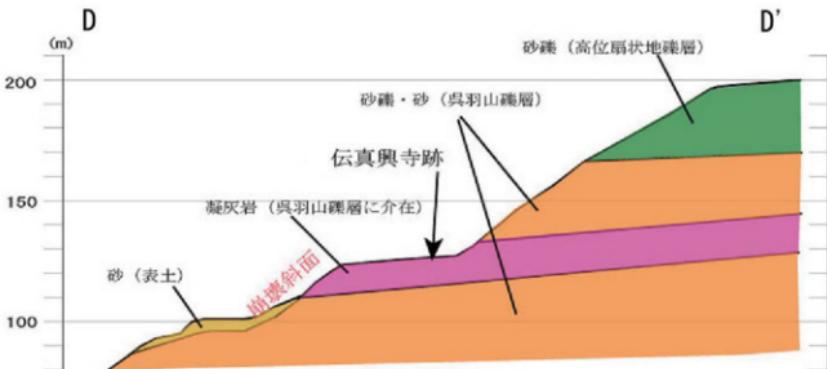
(ウ) 伝真興寺跡

a. 地形

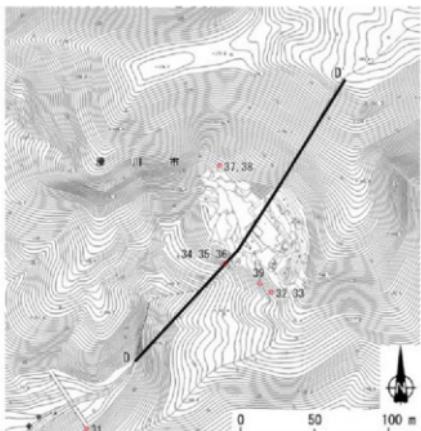
遺跡は郷川右岸、花岡谷の谷頭にある平坦面上にある。この平坦面の成因は地質の差異に起因する差別侵食によるもの、あるいは地すべり地の頭部滑落崖直下の凹地として形成されたもののいずれであるかは不明である。平坦部の谷側縁辺部は急斜面となり、崩壊箇所が多い。また、谷の中・下流部の両岸斜面は「地すべり防止区域 黒川地区（国土建設大臣所管、昭和43年3月30日建 告示1039号）」に含まれ、すでに地下水排除工と明暗渠工を主体とした地すべり防止対策工事が施工されている。

b. 地質

遺跡の周辺には呉羽山礫層中に介在する凝灰岩が分布する。この凝灰岩は固結度が低く、ハンマーのピックで容易に削りこむことができる。凝灰岩の上下には呉羽山礫層に属する砂礫層と含礫砂層が分布する。礫径は10～30cmのものが多いが、80cmに達するものが混じる。



第38図 伝真興寺跡の地質断面図（D-D' 断面）

第39図 伝真興寺跡の断面位置
及び写真撮影位置図

	
<p>No.31 平成 20 年 9 月 11 日 呉羽山礫層。礫径 15 ~ 20cm。花崗岩・片麻岩が多く、流紋岩・安山岩が混じる。礫支持で礫間には粗砂が充填。腐り礫が混じる。</p>	<p>No.32 平成 20 年 9 月 11 日 砂質凝灰岩（中・粗粒）。呉羽山礫層中に介在する。地下水の滲み出しあり。斜面崩壊跡に露出している。</p>
	
<p>No.33 平成 20 年 9 月 11 日 砂質凝灰岩に見られる層理。層理面の走向 N47° E、傾斜 17° NW。</p>	<p>No.34 平成 20 年 9 月 11 日 砂質凝灰岩（中・粗粒）。呉羽山礫層中に介在する。ネジリ鎌で削ることができる。弱い葉理がある。遺跡を載せる平坦面縁部の崩壊跡に露出する。</p>
	
<p>No.35 平成 20 年 9 月 11 日 No.34 と同じ。砂質凝灰岩（中・粗粒）。</p>	<p>No.36 平成 20 年 9 月 11 日 砂質凝灰岩に形成された雨滴による侵食状況。</p>

写真 22 伝真興寺跡現地写真（1）

	
<p>No.37 平成 20 年 9 月 11 日 遺跡がある平坦面の上方斜面。砂質凝灰岩とその上位 にある砂礫層（吳羽山礫層）。</p>	<p>No.38 平成 20 年 9 月 11 日 凝灰岩とその上位にある砂礫層（吳羽山礫層）。</p>
	
<p>No.39 平成 20 年 9 月 11 日 平坦面の谷側縁辺部に連続する崩壊跡。遺跡に通じる 通路の路肩が崩壊しつつある。</p>	

写真 23 伝真興寺跡現地写真（2）

(3) 侵食・崩壊防止対策

(ア) 基本的な考え方と設計方針

遺構（墳丘など）とその周辺基礎地盤の侵食・崩壊の原因となる作用を除去・抑制するためには、以下の基本的な考え方から斜面保護を行うことが必要である（「遺跡の斜面保護－遺跡の保存工学的研究」奈良文化財研究所・埋蔵文化財ニュース 119 を参照）。

a. 基本的な考え方

① 遺構としての法面保護対策

- ・遺構を損傷しない対策法であること。
 - ・植物の根が遺構に侵入しない対策とすること。
 - ・ロックボルト打設などの支持工が不可欠の場合は、構造上の安定が図れる最低限の数量・規模に抑えること。
 - ・遺構法面の崩落を防ぐ予防的保護工の場合は、遺構本来の形状や植生を保持できること。
 - ・崩落した遺構法面の復旧保護工の場合は、遺構本来の形状や植生を復元できること。
 - ・適正な維持管理のもとで、永続的な法面安定効果が期待できること。
- ② 遺跡周辺の基礎地盤としての斜面保護対策
- ・適正な維持管理のもとで、永続的な法面安定効果が期待できること。
 - ・遺跡内の景観として適切な斜面景観が形成できること。

b. 斜面保護工の設計方針案

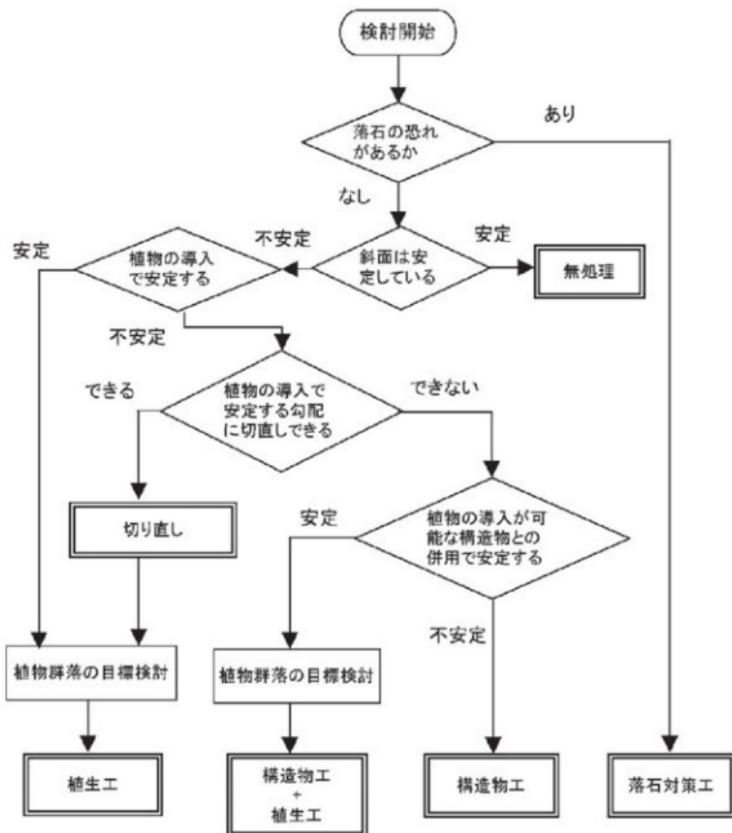
斜面保護工の設計は、次の原則に注意する必要がある。工法選定の流れを第40図に示す。

- ① 斜面及びその周辺の現況と気象条件・過去の実施例などに基づき、安定性・永続性・施工性・環境景観・経済性・維持管理などの総合的な検討を行う。
- ② 施工目標を念頭に置き、保護目的・利用目的を常に考慮する。
- ③ 斜面崩壊は水が原因で発生することが多い。斜面への水の流入を防ぐとともに、流入した水を迅速かつ安全に排出する。
- ④ 斜面保護の工種は、落石の危険がないことを確認したうえで、植生工・植生工と構造物工の併用・構造物工のいずれを適用するかを検討する。

c. 斜面保護工の実施に関する留意事項

遺跡内に斜面保護工を実施する場合は、遺跡への影響を考慮した施工計画が求められる。また、工種の選定に加えて実施に伴う仮設計画も十分な配慮が必要となる。斜面保護工の実施にあたっての原則的留意事項を以下に記す。

- ・遺構を損傷しないこと。
- ・遺跡の地形や植生を保持できること。
- ・見学者・観光者に対する安全を完全に確保できること。
- ・景観への影響に配慮すること。
- ・仮設を含む資材・機材の搬入経路が確保できること。



第40図 斜面保護工選定の考え方及び手順

「のり面保護工 設計・施工の手引き」社団法人農山村文化協会、1990年を参照

(イ) 各遺跡の侵食・崩壊防止対策

a. 円念寺山経塚

○斜面崩壊の原因

崩壊の原因は、以下のとおり考えられる。

素因：斜面下部の河川水衝部における侵食。

誘因：①段丘堆積物の礫間を充填する砂もしくは細粒土が雨水や湧水により流出し、礫が浮石となり落下すること。

②凝灰質砂岩・凝灰岩の表層が応力開放・乾湿くり返し・凍結融解などの作用により板状に剥離し落下すること。

遺跡は郷川左岸の攻撃斜面で崩壊が進行しており、段丘面の北側縁辺部には直立部、オーバーハング部分も見られる。このまま侵食や土壤の崩壊が進むと、遺構の一部が崩落する危険性がある。

○斜面崩壊防止対策

対策工法選定の条件は、以下の4点である。

①斜面上部では段丘堆積物の表面侵食と礫の落下を防ぎ、湧水の排出を阻害しないこと

②斜面上の樹木をできるだけ伐採しないこと

③切土を極力行わないこと

④斜面中下部では、砂岩の風化・侵食を防止すること

これらの条件を満足するには、以下のような対策工法の組み合せが考えられる。

①吹き付け法枠工 ②長繊維補強土吹き付け工 ③護岸工

b. 黒川上山墓跡

○侵食・崩壊の原因

遺跡は緩く西および南西に傾斜しており、降雨時には水路が形成される。水路の流量は多く、流速が速い。このような表流水による礫間の砂や細粒土の流出が遺跡の侵食の原因となっている。

○斜面崩壊防止対策

降雨時・融雪時に発生する表流水の処理を行うため、以下の対策工を行なうことが考えられる。

①水路工 ②暗渠工あるいは明暗渠工

c. 伝真興寺跡

○侵食・崩壊の原因

遺跡が立地する平坦面の周辺に分布する凝灰岩は固結度の低い砂状の堆積物である。平坦面の谷側縁辺部の急斜面では、植物根の侵入による緩みや、降雨・融雪の浸透によるせん断抵抗力の減少に伴い、斜面崩壊が進行していると判断できる。

○斜面崩壊防止対策

降雨時・融雪時に平坦面の上流側斜面から流下する表流水の処理を行うためには、以下の対策工が考えられる。

①水路工 ②暗渠工もしくは明暗渠工

平坦面の谷側縁辺部の急斜面の崩壊を防止するためには、以下の対策工が考えられる。

①擁壁工 ②吹き付け法枠工 ③長繊維補強土吹き付け工

2. 植生調査

(1) 植生

(ア) 調査方法

既存資料の「第6回・第7回自然環境保全基礎調査（植生調査）現存植生図 越中大浦」、空中写真、及び、現地調査（踏査）により、調査地域の現存植生図を作成した。

植生区分は、「環境省 第6回・第7回自然環境保全基礎調査」の方法に準じた。

(イ) 植生の概況

調査地域を含む県内の丘陵帯は、概ね標高 500 m以下で、古くから人間の生活の場として活用してきた地域である。大部分がコナラ、アカマツなどの二次林、スギの造林地となっており、自然植生は一部の社寺林や峡谷等に残されていのみである。

調査地域は、上市町北東部の丘陵地の辺縁部にあり、標高 35 ~ 190 mの間に位置している。丘陵地の間から流れ出る郷川に沿って集落や水田、畑などが見られ、その最奥部が調査地域に隣接している。原生的な自然環境はほとんど見られず、大部分が代償植生である。しかし、人里とそれをとりまく里山が接する部分に位置しているため、比較的多様性に富んだ自然環境が残されている。

調査地域に出現する植物群落は以下の 17 区分である。

各調査地に出現する植物群落

	植物群落	円念寺山経塚	黒川上山墓跡	伝真興寺跡
1	ハンノキ群落			△
2	アカマツーコナラ群落	○		○
3	ホオノキーコナラ群落	○	○	○
4	スギ植林	○	○	○
5	斜面低木群落	○	○	
6	伐採跡低木群落	○	○	
7	公園樹木植栽地	○	△	○
8	ツルヨシ群落	△		
9	荒地雜草群落	△	○	○
10	放棄水田	△	△	
11	水田	△	△	
12	畑地	△		
13	崖、崩壊地	○		
14	果樹園		△	
15	抽水植物群落			○
16	開放水域	△		
17	無植生地	△	△	

(ウ) 各遺跡の植生

a. 円念寺山経塚

郷川と支流の村下川にはさまれた狭い尾根地形になっており、標高 35 ~ 90 m の間に位置している。遺跡はこの狭い尾根の先端部の斜面にあり、付近は伐り残されたアカマツ高木とサクラ類などの植栽木が疎らに生育する公園樹木植栽地となっている。

遺跡の周辺の斜面や尾根部には、コナラを主体としてホオノキ、ウワミズザクラ、コシアブラなどの混生した落葉広葉樹二次林であるホオノキーコナラ群落が比較的広い面積を占めており、一部にはアカマツーコナラ群落も見られる。また、斜面の中下部の所々にはスギ植林が広がっている。鉄塔の周囲や送電線に沿った場所は、定期的な伐採による伐採跡低木群落が見られ、遺跡の下方斜面にも同様の群落がみとめられる。郷川に面した急斜面や道路沿いの一部は、高木林が発達できず、崩壊地やアブラチャン、タニウツギなどの斜面低木林となっている。この他、周辺地域には放棄水田、畑地、荒地雑草群落、アジサイなどの樹木植栽地などが見られ、郷川の河川敷には所々にツルヨシ群落が成立している。

植生図を第 41 図に示した。



写真 24 円念寺山経塚とコナラ群落



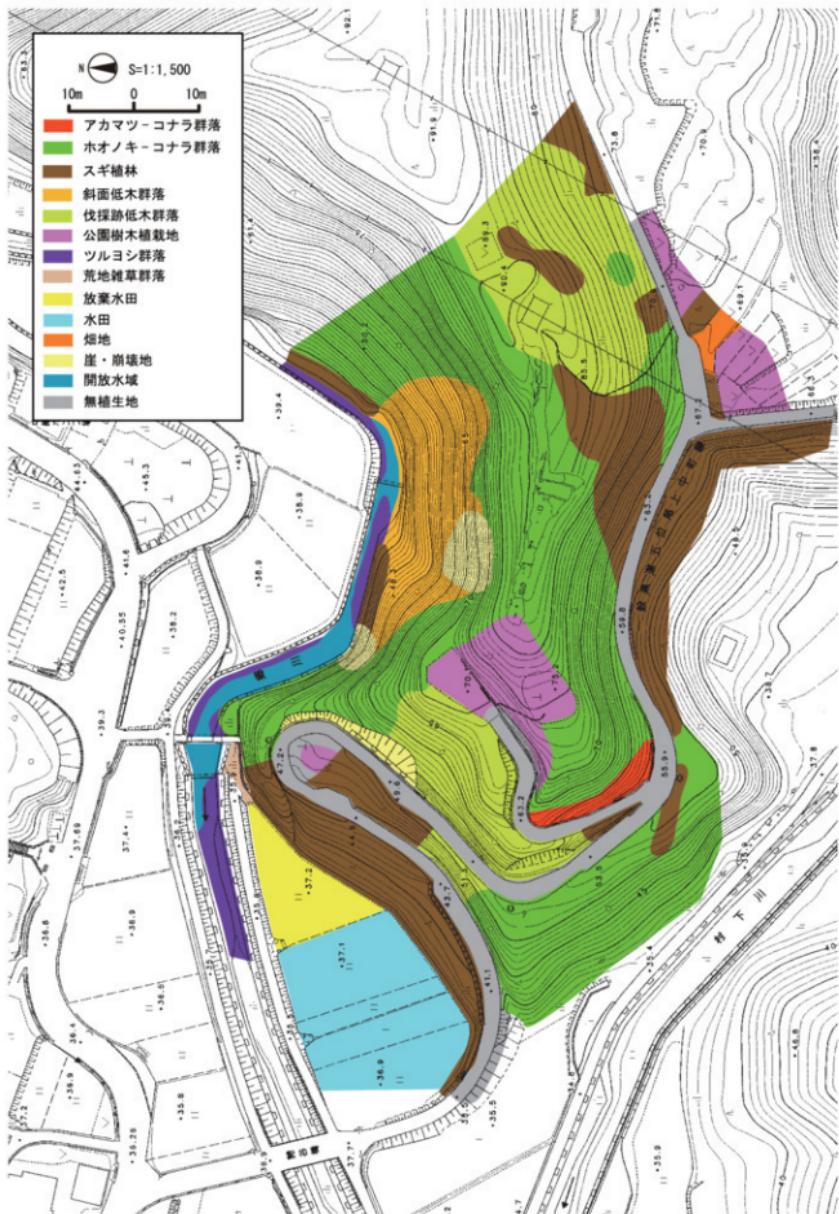
写真 25 尾根上部のスギ植林



写真 26 アカマツーコナラ群落



写真 27 斜面低木群落（手前）と崖・崩壊地（奥）



第41図 円念寺山経塚植生図

b. 黒川上山墓跡

南西向きに張り出した緩い尾根地形の突端部にあり、標高 40 ~ 80 m の間に位置している。黒川上山墓跡は尾根上の平坦地にあり、隣接地とともに荒地雑草群落となっている。

周辺の斜面は、コナラにホオノキ、ウワミズザクラなどが混生した落葉広葉樹二次林であるホオノキコナラ群落及びスギ植林が広い面積を占めている。急傾斜の斜面の一部には、高木林が発達できず、オオバクロモジ、マルバマンサクなどの低木が優占する斜面低木群落となっている場所もある。また、道路に面した場所では人為的な伐採跡地に成立した遷移の途中相である伐採跡低木群落や、一部には最近サクラ類の若木を植栽した公園樹木植栽地が見られる。遺跡を乗せた尾根の周辺部には水田や放棄水田、一部にはウメが植えられた果樹園など人里の人が植生が広がっている。

植生図を第 42 図に示した。



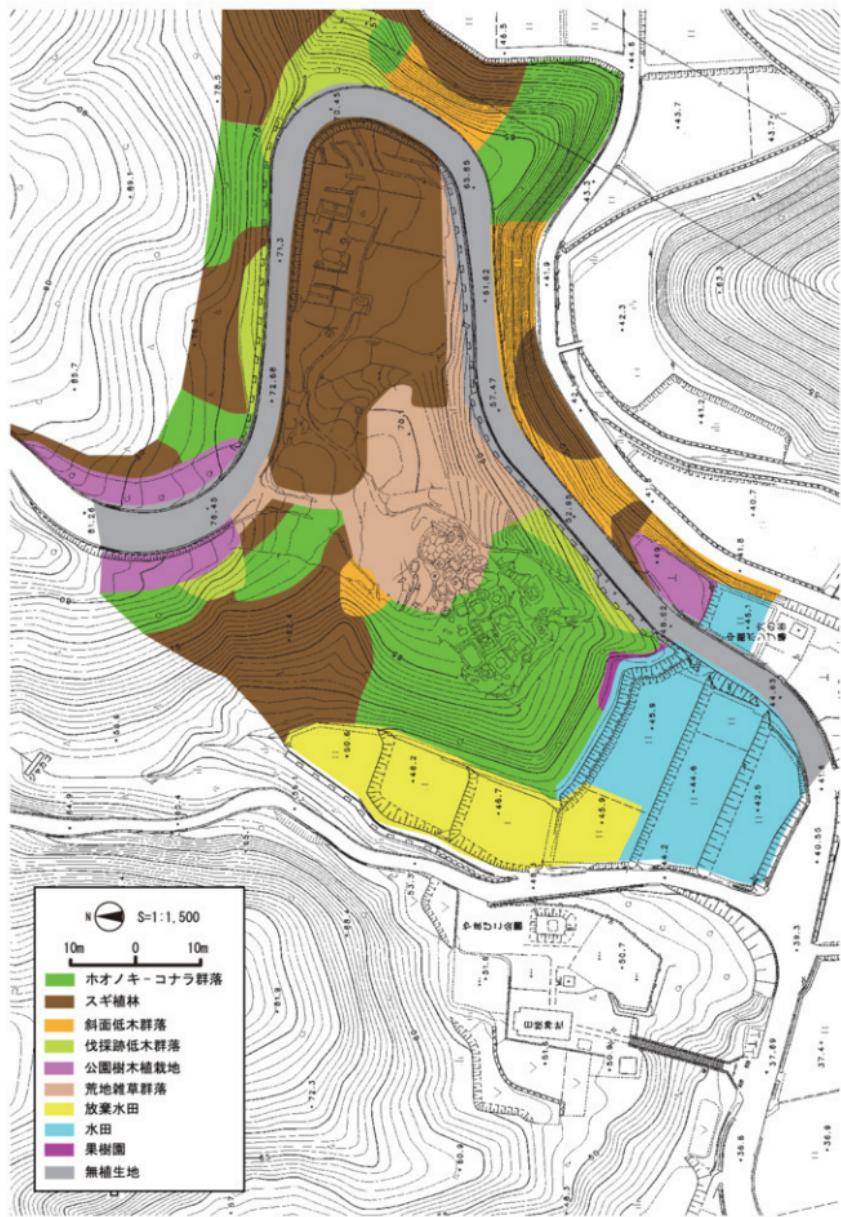
写真 28 黒川上山墓跡とホオノキコナラ群落



写真 29 南西斜面のホオノキコナラ群落



写真 30 南東斜面の伐採跡低木群落



第42図 黒川上山墓跡植生図

c. 伝真興寺跡

南西向きに開いた花岡谷の上流部にあたり、標高 80～190 m の間に位置している。遺跡となっている伝真興寺跡は、この斜面の中央にある段丘状の平坦面の上にあり、キリ、カキノキなどの樹木植栽地や荒地雜草群落などとなっている。また、この平坦地の隅に小さな水たまりがあり、コウガイゼキショウの一種やセキショウが生育している。

周辺の斜面はコナラを主体とする落葉広葉樹二次林が広い面積を占めており、尾根に近い場所ではアカマツが多く混生したアカマツーコナラ群落となっているが、アカマツは近年枯死が進んでおり、すでに枯れた個体の幹が目につく。一方、谷に面した斜面にはホオノキの他、カラスザンショウ、コシアブラなどの落葉広葉樹がコナラに混じって生育するホオノキーコナラ群落が広く見られる。遺跡の平坦地の下方には緩い谷地形に古い棚田と思われる地形が残されており、スギの植林になっている。この他、谷沿いの一部の湿潤地にハンノキの高木が一株生育しており、單木ではあるがハンノキ群落として区分した。

植生図を第 43 図に示した。

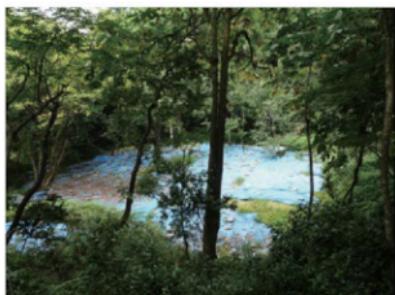


写真 31 コナラ林に囲まれた伝真興寺跡



写真 32 ホオノキーコナラ群落

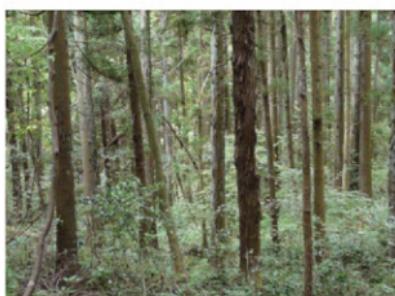
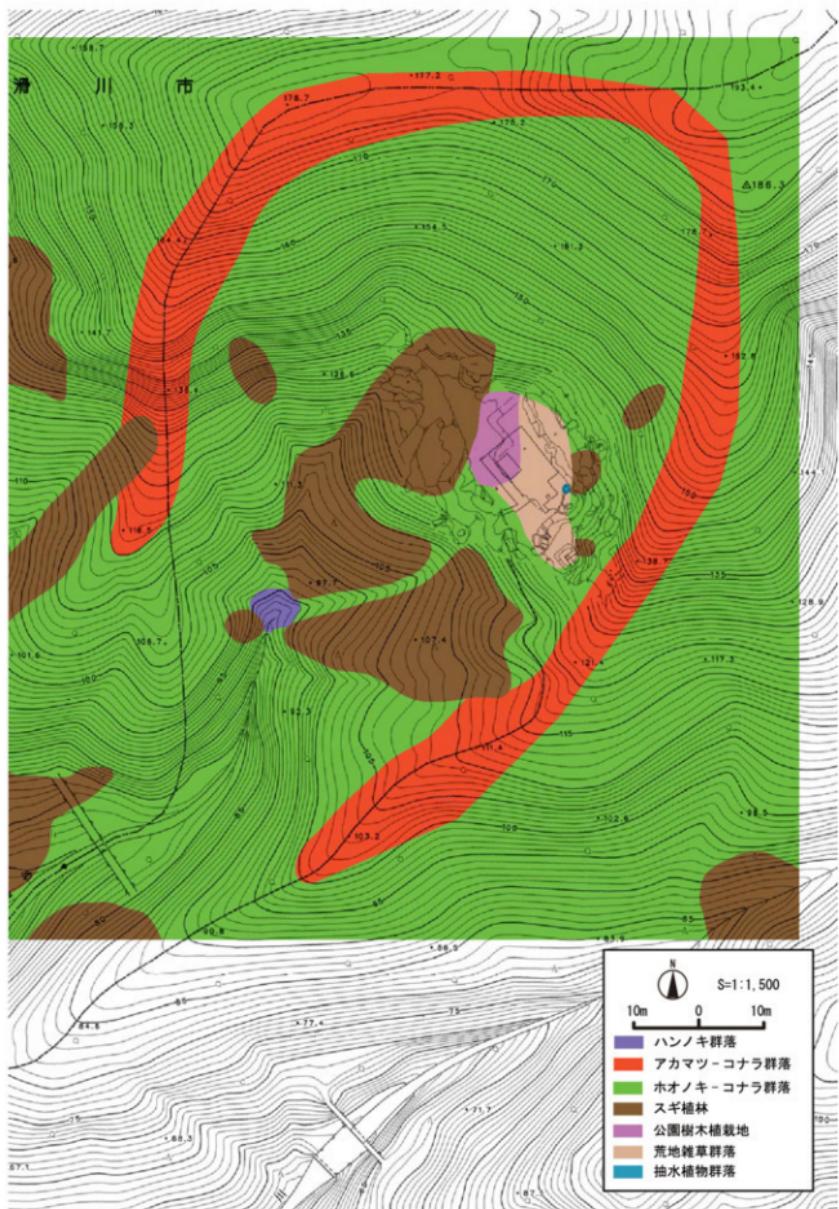


写真 33 スギ植林



写真 34 アカマツーコナラ群落



第43図 伝真興寺跡植生図

(工) 各植物群落の特徴

①ハンノキ群落

高木層にハンノキが優占する湿生林である。伝真興寺跡の谷沿いの1カ所にのみハンノキの高木が単木的にみとめられた。

②アカマツ・コナラ群落

調査地域の各地にはコナラの優占する落葉広葉樹二次林が広く見られるが、特に尾根筋などの乾燥地ではアカマツを交えることが多く、特に伝真興寺跡では比較的顕著である。

アカマツは陽樹であることから人為的に広範囲に伐採された後に成立した群落と考えられ、かつてはアカマツが高木層に優占していた林分が広く分布していたと思われるが、近年はアカマツの枯死が進み、もともとアカマツの下層に生育していたコナラが高木層に達して目立つようになっている。

群落の下層にはネジキ、ホツヅジ、アオハダ、ヒサカキ、マルバマンサク、ナツハゼなどの低木類やケルマバハグマ、ミヤマナルコユリ、タチツボスミレなどの草本類が生育している。

③ホオノキ・コナラ群落

斜面に発達する落葉広葉樹林の多くは、薪炭林として人為的に繰り返し伐採されてきた二次林と考えられ、切り株から萌芽による更新を行うコナラが広い範囲で優占している。近年伐採をされてない場所では高木林が比較的よく発達しており、優占するコナラに加えホオノキ、コシアブラ、ミズキ、ウワミズザクラなど様々な落葉広葉樹が混生している林分が多い。

調査地域ではホオノキの混生が普遍的に目立つことから、これらをホオノキコナラ群落としてまとめた。亜高木層以下にはコシアブラ、アオハダ、リョウブ、オオバクロモジ、ユキバタツバキ、エゴノキ、タンナサワフタギなどの木本類や、シラヤマギク、サジガンクビソウ、チゴユリ、ツルリンドウ、タガネソウ、キバナイカリソウ、トウサクサなどの草本類が見られる。

④スギ植林

スギが植栽された人工林で、各調査地にそれぞれ大小の面積で点在している。水分条件に恵まれた立地に多い。樹高20m前後、胸高直径30～40cm程度の良好に生育した林分が多く見られる。

⑤斜面低木群落

谷に面した急傾斜の斜面の一部は、不安定な上、冬季の雪圧の影響も強く受けることから高木林が発達できず、アプラチャン、オオバクロモジ、タニウツギ、キブシ、ヤマモミジなどの低木林となることがある。

斜面低木群落は、黒川上山墓跡と円念寺山経塚に見られるが、特に円念寺山経塚の郷川に面した急斜面の群落はよく発達している。

⑥伐採低木群落

人為的な伐採により森林植生が破壊された場所では、コナラ、ホオノキ、コシアブラなどの若木に、新たに入り込んだタラノキ、ヤマウルシ、カラスザンショウなどの先駆性樹種が多く加わった伐跡低木群落が発達する。

比較的人為的影響を強く受けやすい立地にある黒川上山墓跡と円念寺山経塚の所々に見られる。この群落は森林の遷移の途上相として一時的に成立するもので、ふつう時間の経過とともにコナラを主体として他の落葉広葉樹を交えた高木林へと発達していくと考えられる。円念寺山経塚の送電線の下に発達した低木群落は、送電線の管理のため定期的に伐採され、低木林の状態が維持されている。

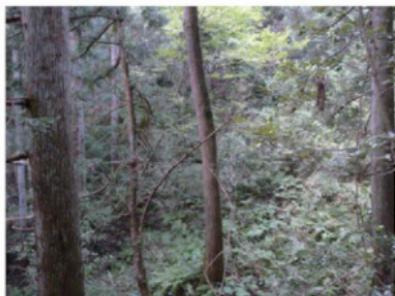


写真 35 ハンノキ群落 (伝真興寺跡)



写真 36 アカマツーコナラ群落
(伝真興寺跡)



写真 37 ホオノキーコナラ群落
(黒川上山墓跡)



写真 38 スギ植林 (円念寺山経塚)



写真 39 斜面低木群落 (円念寺山経塚)



写真 40 伐採低木群落 (円念寺山経塚)

⑦公園樹木植栽地

サクラ類、カキノキ、キリなどを植栽し、人為的な管理を行っている場所で、円念寺山経塚及び伝真興寺跡では遺跡の一部または大部分がこれに該当する。この他、道路沿いの所々にもサクラ類の植栽地が見られる。植栽木は比較的疎らに植えられているため、下層は荒地雑草群落となっている場合が多い。

⑧ツルヨシ群落

円念寺山経塚の北側を流れる郷川の河川敷に見られる、ツルヨシが優占する大型草本群落である。

⑨荒地雑草群落

人為的な擾乱の頻度が高い場所に発達する雑草群落で、遺跡とその周辺の向陽地に多く見られる。メヒシバ、アキメヒシバ、ヒメジョオン、ヌカキビ、ダンドボロギク、カタバミ、シロツメクサ、ウシクサ、メリケンカルカヤなどの人里に見られる雑草が主な構成種である。

⑩放棄水田

耕作を放棄した水田。黒川上山墓跡及び円念寺山経塚の周辺部に見られる。黒川上山墓跡では放棄水田にクログワイ（富山県：希少種）、サワトウガラシ、ニッポンイヌノヒゲ、ホタルイ、キカシグサなど、希少種を含む多样性に富んだ水田雑草群落が成立している。

⑪水田

耕作の行われている水田が黒川上山墓跡の周辺部に見られる。植えられたイネの株間や水田の縁にマツバイ、ミヅハコベ、キカシグサ、ヒロハイヌノヒゲ、コナギなどの水田雑草が生育する。

⑫畑地

耕作の行われている畑地。円念寺山経塚の周辺部に、メヒシバ、スギナ、スイバ、ハルジオン、アキノエノコログサなどの畑地雑草群落などが見られる。

⑬崖・崩壊地

垂直に近い急傾斜の斜面に見られ、植生はほとんど発達せず自然裸地に近い状態か、またはススキ、ゼンマイ、ダイモンジソウ、タニウツギなどが低い被度で生育している。円念寺山経塚の北側を流れる郷川や道路に面した急斜面に見られる。

⑭果樹園

黒川上山墓跡で、斜面下部の土手の上にウメの植栽がされた場所がある。

⑮抽水植物群落

伝真興寺跡の遺跡がのった平坦地の隅に小さな池があり、コウガイゼキショウの一種とセキショウが生育する小規模の抽水植物群落となっている。

⑯開放水域

円念寺山経塚の北側を流れる郷川は、流路に沿って水際にツルヨシ群落が分布しているが、その他は無植生の開放水域となっている。

⑰無植生地

舗装道路や道路法面などの人為的無植生地。



写真 41 公園樹木植栽地（伝真興寺跡）



写真 42 ツルヨシ群落（円念寺山経塚）



写真 43 荒地雑草群落（黒川上山墓跡）



写真 44 崖・崩壊地（円念寺山経塚）



写真 45 果樹園（黒川上山墓跡）



写真 46 抽水植物群落（伝真興寺跡）

(2) 植物相

(ア) 調査方法

調査地域周辺における植物関係の文献として、以下を参照した。

参考文献

名称	著作者	発行年	出版元
新上市町誌	新上市町誌編纂委員会	2001年	上市町
富山県の絶滅のおそれのある野生生物 ・レッドデータブックとやま・	富山県	2002年	富山県

現地踏査では確認された植物種を記録した。貴重種等が確認された場合には確認位置および生育状況をあわせて記録した。調査は1季1回であり、平成20年9月15・16日に実施した。

(イ) 植物相の概況

現地調査の結果、調査地域全体で108科390種類の高等植物が確認された。調査地域は、富山県東部の丘陵地に位置し、地形、地質などの際立った特殊性はなく、概ねこの地域に一般的な植物種により構成されている。

確認された種の中にはトウササクサ、コクランなどの希少な暖地性の森林性植物が含まれており、いずれも伝真興寺跡の花岡谷の中や谷に面した斜面で多く確認された。これは比較的温暖で多湿な環境が関係していると考えられ、調査地域の環境を示す特徴の一つである。

調査地域の植物相（種数）

			①円念寺山経塚	②黒川上山墓跡	③伝真興寺跡
シダ植物			28	10	25
種子植物	裸子植物		3	2	2
	被子植物	双子葉植物	離弁花類	116	83
			合弁花類	59	51
	單子葉植物		40	61	38
合計（種）			250	207	187

「レッドデータブックとやま」によると、富山県で記録されている植物種数は帰化植物を含め約2700種であり、今回の調査では約14.4%の植物が生息していることが確認された。また「新上市町誌」では、上市町に自生する雑管束植物（シダ植物及び種子植物）は108科874種と報告されている。現地調査により確認された390種の中には町誌に掲載されていないものがあり、約160種が新たに記録されたと言える。

植物種出現リストを第6表・第7表に示す。

(ウ) 貴重種

a. 文献調査

「レッドデータブックとやま」によると、上市町で確認されている貴重種は68種である。種名及び指定状況を下記に示す。環境省が発表を行っている国レベルの「絶滅のおそれのある野生生物」に指定されている種は認められなかった。

上市町で記録されている貴重種

指定状況	種 名
絶 滅	キタミシダ、ミシマサイコ
絶滅危惧種	エゾミクリ、ヒメカイウ、ヒメザンソウ、ホシクサ、カキツバタ、ムギラン、エビネ、サルメンエビネ、クマガイソウ、サギソウ、セイタカズムシソウ、ヒツボクロ、マツゲミ、ミスミソウ、トモエソウ、キキョウ、オケラ
危 急 種	ヒロハハナヤスリ、キンラン、サワラン、コイチヨウラン、アリドオシラン、トキソウ、ミヤマツチトリモチ、ヤマシャクヤク、マダイオウ、ミズタガラシ、ヒカゲスミレ、リンドウ、ハルリンドウ、アケボノソウ、センブリ（※）、ミミカキグサ、オミナエシ、カセンソウ
希 少 種	コモチシダ、ミヤコヤブソテツ、キヨミズオオクジャク、ウスヒメワラビ、タカネソモソモ、ウキガヤ、ササクサ、タカネナルコ、ヒメシャガ、カキラン、ホクリクムヨウラン、シロウマチドリ、ツクバネガシ、コミヤマミズ、フシグロセンノウ、シコタンハコベ、ミツモトソウ、マルバスマレ、ドクゼリ、テングノコヅチ、ミツガシワ、ヤマルリソウ、イブキジャコウソウ、ホソバムカシヨモギ、オオニガナ
情報不足	クロヌマハリイ、シロイヌノヒゲ、エゾイトイ、マルバウマノスズクサ、オオバショウマ、ハナビゼリ

※現地調査で確認された種

b. 現地調査

現地調査で確認された390種のうち、「レッドデータブックとやま」に掲載された種は4種である。また、レッドデータブックとやまには記載されていないが、貴重と思われる1種についても併せて記載した。指定状況は以下の通りである。環境省が定めるレッドデータブック及びレッドリストに指定される種は確認されなかった。

貴重種の指定状況

シキミ	レッドデータブックとやま：危急種
センブリ	レッドデータブックとやま：危急種
トウササクサ	レッドデータブックとやま：希少種
クログワイ	レッドデータブックとやま：希少種
コクラン	

①シキミ

常緑性の低木。富山県は日本海側の北縁であり、県内でも生育地が極めて限定されている。円念寺山経塚の遺跡の尾根で1株が確認された。

②センブリ

明るい草地に生えるリンドウ科の一年草。県内では各地に記録があるが、採取のため減少しているとされている。円念寺山経塚で低木林の林縁部に1株が生育しているのが確認された。

③トウササクサ

湿った林床に生育するイネ科の多年草。富山県では旧婦中町、旧小杉町、旧福光町に分布記録があるが、生育地が限られ、個体数も少ないとされている。

伝真興寺跡に8株、黒川上山墓跡に1株がいずれも林床に生育しているのが確認された。

④クログワイ

水湿地に生えるカヤツリグサ科の多年草。富山県では各地に記録があるが、除草剤の使用や水田放棄により著しく減少しているとされている。

黒川上山墓跡周辺の休耕田において10×15mの範囲に群生しているのが確認された。

⑤コクラン

湿った林床に生育する暖地性のラン科の多年草。

伝真興寺跡のスギ林の林床に1株が生育しているのが確認された。石川県では能登地域の一部に分布し、新潟県には分布しない。本種は富山県では記録がないと思われることから、日本海側の分布の東限にあたる可能性がある。富山県レッドデータブックには記載されていないが、貴重種としてとりあげることにした。



写真 47 シキミ (円念寺山経塚)



写真 48 センブリ (円念寺山経塚)



写真 49 トウササクサ (黒川上山墓跡)



写真 50 トウササクサ (伝真興寺跡)



写真 51 クログワイ (黒川上山墓跡)



写真 52 コクラン (伝真興寺跡)

第6表 植物相出現種リスト(1)

番号	科	種	内金寺山 黒川上山廻路 道筋内			内金寺山 黒川上山廻路 周辺			備考
			内金寺山 周辺	黒川上山廻路 道筋内	黒川上山廻路 周辺	内金寺山 周辺	黒川上山廻路 周辺	内金寺山 周辺	
莎草植物									
1	クサソテツ	880/109/30	1		1				
2	コモク	932/7	1		1				
3	ヨモギ	287	1	1	1				
4	カキツバタ	モガツバタ			1				
5	ヒメツバタ	ヒメツバタ	1	1	1				
6	ヨシヨモギ	87/108	1		1				
7	ヨシヨモギ	92/10	1		1				
8	ヨシヨモギ	モガツバタ			1				
9	ヨシヨモギ	モガツバタ			1				
10	ヨシヨモギ	モガツバタ			1				
11	ヨシヨモギ	モガツバタ		1	1				
12	ヨシヨモギ	モガツバタ	1		1				
13	ヨシヨモギ	モガツバタ	1		1				
14	ヨシヨモギ	モガツバタ	1		1				
15	ヨシヨモギ	モガツバタ	1		1				
16	ヨシヨモギ	モガツバタ	1		1				
17	ヨシヨモギ	モガツバタ	1		1				
18	ヨシヨモギ	モガツバタ	1		1				
19	ヨシヨモギ	モガツバタ	1		1				
20	ヨシヨモギ	モガツバタ	1		1				
21	ヨシヨモギ	モガツバタ	1		1				
22	ヨシヨモギ	モガツバタ	1		1				
23	ヨシヨモギ	モガツバタ	1		1				
24	ヨシヨモギ	モガツバタ	1		1				
25	ヨシヨモギ	モガツバタ	1	1	1				
26	ヨシヨモギ	モガツバタ	1	1	1				
27	ヨシヨモギ	モガツバタ	1	1	1				
28	ヨシヨモギ	モガツバタ	1	1	1				
29	ヨシヨモギ	モガツバタ	1	1	1				
30	ヨシヨモギ	モガツバタ	1	1	1				
31	ヨシヨモギ	モガツバタ	1	1	1				
32	ヨシヨモギ	モガツバタ	1	1	1				
33	ヨシヨモギ	モガツバタ	1	1	1				
34	ヨシヨモギ	モガツバタ	1	1	1				
35	ヨシヨモギ	モガツバタ	1	1	1				
36	ヨシヨモギ	モガツバタ	1	1	1				
37	ヨシヨモギ	モガツバタ	1	1	1				
38	ヨシヨモギ	モガツバタ	1	1	1				
被子植物(子葉植物)									
39	アサガホ	7879	1	1	1				
40	アサガホ	28	1	1	1				
41	アサガホ	28	1						
被子植物(子葉植物) 対生葉植物 観葉花類									
42	ハス	47/46	1						
43	ハス	111/111	1						
44	ハス	111/111	1	1	1				
45	ハス	112/112							
46	ハス	113/113							
47	ハス	113/113	1	1	1				
48	ハス	113/113	1	1	1				
49	ハス	113/113	1	1	1				
50	ハス	113/113	1	1	1				
51	ハス	113/113	1	1	1				
52	ハス	113/113	1	1	1				
53	シラヤマツ	1/1	1						
54	シラヤマツ	1/1	1						
55	シラヤマツ	1/1	1						
56	シラヤマツ	1/1	1						
57	シラヤマツ	1/1	1						
58	シラヤマツ	1/1	1						
59	シラヤマツ	1/1	1						
60	シラヤマツ	1/1							
61	シラヤマツ	1/1							
62	シラヤマツ	1/1							
63	シラヤマツ	1/1							
64	シラヤマツ	1/1							
65	シラヤマツ	1/1							
66	シラヤマツ	1/1							
67	シラヤマツ	1/1							
68	シラヤマツ	1/1							
69	シラヤマツ	1/1							
70	シラヤマツ	1/1							
71	シラヤマツ	1/1							
72	シラヤマツ	1/1							
73	シラヤマツ	2/2	1						
74	シラヤマツ	2/2	1						
75	シラヤマツ	2/2	1						
76	シラヤマツ	2/2	1						
77	シラヤマツ	2/2	1						
78	シラヤマツ	2/2	1						
79	シラヤマツ	2/2	1						
80	シラヤマツ	2/2	1	1	1				
81	シラヤマツ	2/2	1	1	1				
82	シラヤマツ	2/2	1	1	1				
83	シラヤマツ	2/2	1	1	1				
84	シラヤマツ	2/2	1	1	1				
85	シラヤマツ	2/2	1	1	1				
86	シラヤマツ	2/2	1	1	1				
87	シラヤマツ	2/2	1	1	1				
88	シラヤマツ	2/2	1	1	1				
89	シラヤマツ	2/2	1	1	1				
90	シラヤマツ	2/2	1	1	1				
91	シラヤマツ	2/2	1	1	1				
92	シラヤマツ	2/2	1	1	1				
93	シラヤマツ	2/2	1	1	1				
94	シラヤマツ	2/2	1	1	1				
95	シラヤマツ	2/2	1	1	1				
96	シラヤマツ	2/2	1	1	1				
97	シラヤマツ	2/2	1	1	1				
98	シラヤマツ	2/2	1	1	1				
薙:魚眼									
99	ツリ	77/77	1						
100	ツリ	77/77	1						
101	ツリ	77/77	1						
102	ツリ	77/77	1						
103	ツリ	77/77	1						
104	ツリ	77/77	1						
105	ツリ	77/77	1						
106	ツリ	77/77	1						
107	ツリ	77/77	1						
108	ツリ	77/77	1						
109	ツリ	77/77	1						
110	ツリ	77/77	1						
111	ツリ	77/77	1						
112	ツリ	77/77	1						
113	ツリ	77/77	1						
114	ツリ	77/77	1						
115	ツリ	77/77	1						
116	ツリ	77/77	1						
117	ツリ	77/77	1						
118	ツリ	77/77	1						
119	ツリ	77/77	1						
120	ツリ	77/77	1						
121	ツリ	77/77	1						
122	ツリ	77/77	1						
123	ツリ	77/77	1						
124	ツリ	77/77	1						
125	ツリ	77/77	1						
126	ツリ	77/77	1						
127	ツリ	77/77	1						
128	ツリ	77/77	1						
129	ツリ	77/77	1						
130	ツリ	77/77	1						
131	ツリ	77/77	1						
132	ツリ	77/77	1						
133	ツリ	77/77	1						
134	ツリ	77/77	1						
135	ツリ	77/77	1						
136	ツリ	77/77	1						
137	ツリ	77/77	1						
138	ツリ	77/77	1						
139	ツリ	77/77	1						
140	ツリ	77/77	1						
141	ツリ	77/77	1						
142	ツリ	77/77	1						
143	ツリ	77/77	1						
144	ツリ	77/77	1						
145	ツリ	77/77	1						
146	ツリ	77/77	1						
147	ツリ	77/77	1						
148	ツリ	77/77	1						
149	ツリ	77/77	1						
150	ツリ	77/77	1						
151	ツリ	77/77	1						
152	ツリ	77/77	1						
153	ツリ	77/77	1						
154	ツリ	77/77	1						
155	ツリ	77/77	1						
156	ツリ	77/77	1						
157	ツリ	77/77	1						
158	ツリ	77/77	1						
159	ツリ	77/77	1						
160	ツリ	77/77	1						
161	ツリ	77/77	1						
162	ツリ	77/77	1						
163	ツリ	77/77	1						
164	ツリ	77/77	1						
165	ツリ	77/77	1						
166	ツリ	77/77	1						
167	ツリ	77/77	1						
168	ツリ	77/77	1						
169	ツリ	77/77	1						
170	ツリ	77/77	1						
171	ツリ	77/77	1						
172	ツリ	77/77	1						
173	ツリ	77/77	1						
174	ツリ	77/77	1						
175	ツリ	77/77	1						
176	ツリ	77/77	1						
177	ツリ	77/77	1						
178	ツリ	77/77	1						
179	ツリ	77/77	1						
180	ツリ	77/77	1						
181	ツリ	77/77	1						
182	ツリ	77/77	1						
183	ツリ	77/77	1						
184	ツリ	77/77	1						
185	ツリ	77/77	1				</td		

第7表 植物相出現種リスト（2）

(3) 保全対策の検討

(ア) 遺跡内に生育する樹木について

『史跡等整備のてびき－保存と活用のために－Ⅲ技術編』によると、史跡等の指定地の内外にある山林のうち、樹木の遷移又は荒廃が進んでいる樹木は適切に管理を行い、地形の保全や遺構の保存に対する配慮が不可欠であると述べられている。

管理手法の一つとして樹木の伐採・伐根がある。伐採対象とする樹木の基準例について以下に示す。

- ①遺構を損壊させるおそれのある樹木
- ②枯損木・病害虫木・傾倒木・湾曲木
- ③密生して成長が劣っている劣勢木
- ④植栽機能の目的上、不要・不適当となった樹木・樹種
- ⑤樹勢が強すぎて周辺に多くの圧力を生じる樹木・樹種
- ⑥諸施設の維持・法面の保全・交通の安全確保・防災上その他悪影響を及ぼす恐れのある樹木

※文化庁文化財部記念物課監修『史跡等整備のてびき』に加筆

各遺跡の内部及び周辺にはコナラ、ホオノキ等の高木が自生し、一部ではカキノキ・キリが植栽されている。現時点では早急に対策が必要な箇所は確認されなかったが、今後樹木の成長に伴う根系の発達や病害虫・自然災害等による樹木の倒伏・根がえりにより、近接する遺構に影響を与える可能性が考えられる。次頁以降で病害虫及び、樹木の根系について検討する。



写真 53 円念寺山経塚の遺跡内の植物



写真 54 円念寺山経塚の遺跡内の植物



写真 55 黒川上山墓跡の遺跡内の植物



写真 56 黒川上山墓跡の遺跡内の植物



写真 57 伝真興寺跡の遺跡内の植物



写真 58 伝真興寺跡の遺跡内の植物

(イ) ナラ枯れと遺跡

富山県では平成14年に県の一部でカシノナガキクイムシによるナラ枯れの被害が確認され、その後平成18年には県内全域に広がっている。

上市町でも平成17年頃からナラ枯れが見られるようになった。遺跡の周辺は大部分がコナラ林であり、伝真興寺跡では遠方からもナラ枯れが確認できる。特に円念寺山経塚と伝真興寺跡では遺跡内のコナラにカシノナガキクイムシの穿入孔やプラス（木屑やカシノナガキクイムシの糞などの混合物）の堆積物が見られる。

穿入後あまり時間が経過していないと思われること、また穿入を受けても枯損しない場合もあること（カシノナガキクイムシの穿入をうけたミズナラは約半分、コナラは約1割がそれぞれ枯損する傾向にあると言われている）から、ナラ枯れが直接遺跡に影響を与えるかは現時点では不明である。

しかし、枯死した樹木は腐朽が進むと土壤緊縛力が低下し倒伏や根がえりが発生しやすくなる。ナラ枯れの被害は周辺の森林や地域に広がることもあり、薬剤注入等の手法も開発されているため、関係機関と協議を行いナラ枯れの進捗程度を観察する必要がある。また、樹木の倒伏や根がえりのおそれが認められる場合は、伐採等の対策を検討する必要がある。



写真 59 伝真興寺跡の遠景とナラ枯れ



写真 60 カシノナガキクイムシの穿入孔



写真 61 伝真興寺跡のコナラ
(穿入孔が見られる)



写真62 円念寺山経塚のコナラ
(プラスが見られる)

富山県の森林関連部局

名 称	住 所
富山県 農林水産部 森林政策課	〒 930-8501 富山県富山市新総曲輪 1-7 TEL : 076-444-3384
富山県 農林水産総合技術センター 森林研究所	〒 930-1362 富山県中新川郡立山町吉峰 3 TEL : 076-483-1511
上市町 産業課 農林技術班	〒 930-0393 富山県中新川郡上市町法音寺 1 TEL : 076-472-1111
立山山麓森林組合 上市支所	〒 930-0361 富山県中新川郡上市町湯上野 69 TEL : 076-472-0458

カシノナガキクイムシについての参考文献

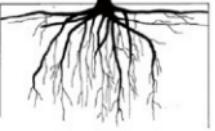
名 称	著作者	発行年
ナラ類集団枯損の見分け方と防除法	富山県林業技術センター林業試験場 http://www.fes.pref.toyama.jp/	2005 年
ナラ枯れの被害をどう減らすか -里山林を守るために-	(独) 森林総合研究所 関西支所 http://www fsm.affrc.go.jp/	2007 年
拡大を続けるナラ枯れ被害 関東・中部地域における推移	関東中部林業試験研究機関連絡協議会 http://www.fes.pref.toyama.jp/	2008 年

※すべて著者が作成した PDF ファイル

(ウ) 樹木の根系と影響範囲

a. 根系の形態

樹木の根系の形態は、垂直分布と水平分布により分けられる。遺跡の周辺で確認された樹木等の根系型を以下に示した。スギは深根型の中間型である。

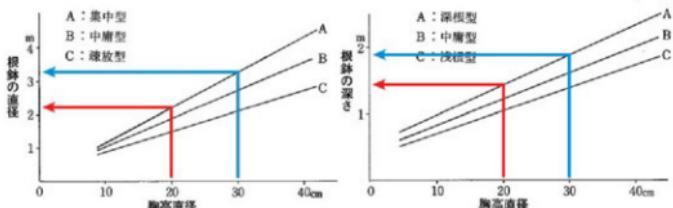
水 平 垂 直	集中型 根系分布が根株の周囲に集中する	分散型 根系分布が根株付近に集中せず 広い範囲にわたる
浅根型 大部分の根系分布 が表層土壤にある	ヒノキ（調査地には出現しない） 	ブナ（調査地には出現しない） 
中間型 根系分布が中庸の 深さにおよぶ	シラカシ、アカガシ 	キリ、カキ、ホオノキ 
深根型 根系分布が堅密	コナラ、クリ 	アカマツ 

第44図 根系の基本的な分布と樹種（「新装版 樹木根系図説」を編集）

b. 根系の影響範囲

良好な生育環境と土壤条件のもとでは、根鉢の大きさは根系のタイプによりその胸高直径からある程度推定できるとされている。

コナラなどの深根集中型の樹木の場合、根の影響が及ぶ範囲は胸高直径が20cmでは直径は約2.2m、深さは約1.4m、胸高直径が30cmでは直径が約3.2m、深さが約2.0mとなる。

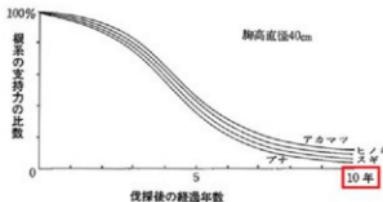


第45図 各根系型の樹木の胸高直径と根鉢の直径及び深さ（「新装版 樹木根系図説」より）

c. 根系の支持力

樹木の伐採、また地上部が枯損した場合、根系は枯損・腐朽が進み支持力（土壤緊縛力等）が減少する。地上部を伐採したブナの根系の例では、伐採から2年が経過すると細根の一部が枯死、5年以降では大径根と根株の周辺部が腐朽する。支持力も伐採後の5年以降に急激に低下し、10年ではほとんどなくなることが報告されている。

黒川上山墓跡では一部に腐朽が進んだ樹木（切り株を含む）が見られる。



第46図 伐採後の経過年数による根系の支持力の変化（「新装版 樹木根系図説」より）



写真63 腐朽が進む樹木（黒川上山墓跡）



写真64 腐朽が進む樹木（黒川上山墓跡）

(工) 伐採・伐根を行う際の留意点

遺跡を保存管理する方法の一つとして樹木の伐採や伐根は有効な手段であるが、伐根は周辺の土壌を掘削したり、既存の根茎を取り除いたりすることにより、作業が直接遺構等を損傷させる場合がある。また、傾斜地では樹木の伐採・伐根により雨水による地表面の侵食、浸透水の増加、表流水の集中により傾斜面の崩壊を助長する可能性がある。対象となる樹木が遺跡に与える影響と伐採や伐根により発生する危険性を、排水設備等その他施設の整備計画と合わせて十分検討する必要がある。

樹木の地上部を伐採後、根系を伐根する必要がない場合は、覆土により根系を埋め込み、根系を自然に腐朽させる方法もある。およそ5年で大径根と根株の周辺部が腐朽するため、覆土の表面に陥没が生じた場合には、その都度土砂の補充等が必要となる。

樹木は遺構と共に遺跡及び地域の景観を形成しているため、伐採及び伐根は遺跡の総合的な保存管理計画をふまえ慎重に検討する必要がある。

参考文献

名 称	著作者	発行年
史跡等整備のてびき - 保存と活用のために -	文化庁文化財部記念物課	2005年
新装版 樹木根系図説	苅住 畿	2007年
河道内の樹木の伐採・植樹のためのガイドライン（案）	(財)リバーフロント整備センター	1994年

3. 動物調査

(1) 調査方法

文献調査及び現地で確認された動物について分類群ごとに整理を行った。参考文献は植物調査と同様である。

参考文献

名 称	著作者	発行年	出版元
新上市町誌	新上市町誌編纂委員会	2001年	上市町
富山県の絶滅のおそれのある野生生物 ・レッドデータブックとやま。	富山県	2002年	富山県

(2) 哺乳類

上市町で確認されている哺乳類は、ニホンカモシカ、ホンドタヌキ、キツネ、ハクビシン等の中型・大型哺乳類が13種確認されており、小型哺乳類はげっ歯類（ニホンリス、及びネズミ類）及び食虫目（モグラ類）である。貴重種は3種であり、その他にニホンカモシカが国の特別天然記念物に指定されている。

調査対象地は平地と山地の境界に位置し、標高は40m～180mである。里山の典型的な種であるノウサギ、テン、アナグマ、アカネズミ、アズマモグラ等が生息すると推定される。また、主に山麓に生息するニホンカモシカやツキノワグマが低標高地でたびたび目撃されていることは、この地域の特徴と言える。

上市町に関連する貴重種の指定状況

種 名	環境省 RDB	RDB とやま	天然記念物
カワネズミ	-	危急種	-
ホンドオコジョ	準絶滅危惧種	希少種	-
ミズラモグラ	-	希少種	-
ニホンカモシカ	-	-	特別天然記念物

※ RDB：レッドデータブック



写真 65 円念寺山経塚の切土面に付けられた
ツキノワグマの爪痕（2008.9.16）

(3) 鳥類

「新上市町史」によると、上市町で確認されている鳥類は 39 科 114 種、富山県の絶滅のおそれのある野生生物に指定されている鳥類のうち上市町に関連する種は 14 種である。その他ライチョウは、文部科学省が指定する特別天然記念物、イヌワシは天然記念物に指定されている。

また、野生生物の生息状況や生息環境は変化しているため、環境省ではレッドデータブックにおける評価を定期的に見直している。第 2 次見直しを反映し平成 19 年 12 月に発表されたレッドリストでは、サシバがランク外から絶滅危惧 II 類に指定された。サシバは、水田、畑、湿地などで生息するカエルやヘビ等の両生類を主な餌とし、里山に生息する猛禽類と言われ、里山の開発などの人為的影響により生息環境が悪化している。サシバは上市町で確認されており、調査対象地周辺は水田や谷が入り組んだ地域であるため、サシバが好む地形と言える。

上市町に関連する貴重種の指定状況（「新上市町誌」より）

レッドデータブックとやま	種名
絶滅危惧種	クマタカ（絶滅危惧 IB 種）、イヌワシ（絶滅危惧 IB 種）、ライチョウ（絶滅危惧 II 種）
危急種	ヤマセミ、ミゾゴイ（準絶滅危惧種）、オオタカ（絶滅危惧 II 種）
希少種	アカショウビン、カワセミ、サンコウチョウ、アオバズク、ケリ、ヨタカ、ハチクマ（準絶滅危惧種）、サンショウクイ（絶滅危惧 II 種）

※ () 内は環境省レッドデータブックのカテゴリー

円念寺山経塚の北面に代表される段丘崖は、高木から亜高木、低木、下草まで比較的狭い範囲に豊かな植生が見られる。これらの植生帯は鳥類をはじめとする多くの動物の飼場やねぐら、移動経路の役割を果たしている。里山の森林に生息するヤマガラ、シジュウカラ、ウソ、エナガ、メジロ等の鳥類は、段丘崖に見られるウワミズザクラ、クリ、シロダモ、ヒメアオキ、ヤブコウジ等の実を餌として利用し、調査地対象地周辺で観察できると推察される。

現地調査では郷川上空で探餌するミサゴが確認された。ミサゴは魚類を餌とし水域生態系の頂点に位置する猛禽類である。飼場となる河川や池と、營巣に適した大きなアカマツ等がある樹林地の環境がそろっていることが生息の条件となる（富山県 RDB：希少種、環境省レッドリスト：準絶滅危惧種）。



写真 66 郷川上空で探餌するミサゴ（2008.9.11）

(4) 両生類・爬虫類

「新上市町史」によると、富山県で生息が確認されている34種の両生類・爬虫類のうち、上市町では27種（約80%）が確認されている。水田や集落の周辺では、アオダイショウ、シマヘビ、カナヘビ、ヤモリ、アマガエルなど、主に森林ではヤマアカガエル、モリアオガエル、クロサンショウウオなどが生息すると推察される。イモリは富山県レッドデータブックで希少種に指定されているが、両生類・爬虫類はため池や湿地の減少や乾田等の農業形態の変化により、生息環境の悪化が危惧されている。

伝真興寺跡は、谷沿いの温潤なスギ林においてシュレーゲルアオガエルが確認された。遺構の一部である池が残されたり、黒川上山墓跡の西側の休耕田は湿地に生育する貴重種であるクログワイが確認されるなど、調査対象地周辺は両生類・爬虫類の生息環境が比較的残っていると推定される。



写真67 シュレーゲルアオガエル
(伝真興寺跡、2008.9.15)

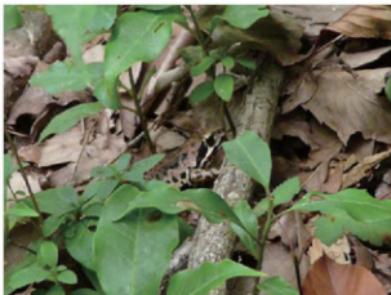


写真68 トノサマガエル
(伝真興寺跡、2008.9.15)

(5) 昆虫類

昆虫類はアゲハチョウやモンシロチョウに代表される蝶類や、カブトムシなどの甲虫類等、野生生物の中でもっと種数が多い分類群である。「富山県の絶滅のおそれのある野生生物」によると、富山県内では寒地性昆虫と暖地性昆虫が交錯し、約8,000種が記録されている。

「新上市町誌」には、85種の蝶類、6種のセミ類、13種のトンボの仲間などが記録されている。上市町で記録されているミヤマシジミは富山県を日本海側の分布の西限とする寒地性の美しい蝶であり、トヤマオオミズクサハムシはオオミズクサハムシの富山県固有亜種である。

上市町に関連する貴重種の指定状況（「新上市町誌」より）

レッドデータブックとやま	種名
絶滅危惧種	ホンサナエ、コオイムシ（準絶滅危惧種）
危急種	モートンイトトンボ、クモマツマキチョウ（準絶滅危惧種）、ミヤマシジミ（絶滅危惧Ⅱ類）
希少種	ササキリ、オオアメンボ、ヨコヅナツチカメムシ、ルイスツブゲンゴロウ、トヤマオオミズクサハムシ、トヤマゴマフアブ

※（）内は環境省レッドデータブックのカテゴリー

ギフチョウは主に広葉樹二次林に生息し、カタクリと共に里山を代表する蝶である。調査対象地では、幼虫の食草となるカンアオイ属のヒメカンアオイなどが確認されており、早春には「スプリング・エフェラメル（春の妖精）」と呼ばれるニリンソウ、キクザキイチゲ、ショウジョウバカマ等の春植物と共にギフチョウが観察できると推察される。



写真69 ミヤマシジミ
(富山県レッドデータブックより)



写真70 ギフチョウ
(富山県レッドデータブックより)

(6) 魚類

「富山県の絶滅のおそれのある野生生物」では、60種弱の淡水魚が富山県内に自然分布していると考えられている。そのうち一生を淡水域で生活する純淡水魚が30種強で、生活史の一部を海で過ごす回遊魚が20種強である。富山県は西南日本の純淡水魚類相の外れに位置しており、さらに山地が海に近く河川が急流で大きな自然湖沼がないため自然分布する純淡水魚の種数は多くない。

「新上市町誌」によると上市町では河川では30種の淡水魚類が確認されており、純淡水魚は16種、回遊魚は14種である。そのうち貴重種は7種であり、その指定状況は以下の通りである。

上市町に関連する貴重種の指定状況（「新上市町誌」より）

レッドデータブックとやま	種名
危急種	カマキリ、アカザ（絶滅危惧II類）、メダカ（絶滅危惧II類）
希少種	ドジョウ、スナヤツメ（絶滅危惧II類）

※ () 内は環境省レッドデータブックのカテゴリー

農業用排水路の三面コンクリート張りへの改修や、河川と水路、水田が段差により分断されたことで、生息および繁殖場所が失われ、ナマズやメダカ、ドジョウの個体数が減少している。

河川内でも、改修工事やダム、堰堤の建設により、生息場所の分断や破壊が起こっている。アカザやカジカは浮き石の下で繁殖を行うため、工事による土砂の流入により繁殖場所が消失している。

「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」により指定されているオオクチバスやブルーギルといった国外移入種は確認されていないが、県内に多く生息しており、自然分散や人為的な放流に注意する必要がある。



写真 71 郷川で確認されたコイ科の一種
(タカハヤと思われる、2008.9.15)

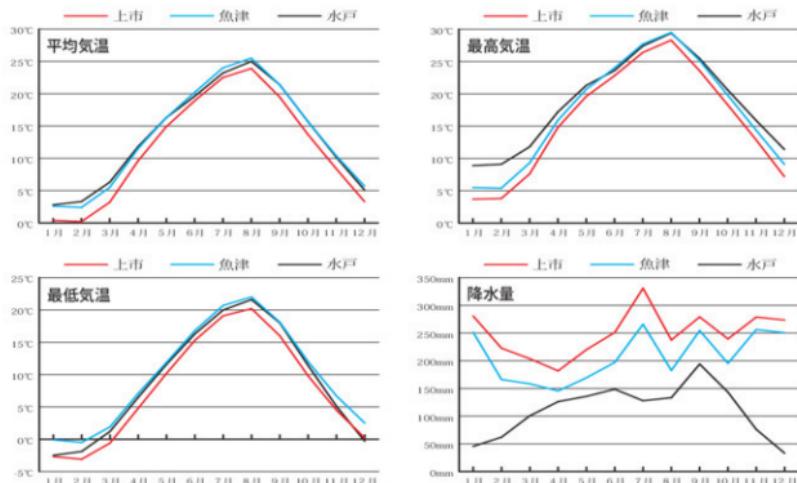
4. 気象調査

(1) 史跡周辺の気象の特徴

史跡周辺での気象観測は行っていないため、ここでは史跡に近い上市観測所（南5km）及び魚津観測所（北11km）のデータを用い、比較として太平洋側のほぼ同緯度に位置する水戸地方気象台のデータを参照する。データはいずれも平年値であり、上市・魚津は1979～2000年、水戸は1971～2000年の平均値である。なお、史跡の立地状況等を勘案すると、魚津の方が史跡周辺の気象の実態に近いものと推測される。

気温は年間を通じて太平洋側とほぼ同様に推移するが、晴天が少ない冬季（12月～2月）は、太平洋側と比べ最高気温は低く、最低気温は高くなる傾向がある。ただし、それでも最低気温の平均は0℃を下回る。

降水量は年間を通じて太平洋側よりもかなり多く、上市では月降水量が200mmを下回るのは4月のみである。年間降水量は上市で3,010mm、魚津で2,522mmである。降水量のピークは1月・7月・9月にあり、冬季はその大部分が降雪によるものである。降雪は12月から4月にかけて観測されるが、特に1月・2月が多く、降雪の深さの合計はそれぞれ184cm・155cm、積雪の深さ最大はいずれも58cmを測る。



第47図 気温・降水量

第8表 降雪・積雪

雪(cm)		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
魚津	降雪の深さ合計	184.0	155.0	36.0	4.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	52.0
	積雪の深さ最大	58.0	58.0	28.0	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	22.0
	降雪の深さ合計	5.0	7.0	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
水戸	積雪の深さ最大	4.0	6.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

(2) 保存管理・整備活用上の留意点

史跡の保存管理・整備活用に際しては、年間を通じた降水量の多さや冬季の積雪・凍結等といった気象条件が史跡に与える影響を十分考慮し、慎重に検討する必要がある。

第3項 社会的調査の結果

1. 土地利用の現状

本史跡の指定地域にかかる土地利用の現状を把握するため、国土地理院による土地利用分類に準拠して史跡指定地域及びその周辺を区分した。

円念寺山経塚、黒川上山墓跡、伝真興寺跡の各指定地域内は、円念寺山経塚で道路用地（一般県道五位尾・上中町線及び円念寺山園地進入路）と公園・緑地等（円念寺山園地・墓地）が含まれる以外は、全て山林・荒地等で占められている。山林・荒地等に区分された地区は、部分的にスギの植林が見られるほかはコナラの優先する落葉広葉樹林が主体的である。このうち主な遺構が分布する範囲においては、発掘調査及びその後の定期的な保全作業時に下草刈りを行っていることで見通しが良い状態が保たれているが、その他の部分においては下草の繁茂が著しい。かつては薪・炭材等を供給する里山としての機能を果たしていたものが、土地所有者の世代交代等の要因によって管理が困難となり、放棄されている状態である。

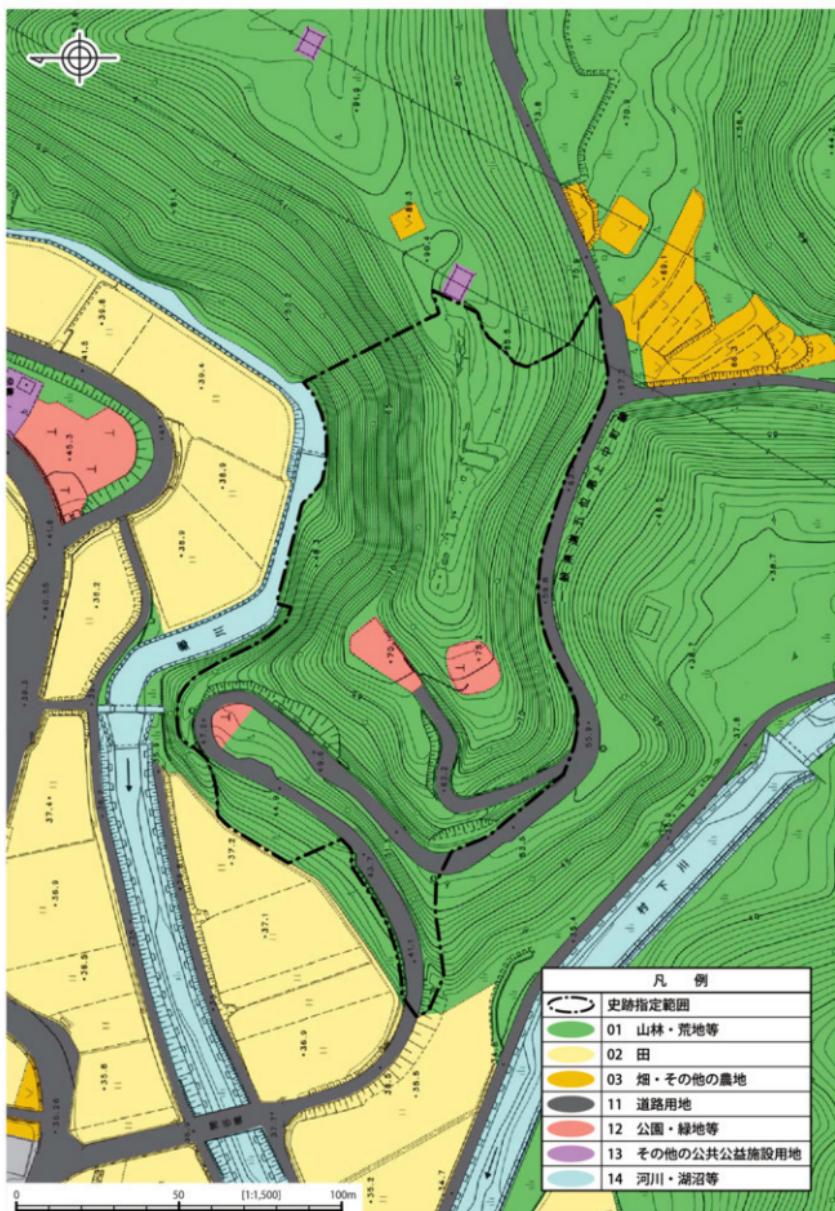
国土地理院による土地利用分類

コード	土地利用分類			定義	
	大分類	中分類	小分類		
01	山林・農地等	山林・荒地等		樹林地、竹林、蘿地、笪地、野草地（耕作放棄地を含む）、裸地、ゴルフ場等をいう。	
02		農地	田	水稻、蓮、くわい等を栽培している水田（短期的な休耕田を含む）をいい、季節により畑作物を栽培するものを含む。	
03			畑・その他の農地	普通畑、果樹園、桑畑、茶園、その他の樹園、苗木畑、牧場、牧草地、採草放牧地、畜舎、温室等の畠及びその他の農地をいう。	
04	造成地	造成中地		宅地造成、埋立等の目的で人工的に土地の改变が進行中の土地をいう。	
05		空地		人工的に土地の整理が行われ、現在はまだ使用されていない土地及び簡単な施設からなる屋外駐車場、ゴルフ練習場、テニスコート、資材置場等を含める。	
06	宅地	工業用地		製造工場、加工工場、修理工場等の用地をいい、工場に付属する倉庫、原料置場、生産物置場、厚生施設等を含める。	
07		住宅用地	一般低層住宅地	3階以下の住宅用建物からなり、1区画あたり100平方メートル以上の敷地により構成されている住宅地をいい、農家の場合は、屋敷林を含め1区画とする。	
08			密集低層住宅地	3階以下の住宅用建物からなり、1区画あたり100平方メートル未満の敷地により構成されている住宅地をいう。	
09			中高層住宅地	4階建以上の中高層住宅の敷地からなる住宅地をいう。	
10		商業・業務用地		小売店舗、スーパー、デパート、卸売、飲食店、映画館、劇場、旅館、ホテル等の商店、憩室、宿泊等のサービス業を含む用地及び銀行、証券、保険、商社等の企業の事務所、新聞社、流通施設、その他これに類する用地をいう。	
11	公共公益施設用地	道路用地		有効幅員4m以上の道路、駅前広場等で工事中、用地買収済の道路用地も含む。	
12		公園・緑地等	公園・動植物園、墓地、寺社の境内地、遊園地等の公共的性格を有する施設及び総合運動場、競技場、野球場等の運動競技を行うための施設用地をいう。		
13			その他の公共公益施設用地		
14	河川・湖沼等			河川（河川敷、堤防を含む）、湖沼、溜池、養魚場、海滨地等をいう。	
15	その他			防衛施設、米軍施設、基地跡地、演習場、皇室に関係する施設及び居住地等をいう。	
16	海			海面をいう。	
17	対象地域外				

(1) 円念寺山経塚における土地利用の現状 (第48図)

遺跡名	地区	分類	概要
円念寺山経塚	指定地	山林・荒地等	全体的にコナラを主体とした落葉広葉樹林が広がるが、部分的にスギの植林が見られるほか、郷川に面した急斜面地には斜面低木林、尾根先端西方の斜面地にはサクラ植栽など、多様な植生が認められる。また、経塚遺構の密集する尾根上は発掘調査に際して伐採を行っている。
		道路用地	一般県道五位尾上中町線及びそこから分岐する円念寺山園地の進入路がある。いずれも敷設時に斜面を大きく掘削しているが、法面は保護工が施されていない部分が多い。
		公園・緑地等	遺跡の立地する尾根の西側斜面に円念寺山園地及び「松本家墓」(※)、またカーブする県道に挟まれた位置に個人墓地がある。前者は斜面を掘削して平坦面を造成している。なお、この地は「黒川良安翁顕彰碑」(現在は穴の谷靈場駐車場そばに移設)の跡地である。
円念寺山経塚	指定地周辺	山林・荒地等	コナラを主体とした落葉広葉樹林をベースとし、部分的にスギの植林が見られる。また、送電線鉄塔の周囲や送電線の下では定期的な伐採が行われ、低木林となっている。なお、指定地の東側境界は送電線鉄塔の管理道である。また、一般県道五位尾上中町線の南側に広がる台地上には区画された畠地が広がるが、現状では大部分が耕作放棄地となっている。
		田	郷川に沿った低地では耕地整理された水田となっている。
		畠・その他の農地	一般県道五位尾上中町線の南側に広がる台地上には区画された畠地が広がる。しかし大部分は耕作放棄地であり、実際に耕作を行っているところは少ない。
		道路用地	一般県道五位尾上中町線、町道黒川護摩堂線及び農道・堤防道路等がある。
		公園・緑地等	郷川を挟んだ対岸の林道黒川線沿いに黒川集落の共同墓地がある。
		その他の公共公益施設用地	指定地の東側尾根上に送電線鉄塔が2基立っている。
		河川・湖沼等	郷川とその支流下川が遺跡の立地する尾根を挟んで西流し、尾根の東側で合流する。

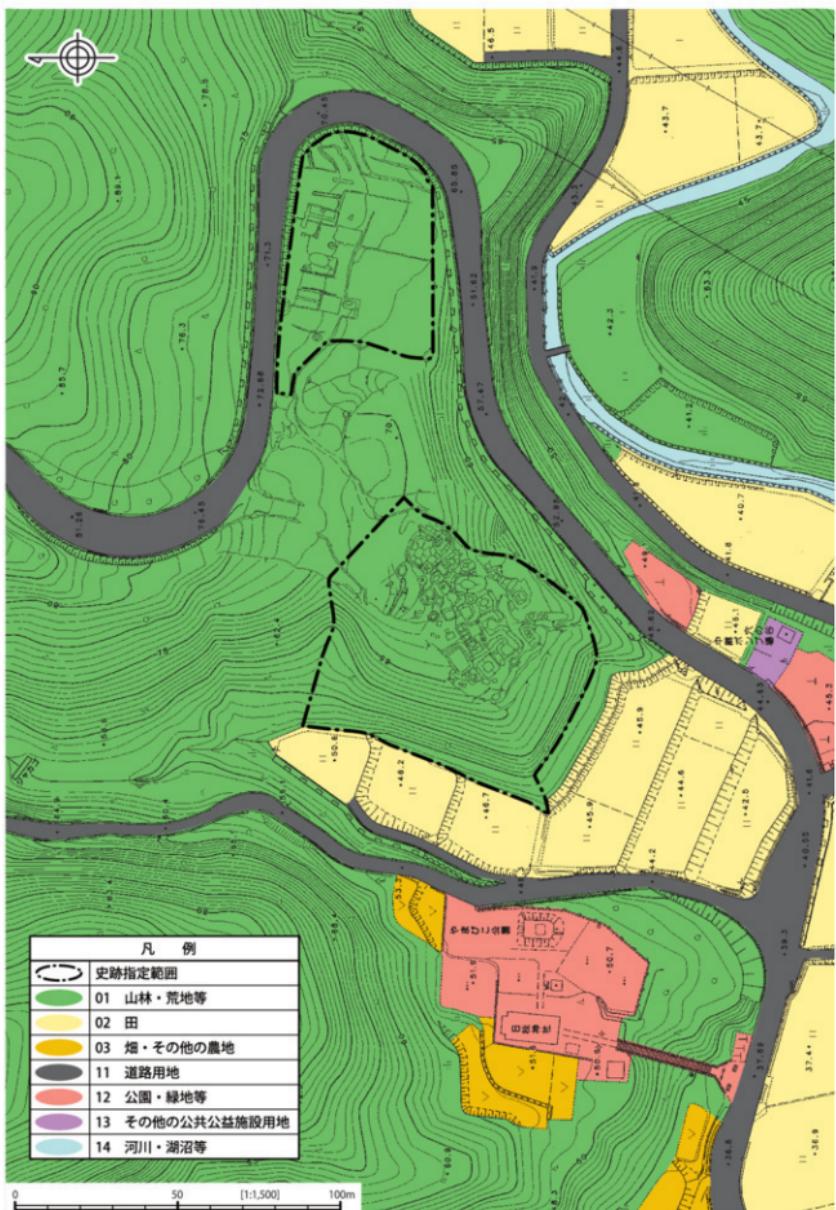
*黒川地区が輩出した「北陸近代医学の祖」と呼ばれる蘭学者「黒川良安」(1817-1890)が建立した、黒川家の本家筋にあたる松本家の墓碑。平成12年の「黒川良安翁110年祭」に際してこの地に移築された。



第48図 円念寺山経塚土地利用区分図

(2) 黒川上山墓跡における土地利用の現状 (第49図)

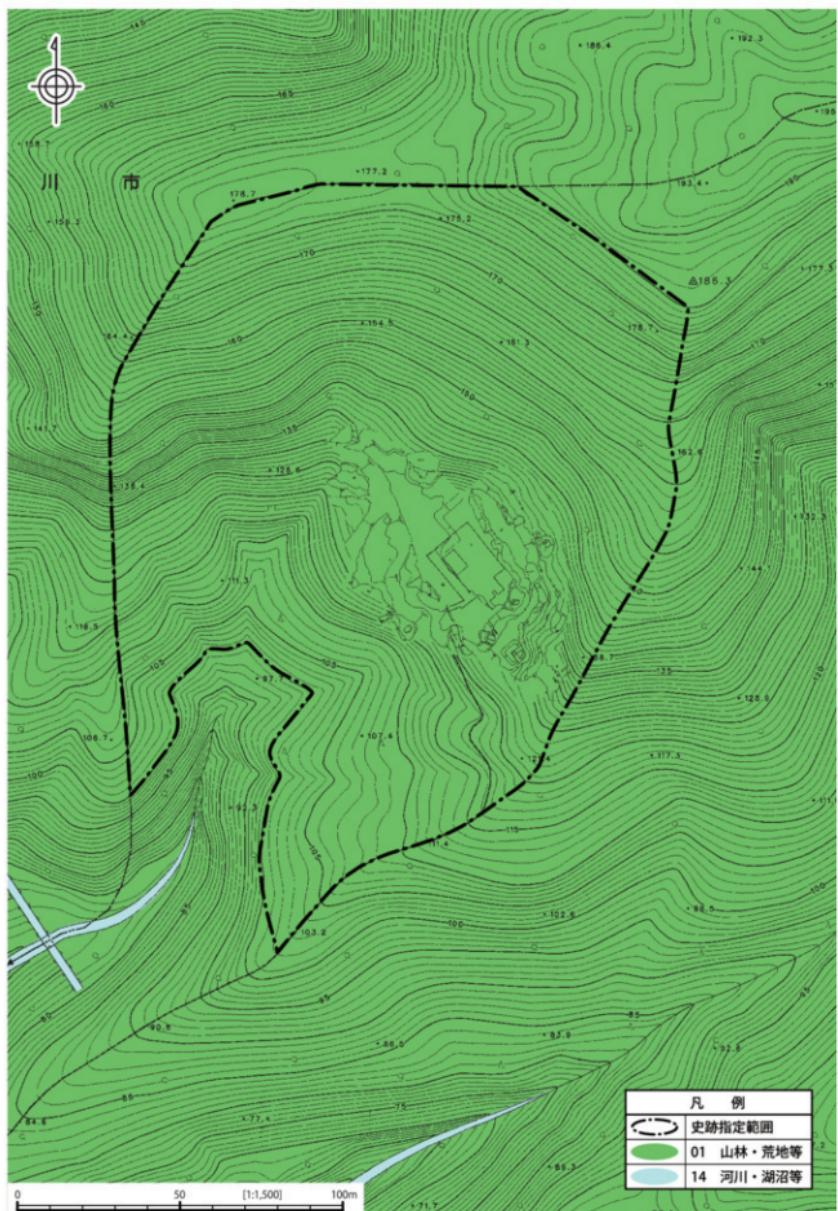
遺跡名	地区	分類	概要
黒川上山墓跡	指定地	山林・荒地等	指定地西地区ではコナラを主体とする落葉広葉樹林が広がるが、その北半部は発掘調査に際して樹木の伐採が行われており、裸地に近い状態となっている。また、南半部のうち墓群の築かれている台地上は発掘調査及びその後の定期的な保全作業時に下草刈りを行っていることで見通しが良い状態が保たれている。指定地東地区は全面にわたってスギの植林が行われているものの定期的な管理はなされておらず、下草が繁茂している。
		山林・荒地等	コナラを主体とする落葉広葉樹林が広がり、部分的にスギの植林が見られる。指定地西地区と東地区の間は一部削平・盛土がなされて旧状が頽なわれており、盛土部分には東屋と水道が設置されている。また、林道黒川線沿いでは近年サクラの植樹が進められている。
	指定地周辺	田	指定地西地区の西～南側に耕地整理された水田がある。西側の水田は休耕中である。
		畠・その他の農地	日枝神社・やまびこ公園の周囲に畠地がある。
		道路用地	指定地を取り巻くように林道黒川線があり、またそれに接続する一般県道五位尾上中町線、町道黒川穴の谷線、町道黒川護摩堂線、農道等がある。
		公園・緑地等	林道黒川線沿いに黒川集落の共同墓地、町道黒川穴の谷線を挟んだ対岸に日枝神社とやまびこ公園がある。
		その他の公共公益施設用地	林道黒川線沿いに穴の谷中継ポンプ場がある。
		河川・湖沼等	遺跡の立地する台地の南側を郷川が西流する。



第49図 黒川上山墓跡土地利用区分図

(3) 伝真興寺跡における土地利用の現状（第50図）

遺跡名	地区	分類	概要
伝真興寺跡	指定地	山林・荒地等	コナラを主体とする落葉広葉樹林が広がり、部分的にスギの植林が見られる。寺院遺構の存在する平坦面はカキノキやキリが植栽されてその周囲は野草地となっているが、発掘調査及びその後の定期的な保全作業時に下草刈りを行っていることで、見通しが良い状態が保たれている。
	指定地周辺	山林・荒地等 河川・湖沼等	コナラを主体とする落葉広葉樹林が広がり、部分的にスギの植林が見られる。 谷川があり、砂防堰堤が設けられている。



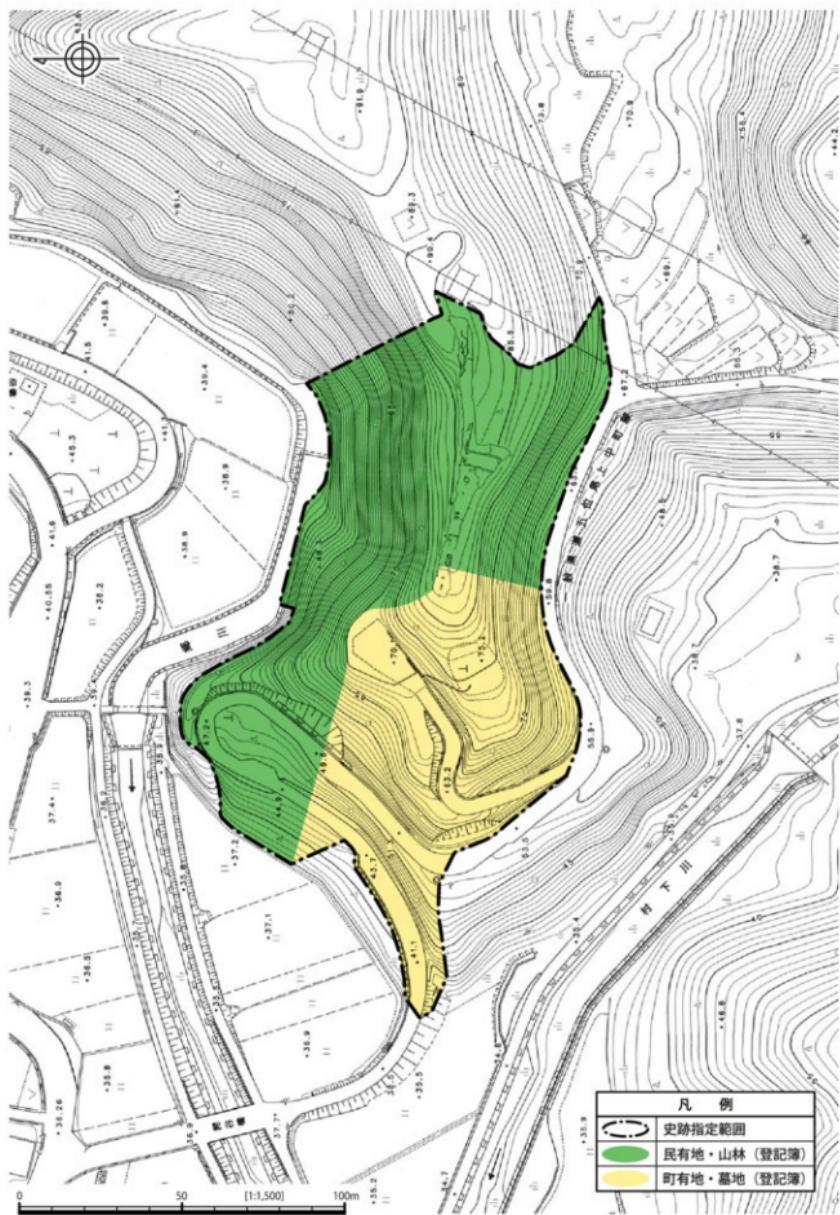
第50図 伝真興寺跡土地利用区分図

2. 土地所有の現状（第51図～第53図）

指定地の土地所有の現状は以下のとおりである。なお、地目は登記簿上の地目であり、実際の土地利用状況とは異なる場合がある。

遺跡名	指定面積 (m ²)	民有地		寺社地		町有地	
		m ²	%	m ²	%	m ²	%
円念寺山経塚	3,778.96	2,759.96	73.03	0	0	1,019.00	26.97
		山林		墓地			
黒川上山墓跡	5,576.29	4,884.29	87.59	0	0	692.00	12.41
		田、畑、山林、原野		山林			
伝真興寺跡	1,416.00	360.00	25.42	1,056.00	74.58	0	0
		山林		山林			
計	10,771.25	8,004.25	74.31	1,056.00	9.80	1,711.00	15.89

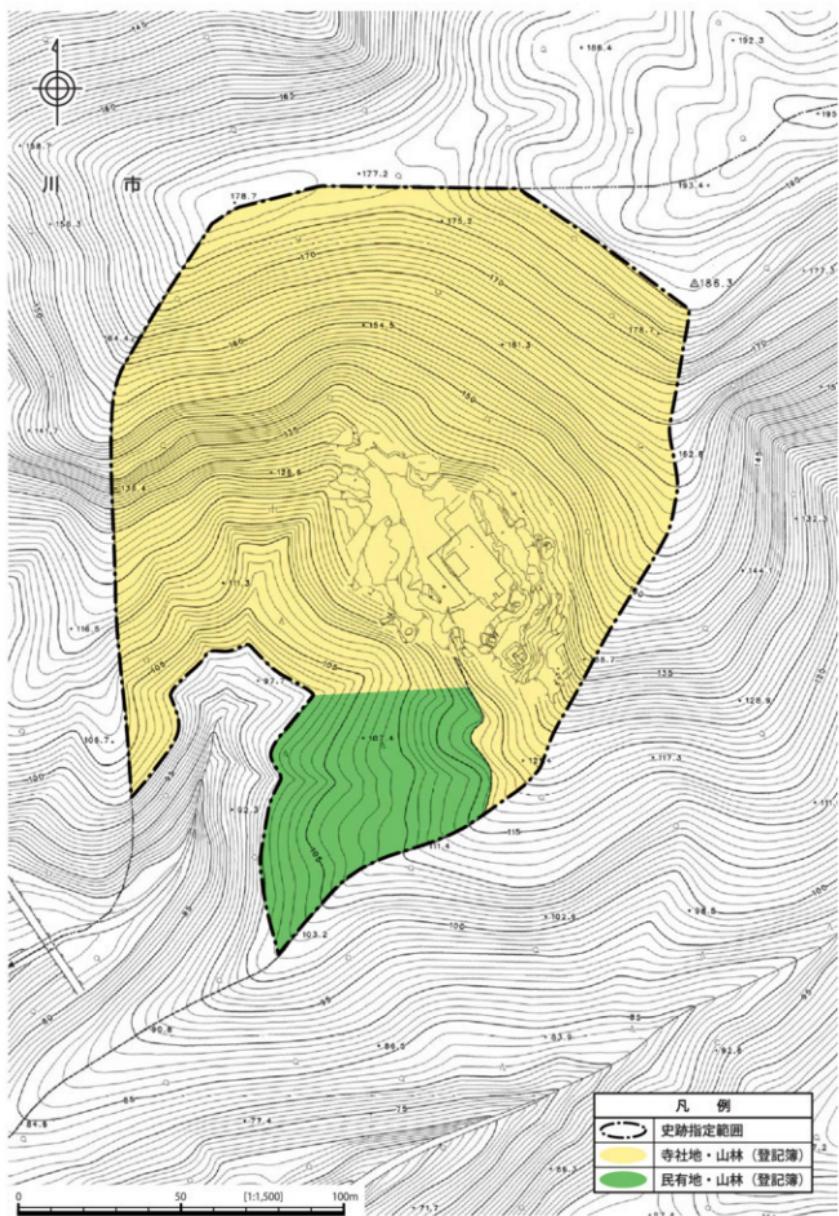
※面積は指定時のもの（台帳面積、一部実測面積）



第51図 円念寺山経塚土地所有区分図



第52図 黒川上山墓跡土地所有区分図



第53図 伝真興寺跡土地所有区分図

3. 史跡にかかる関係法令

(1) 文化財保護法

(ア) 文化財保護法（昭和 25 年 5 月 30 日法律第 214 号）

史跡上市黒川遺跡群は、以下の条文に基づき、史跡に指定されている。

第 109 条 文部科学大臣は、記念物のうち重要なものを史跡、名勝又は天然記念物（以下「史跡名勝天然記念物」と総称する。）に指定することができる。（以下略）

また、史跡指定地内において現状変更を行う際には、許可申請の手続きが必要である。

第 125 条 史跡名勝天然記念物に関しその現状を変更し、又はその保存に影響を及ぼす行為をしようとするときは、文化庁長官の許可を受けなければならない。ただし、現状変更については維持の措置又は非常災害のために必要な応急措置を執る場合、保存に影響を及ぼす行為については影響の軽微である場合は、この限りでない。（以下略）

(2) その他の法令

(ア) 砂防法（明治 30 年 3 月 30 日法律第 29 号）

第 2 条 砂防設備ヲ要スル土地又ハ此ノ法律ニ依リ治水上砂防ノ為一定ノ行為ヲ禁止若ハ制限スヘキ土地ハ国土交通大臣之ヲ指定ス

関係法令：富山県砂防指定地等管理条例（平成 14 年 12 月 20 日富山県条例第 55 号）

第 3 条 何人も、砂防設備を損傷する行為をしてはならない。

第 4 条 砂防指定地内において、次の各号のいずれかに該当する行為をしようとする者は、知事の許可を受けなければならない。ただし、規則で定める軽易な行為については、この限りでない。

- (1) 土地の掘削、盛土、切土その他の土地の現状を変更する行為
- (2) 土石（砂れきを含む。）の採取若しくは鉱物の掘採又はこれらのたい積若しくは投棄
- (3) 立木竹の伐採又は樹根の採取
- (4) 木竹の滑下又は地引きによる搬出
- (5) 施設又は工作物の新築、改築、移転又は除却
- (6) 牛、馬その他の家畜の継続的放牧又は係留
- (7) 火入れ又はたき火

(イ) 地すべり等防止法（昭和 33 年 3 月 31 日法律第 30 号）

第 3 条 主務大臣は、この法律の目的を達成するため必要があると認めるときは、関係都道府県知事の意見をきいて、地すべり区域（地すべりしている区域又は地すべりするおそれのきわめて大きい区域をいう。以下同じ。）及びこれに隣接する地域のうち地すべり区域の地すべりを助長し、若しくは誘発し、又は助長し、若しくは誘発するおそれのきわめて大きいもの（以下これらを「地すべり地域」と総称する。）であつて、公共の利害に密接な関連を有するものを地すべり防止区域として指定することができる。（以下略）

第 18 条 地すべり防止区域内において、次の各号の一に該当する行為をしようとする者は、都道府県知事の許可を受けなければならない。

- 一 地下水を誘致し、又は停滞させる行為で地下水を増加させるもの、地下水の排水施設の機能を阻害する行為その他地下水の排除を阻害する行為（政令で定める軽微な行為を除く。）
- 二 地表水を放流し、又は停滞させる行為その他地表水のしん透を助長する行為（政令で定める軽微な行為

を除く。)

三 のり切又は切土で政令で定めるもの

四 ため池、用排水路その他の地すべり防止施設以外の施設又は工作物で政令で定めるもの（以下「他の施設等」という。）の新築又は改良

五 前各号に掲げるもののほか、地すべりの防止を阻害し、又は地すべりを助長し、若しくは誘発する行為で政令で定めるもの

（ウ）農業振興地域の整備に関する法律（昭和44年7月1日法律第58号）

第6条 都道府県知事は、農業振興地域整備基本方針に基づき、一定の地域を農業振興地域として指定するものとする。

（工）農地法（昭和27年7月15日法律第229号）

第3条 農地又は採草放牧地について所有権を移転し、又は地上権、永小作権、賃権、使用賃借による権利、賃借権若しくはその他の使用及び収益を目的とする権利を設定し、若しくは移転する場合には、政令で定めるところにより、当事者が農業委員会の許可（これらの権利を取得する者（政令で定める者を除く。）がその住所のある市町村の区域の外にある農地又は採草放牧地について権利を取得する場合その他政令で定める場合には、都道府県知事の許可）を受けなければならない。（以下略）

第4条 農地を農地以外のものにする者は、政令で定めるところにより、都道府県知事の許可（その者が同一の事業の目的に供するため4ヘクタールを超える農地を農地以外のものにする場合（農村地域工業等導入促進法（昭和46年法律第112号）その他の地域の開発又は整備に関する法律で政令で定めるもの（以下「地域整備法」という。）の定めるところに従つて農地を農地以外のものにする場合で政令で定める要件に該当するものを除く。）には、農林水産大臣の許可）を受けなければならない。（以下略）

第5条 農地を農地以外のものにするため又は採草放牧地を採草放牧地以外のもの（農地を除く。次項において同じ。）にするため、これらの土地について第3条第1項本文に掲げる権利を設定し、又は移転する場合には、政令で定めるところにより、当事者が都道府県知事の許可（これらの権利を取得する者が同一の事業の目的に供するため4ヘクタールを超える農地又はその農地と併せて採草放牧地について権利を取得する場合（地域整備法の定めるところに従つてこれらの権利を取得する場合で政令で定める要件に該当するものを除く。）には、農林水産大臣の許可）を受けなければならない。（以下略）

各法令の該当状況

	円念寺山経塚	黒川上山墓跡	伝真興寺跡	備考
砂防法	○		○	「郷川砂防指定地」 「黒川谷川砂防指定地」
地すべり等防止法			○	「地すべり防止区域 黒川」
農業振興地域の整備に関する法律	○	○	○	
農地法		○		

4. 史跡周辺の社会的環境

(1) 交通の現状

本史跡は上市町市街地から北東約4kmの山間部に位置する。史跡を来訪するための公共交通機関としては、富山地方鉄道本線上市駅からコミュニティバス（町営）を利用することが可能であるが、現状では日に3本のみの運行とあまり現実的ではない。そのため、自家用車による来訪が主となるものと推定される。なお、上市駅からタクシーを利用した場合、黒川地内までは約5km（約12分）である。

自家用車での来訪時には、北陸自動車道あるいは国道8号線から富山中部広域農道（通称「スーパー農道」）を介绍了ルートが一般的である。その場合、黒川地内までは北陸自動車道滑川ICからは約5km（約12分）、同立山ICからは約10km（約22分）、国道8号線（滑川市内）からは約7km（約15分）である。なお、富山県の玄関口である富山空港からは高速道路利用で約30km（約35分）、JR富山駅からは一般道利用で約20km（約40分）である。

(2) 周辺の主な文化財

史跡周辺で一般に見学が可能な文化財としては、次のようなものがあげられる。本史跡の背景となる「立山信仰」に関連したものが多く、遠隔地からの来訪に際してはセットとして捉えることが可能である。

・国指定文化財

上市町内では大岩日石寺磨崖仏（彫刻）及び大岩日石寺石仏（史跡）があり、町外では雄山神社前立社壇本殿（建造物）、旧鶴家住宅（建造物）、木造慈興上人坐像（彫刻）、雄山神社中宮祈願殿、銅造男神立像（彫刻）、立山博物館、銅鋤枕頭附鉄劍（劍岳発見）（工芸品、立山博物館）などがある。

・富山県指定文化財

上市町内では、木造大徳宗令禪師頂相（彫刻）、眼目山立山寺（立山寺参道のとが並木（天然記念物）、宮川の大けやき（天然記念物））がある。また町内の県指定文化財のうち本史跡と関連するものとしては、立山参道の石塔並びに石仏群（有形民俗文化財、岩崎寺～室道）、芦ヶ瀬圓魔堂の仏像群（有形民俗文化財）などがある。なお、その他県指定史跡としては松倉城跡（魚津市）、本江遺跡（滑川市）、稚児塚（立山町）がある。

・上市町指定文化財ほか

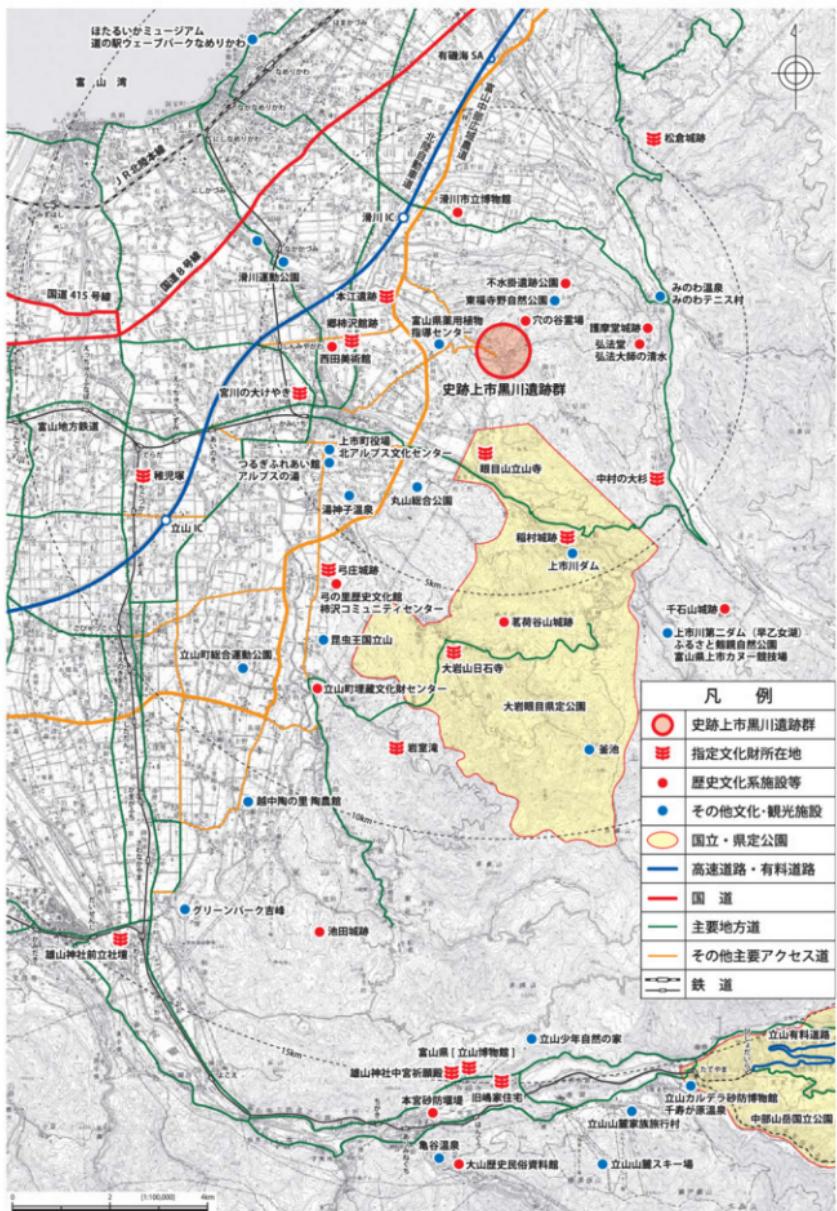
上市町指定文化財のうち、本史跡との関連が想定されるものとしては大岩山日石寺山門（建造物）、大岩山日石寺三重塔（建造物）がある。また、史跡としては弓庄館城跡・稲村城跡・中世豪族屋敷跡（郷柿沢館跡）といった中世城館群などがある。なお、未指定の中世城館としては護摩堂城跡・千石山城跡などがある。

(3) 周辺の主な文化・観光施設

本史跡から車で約20分の位置には町内遺跡の出土品を一括して収蔵・展示する「弓の里歴史文化館」があり、本史跡出土品も展示の目玉のひとつとなっている。その他博物館・美術館関係では、西田美術館、滑川市立博物館、立山町埋蔵文化財センター、富山県（立山博物館）、大山歴史民俗資料館、立山カルデラ砂防博物館などがある。

その他主要な観光施設としては、町内でも屈指の観光地である穴の谷盡場（全国名水百選）が本史跡に隣接し、史跡の活用に際しては最も緊密な連携が要求されることとなる。また、富山中部広域農道の沿線には大岩山日石寺・眼目山立山寺という多くの文化財を抱えた著名な観光名所があり、さらにその延長線上には世界的な観光地として知られる「立山」が控えている。

本史跡の整備・活用にあたっては、史跡を核とした比較的限定的なエリアにおける計画にとどまらず、立山山麓地域一帯を視野に入れた広域的なネットワークの構築を検討していく必要がある。



第54図 史跡周辺施設等位置図

第3章 保存管理

第1節 基本方針

史跡上市黒川遺跡群は、円念寺山経塚・黒川上山墓跡・伝真興寺跡の3遺跡が山中に一定の距離を置いて分布している。面積は指定時の台帳面積（一部実測値含む）では 10,771.25m²であるが、実際には 5ha を超える広大なものである。指定地の大部分が山林（山林化している畠地等を含む）であることなどから直ちに大規模な開発に直面する可能性は低いが、その一方で山地という立地条件により土砂流出や地形崩壊に伴う遺構の損壊が懸念される。また、小規模な開発行為が発生する可能性は十分想定されることや、近年では地権者の高齢化や世代交代などにより土地の管理も困難となってきていることなどからも、適切な保存管理の方策が必要である。

そこで、上市黒川遺跡群を適切に保存管理していくための基本方針を次のとおり定める。

- (1) 史跡上市黒川遺跡群を構成する諸要素を特定し、その本質的価値を明確に把握した上で、確実な史跡の保護を図る。
- (2) 遺構の分布状況や土地の現状を踏まえた適切な地区区分に基づく保存管理基準を遺跡ごとに設定し、史跡の保存管理を図る。また、より確実な史跡保存を行うために用地の公有化を進める。
- (3) 史跡指定地のみならず、その周辺環境をも含めた一体的な保全の方策を講ずる。
- (4) 確実な保存管理を行っていくために、適切な整備・活用に関する施策を推進する。
- (5) 地域に根ざした包括的な保存管理を進めるために、運営の方法及びそれらを進める上で必要となる体制の整備を行う。

第2節 構成要素

第1項 史跡の本質的価値を構成する諸要素

史跡上市黒川遺跡群の本質的価値を構成する要素は、経塚の集石、墓の墳丘・集石・周溝、建物の基壇・礎石など地上に表れている遺構と、地下に埋蔵されている遺構・遺物等、そしてそれらを含む一定の広がりの空間である。それらについては第2章第3節第1項で記述したが、ここであらためて概略を記す。

1. 円念寺山経塚

立地：標高 83～87 m の細尾根上に立地。

種別：経塚。

遺構：経塚（石椁）24 基、壇状集石 1 基、塚状遺構 1 基、不定形集石 12 基、不明遺構 3 基を確認。

遺物：金銅独鉛杵、銅磬、銅鏡、短刀、火打金、青白磁製品、珠洲経筒外容器・四耳壺ほか。

時期：12世紀後半。

眺望：東方に鶴岳、北方に黒川上山墓跡・伝真興寺跡、西方に平野部・日本海を望む。

遺存状況：一部盗掘や崖面崩落による集石の損壊等が認められるが、主体部の遺存状況は概ね良好である。

2. 黒川上山墓跡

【西地区】

- 立 地：標高 62 ~ 69 m の舌状に張り出した台地上に立地。
 種 別：墓地。
 遺 構：墳丘墓、集石墓、土塁上墓、塔墓、土壙墓等からなる 67 基の埋葬施設、墓道を確認。
 遺 物：白磁四耳壺、珠洲壺、珠洲片口鉢、八尾壺、土師器皿、五輪塔、板碑ほか。
 時 期：12 世紀後半～15 世紀初頭。
 跳 望：東方に劍岳・立山（雄山）及び護摩堂地区、南方に円念寺山経塚、西方に黒川集落を望む。
 遺存状況：概ね良好であるが、一部風雨による侵食や集石の乱れが見られる。

【東地区】

- 立 地：標高 68 ~ 75 m の台地上に立地。西地区との間に小規模な谷を挟む。
 種 別：墓地、寺院？
 遺 構：墳丘墓 6 基のほか礎石建物跡、掘立柱建物跡等を確認。
 遺 物：須恵器、土師器、珠洲ほか。
 時 期：9 世紀～12 世紀
 跳 望：東方に劍岳・立山（雄山）及び護摩堂地区、南方に円念寺山経塚、西方に黒川集落を望む。
 遺存状況：全体的に後世の耕作により改変を受けている。

3. 伝真興寺跡

- 立 地：標高 120 ~ 135 m の山中の谷頭にある平坦面上に立地。
 種 別：寺院。
 遺 構：本堂・塔・堂と推定される基壇及び礎石建物跡、山門、参道、池、土壙等を確認。
 遺 物：須恵器、土師器、珠洲、越中瀬戸ほか。
 時 期：9 世紀～18 世紀。
 跳 望：平坦面からは西方に平野部・日本海を望む。また、東側の尾根上からは南方に円念寺山経塚・黒川上山墓跡、東方には劍岳・立山（雄山）を望む。
 遺存状況：全体的に後世の耕作による改変を受けているが、区割りは良好に遺存している。

第2項 史跡の本質的価値を構成する諸要素以外の要素

1. 円念寺山経塚（第55図、写真72～写真73）

指定地域内には、一般県道五位尾上中町線、円念寺山園地及びその進入路、個人墓地がある。またほぼ全体が樹木に覆われ、斜面には倒木がある。樹木の一部は経塚・集石造構に干渉している。

一般県道五位尾上中町線には、付帯物としてガードレール、カーブミラー、ポール等があり、また要所に擁壁・石垣、側溝がある。

円念寺山園地は崖側に擬木柵とサクラ植樹、斜面側には石垣と側溝がある。丘陵上部へと至る徒歩道の入口には昭和12年に植樹された「明治天皇御覧之真賀木」があり、石製の標柱を伴う。徒歩道を登った先の平坦地には平成12年の黒川良安翁110年祭に際して移築された「松本家墓」（※）があり、またその背後斜面にはこれを記念したサクラの植樹（木製標柱を伴う）が行われている。円念寺山園地の進入路には側溝があり、道沿いには黒川良安の年譜を紹介した解説板がある。

指定地外の東側には（株）関西電力の送電線鉄塔があり、その管理道が指定地の境界ともなっている。

※黒川地区が輩出した「北陸近代医学の祖」と呼ばれる蘭学者「黒川良安」（1817－1890）が建立した、黒川家の本家筋にあたる松本家の墓碑。

2. 黒川上山墓跡（第56図、写真74～写真75）

指定地西地区では、北縁部付近に平成12年に設置した「黒川上山古墓群」（旧称）の解説板がある。また、ほぼ全体が樹木あるいは伐採後の切株に覆われており、墳丘墓や集石墓など地上に表出している遺構の上部にも多く存在している。南～西側には上下2段に水路がめぐり、一部コンクリート製の擁壁が設置されている。斜面には立ち枯れした樹木や倒木が残されている。

指定地東地区は全面にわたって杉の植林がなされている。また、北・東・南側には林道黒川線の法面・擁壁及び側溝がめぐっている。

指定地西地区と東地区の間の空閑地（指定地外）は一部削平・盛土によって旧状が損なわれ、また東屋・水道、マンホールが設置されている。

3. 伝真興寺跡（第57図、写真76）

指定地域全体を樹木が覆う。また、平坦面の縁部には発掘調査時の土壠が積まれている。本堂跡の背後には炭窯がある。平坦面背後の急斜面上部の平坦面の肩部には、「地すべり防止区域」のコンクリート標柱が建てられている。

南側の谷部下流には砂防堰堤が設置されており、土地の境界には管理者である「富山県」の表記のあるコンクリート標柱が建てられている。指定地の東側には里道を挟んで滑川市有地（上市町地内）があり、その境界には「滑川市」と表記のあるコンクリート標柱が建てられている。